
吸血鬼にも愛は必要？(仮)

U16

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼にも愛は必要？（仮）

【Nコード】

N1259Y

【作者名】

U16

【あらすじ】

西暦2100年。世界は緩やかな停滞期を迎えていたが、20世紀から大きく変わった事は吸血鬼という存在が世界中で認められた事だった。そんな中、新たな吸血鬼が極東の島国である日本で生まれた……

第01話 新世紀を迎えて……（前書き）

この小説は筆者の自己満足小説です。

予告なく文章が変更、改訂される恐れがあります。

ご注意ください。

第01話 新世紀を迎えて……

恐らく彼は、自分の30年に満たない人生の中で、最も驚きに満ちた顔をしていたのではないだろうか。

美女。美人。綺麗。

学校に通っていた時も文系ではなかった彼の頭の中には語彙が少なく、その3つの単語しか出てこなかった。

彼は、こんなにも印象的な女性を見たのは、初めてだった。

西暦2100年を迎えてからまだ2日目。

テレビをつければトップモデルや女優、ネットアイドル等これでもか、というくらいに整った顔立ちや扇情的なボディラインの女性を見る事ができる。そんな現代では、彼女程度の顔立ちの美人はいくらでもいるだろう。

はつきり言ってしまうと、ありふれている。少なくとも彼の偶像愛好家な友人は、そう評価するだろう。

先進国 経済的富裕国。そう呼ばれる国々の医学は革新的な発達こそしなかったが、個人登録とDNAレベルでの病気の予防を兼ねた健康診断。この二つを小学校に入学する前の子供が済ませるのが当たり前になり、成人するまでの病気で死亡率は、ほぼ「0」になった。それと同時に流行したのがDNA形成型整形手術だった。個人登録と同時にDNA形成型整形手術を受け、成人するあたりで美男美女になれるように、DNAをいじるのが当たり間の世の中である。

そんな早期美容整形が当たり前になったせいもあり、世の中はよ

り本質重視になった。

第一線で活躍する人材は、顔は良くて当たり前。スポーツ選手であれば運動神経や力よりも技術、芸人なら面白さ、役者は演技力、歌手は歌唱力、モデルであれば完璧に維持されたスタイルを駆使した無言の表現力、そういったDNAの書き換えでは得られないモノが重視された。主義主張のぶれるコメンテーターなど過去の遺物でしかなかったし、テレビからも見た目だけの中身の無いものは排除された。

人は日々の努力が無くては得られない部分が評価され、物であればその本質的な価値以外、全く評価されない時代が半世紀も前から続いている。

そんな訳で彼からすれば、見慣れた程度である筈の女性から

西暦1980年代生まれの曾祖父の影響で『でも20世紀あたりなら、間違いなくトップモデルだっただろうなあ』等と頭の片隅では考えていたが 何故か目が離せなくなった。

灰色っぽい髪。同色の瞳。

もしかしたら昼間見れば銀色なのかもしれない髪と眼が、彼の心を驚掴みにしているので彼は身動きが取れなかった。

彼女は温暖化のせいで、冬なのに本気でコートを着込む人も少なくなってしまった日本には珍しい、厚手の純白のコートを肩に羽織っている。

そのコートの合間から見えている服は紺一色のロングのワンピース。柄や模様が特に無く、体のラインが出る様にデザインされているせいで、スタイルが良いという事ははっきりとわかった。そしてそんな服は日本では一般的ではなく、超の付く高級品である事は彼の乏しい知識でも認識できていた。

服装もそうなのだが、日本人ではなかなか見かける事のない腰の
高さが目を引く。不健康に見えない程度に透き通るような白い肌と
相まって、外国人なのだろうと考えていた。

彼は、そんな彼女をじつと見つめて観察していた事に対し『失礼
だよな』と思い至る。謝罪しよう　会話したかっただけかもしれない
ない　として、外国人なら言葉が通じないかもしれないと気付く。
急いで携帯を取り出そうとしたが　携帯電話の10ヶ国語翻訳機
能を使おうと思いついたのだ　彼女から目が離せないまま、何処
に入れたのか分からない携帯電話を探し、手探りで服のあちこちの
ポケットを漁る。

「……………やつと外に出て来た……………遅すぎです……………」

焦らなくても良いですよ。逃げたりしませんし。」

「え？　あ、すまない。ジロジロ見て申し訳ない。日本語が通じて
良かった」

彼女もまた、俺を見つめたままできてくれた

……………いや、違う。言葉が通じて良かった……………」

でも何故だろう。彼女の表情は、家で飼っていた猫がよくやって
いた表情に似ている気がする。

拗ねた様な　喜びを隠しながらも、怒っていますという感情を
出そうとして出し切れていない表情　『もう二度と目を離しませ
んよ』そういう眼差しで見ている。と、彼は何故かそう思った。

彼は寝正月を満喫する為、たまたま無くなりそうな煙草と酒を補
給する目的で、嫌々ながら家から出てきて彼女に出会った。

大晦日の終わりまで続いた仕事からやっと解放され、家に辿り着
いたと思った瞬間に曾祖父を含む、家族全員に強制的に近場の神社
へと初詣に連行された。

近場の神社で　たしか学業と雷の神様を祭っていたはずで、『

学生でもない俺には意味が無いんじゃないか？」という彼の意見は、家族一同に却下された。年越しと初詣を済ませて家に戻ってから、一歩も外に出ていなかった。

正月だし、商店街から少し離れたコンビニエンスストアぐらいしか開いていない。どうせ車も走っていないのだ。歩道橋を上がらず道路を渡るうとして、歩道橋の下にいた彼女から目が離せなくなった。

目が合った瞬間から、本当に一度も目を逸らしていない。瞬きすらしていないんじゃないかと、彼自身がそう思うほど見つめていた。彼女の言動をもっと見たい。彼女について知りたい事が溢れてくる。それにも関わらず、彼の体は何も行動を起さなかった。じつと見つめ、彼女の出方を待つことしかできない自分はヘタレだと、彼は心の中で凹んでいた。

彼女の視線や表情は、先程からの彼の予想通りの意味を持っていた。が、それに加えて少しどころか120度位、方向性の外れた事を、具体的には、此处で会ったが百年目。如何にして今迄の鬱憤をぶつけて困らせてやろうか。という様な少々物騒な事を、彼女は考えていた。

もちろん。彼にはそれは解らなかったし、彼女は現段階の彼が解っていないくても困らなかつたし、仕方のない事だと理解していた。

故に彼女は思惑通り、普段とは違う可愛らしい仕草で話しかけた。

「携帯電話は、もう出さなくていいの？」

「え。あ、いや。もし外国の人なら翻訳機があるかな、と思ったただけで……」

「連絡先を聞きたかった。とかではなく？」

「あ、いや。教えてくれるなら聞きたいけど……って、ちがう！ナンパじゃないんだ！」

「あら、そうなの。ナンパなのかと少しは期待したんですけど……」

そう言って彼女はお上品に口元に手を当ててクスリ、と笑った。その瞬間、彼は自身でもはっきり分かるぐらいに顔が熱くなった。

あー、やべ。今マジで真っ赤になってるわ。マジかよ。今幾つだか言ってみる俺！ 28歳、四捨五入すりゃ30だぞ！？ 色々経験も積んだだろうが！？

彼は何故そうなるのか訳が分からなかったし、その思考を始めすべての事が彼にとって、もはや意味不明だった。からかうように話しかけてくる彼女の意図も、自分のヘタレっぷりも。

何故、彼女の態度から勝手に意思を読みとったつもりになったり、彼女の行動に好意を期待したりしているのか。

彼は少なくとも恋人どころか、妻すら居た事のある身である。妻とは一年前に離婚し、それ以降どんな女性にも普通の友人曰く、醒めた対応だけはできる様になったはずだった。なのに、何故こんなに焦っているのだろうか。彼の頭の中は整理するどころか、幼稚園児の書いた題名のない絵の様にぐちゃぐちゃで訳が解らなかった。

「今の今まで半信半疑……いえ、信じてはいたのだけれど、からかわれている可能性を捨て切れなかったのよね。でも、本当にあなたの反応は私にそっくりね。初めて私を見つけた時のアナタの気持ちが少しだけ分かったわ」

「え？ あれ？ 初めまして、だよな？」

「ええ。あなたとは初めまして、よね。それとも『どこかで私を見かけて、ずっと追いかけてました』なんてストーリーまがいの事でもしてくれたのかしら？」

「してねえよ！ いや、そんな顔するな！ マジでしてねえよ、そんな事！」

明らかに、からかっています。という様な言い方の彼女に聞くべき事は分かっているはずなのに、全く話が進められない彼は感情をぶちまけた。

「訳わつかんねえよ！ あーくそ！ とにかく！」

俺は『彼方かなた いちそう 壱朗』だ！ 覚えておいてくれるとありがたい、つか嬉しい！」

「あら。自己紹介をしてくれたのは嬉しいのだけど、私は今は名乗る訳にはいかないの。ごめんなさい。」

そうね。呼ぶなら、『レイ』と呼んでくれる？」

「ああ。なんか訳ありなのか？」

「そうなの。でもあなたには、近々名乗る事になると思うわ。あなたの事を『壱朗』そう呼んでいいかしら？」

「ああ。構わない」

壱朗は彼女の名前が、別に偽名でも何でも構わなかった。彼女との会話もおかしい部分がいくつがあったが気にならなかった。話せただけで舞い上がっていたし、彼女の言う『初めて私を見つけた時のアナタ』も壱朗の事ではなく『アナタという名の誰か』だと、すぐにそう認識した。

なぜなら、壱朗は変な名前については慣れていたからだ。壱朗の

文字列逆順

『彼方』という名字も曾祖父の代からの物で、アナグラムであり、元の名字は『田中』だった。曾祖父の両親が事故で亡くなり、天涯孤独となった後で『どうせ名乗るのは自分一人なのだから、カッコよくしよう！』と名字を変えたらしい。曾祖父本人曰く、『黒歴史』

だそうだ。

この壱朗の曾祖父の『黒歴史』が無ければ、壱朗の名前は『田中壱朗』などという、下手をすれば『記入方法の見本』の様な名前になるはずだった。

そんな『黒歴史』のお陰で『記入方法の見本』となる事は避けられた壱朗だったが、同時に嬉しくない『黒歴史』をも刻んだ。

高校に入学し、2ヶ月ほど経った頃だった。一つ年上の先輩が『どうせならスズキやサトウなんて珍しくもない名前じゃ嫌よね。…』という訳で彼方クン、私と付き合ってくれない？ 結婚したら私は「佐藤」理沙から、「彼方」理沙になるのよね。可愛くない？』という訳のわからない理由の告白に、壱朗は『マジ可愛い。芸能人にいそうな名前だ』等と言って即OKした。高校一年にして、初めて彼女ができた事に有頂天になった。

アイドルオタク

当時から偶像愛好家な友人と共に居たせいもあり、中学ではモテる事のなかった壱朗は、邪魔しようと躍起になる友人達 自称オタクな親友 を排除し、高校一年の冬には初体験も済ませる事ができた。

そして、人生を謳歌していたはずの高校二年の秋に、リュウキ・リヴィングストンというハーフの転校生が突如現れ、 転校生が来るのが突如なのは当たり前だったが 残念な事にその転校生に彼女を寝取られたせいで、彼女との交際は壱朗にとって思い出したくない『黒歴史』となった……

初体験の記憶

寝取られた記憶

などと自身の過去を思い出し、顔が綻んだり凹んだりしている壱朗を見かねたのか『レイ』と名乗る女性が気を使って声をかけてくれる。

「あの、名前言えなくてごめんね？ そんなにショックだった？

もしかして姓名判断愛好家？」

「あーいや、そうじゃないんだ。『彼方』って苗字と姓名判断愛好家には良い思い出が無いというか。うん。それを思い出して凹んでただけだから」

レイの言う姓名判断愛好家とは、19世紀に流行^{はや}った姓名の字画から運氣や将来性を判断する物などではなく、最悪結婚する 壱朗の初めての恋人の様な『どうせ世の中は美男美女ばかりなんだし、付き合うなら良い名前の恋人の方がいい』という考え方の人種の事だ。

実力主義の風潮が強い日本では、壱朗も含まれてしまうのだが、成績的に底辺に近い高校や大学出身者には、こういう男女が多かった。何しろ実力が底辺なのだ。親の資産か名前以外はみんな似たり寄ったりだからである。

だからこそ、と良い名前の恋人を望む男女は姓名判断愛好家などと言われていた。実力主義の風潮が強い日本で親の資産などを気にしていると『金の亡者』などと言われイメージが悪すぎる為、自然と姓名判断愛好家が多くなってしまっているのが現状だ。

「そ、そう？ 最後の方はかなりの哀愁を背負ってるように見えただけど……」

「大丈夫。大丈夫。………ちょっと振られた事思い出して凹んだだけだから……」

その瞬間。

壱朗はレイに両肩を鷲掴みにされ、歩道橋を支える柱に背中を押しつけられて睨まれていた。

「い、ま、な、ん、て、言、い、ま、し、た、か？」

「え？ え？ 『思い出して凹んでただけだから』？」

「その前です！」

「ひつ。『大丈夫、大丈夫』」

『俺の状況は全く大丈夫じゃなくなっただけ』とは、壱朗は口が裂けても言えそうにはなかったが。

「その後です!!」

「ちよつと振られた事を思い出して……『そこ!』……え?」

「誰に振られたんです?」

「え、いや……」

壱朗はあせりながらも頭を必死に働かせようとした。あれ、なんか彼女の口調変わってる? これはあれだよな、ナンパまがいの事をしておきながら他の女の事を考えてたのを怒ってるって事だよな? やばい、謝らないと。とにかく機嫌を直してもらわないと。でもさっきまでの反応と、これだけ怒るって事はそれなりに俺の事を気にかけてくれてるって事だよな? 上手くいけば一年ぶりに彼女ができるかもしれないかな? が、考えている事は現状の把握と無駄な妄想だけで、何一つ解決が出てきていない事には気付いていない。

そこに追い打ちをかけるように、低く、唸る様に地獄の底から響いてきたかの様な声でレイが囁く。

「誰にゝ振られたのですか?」

「い、いや、もう10年以上前の事だしさ」

「そんな事はゝ、聞いておりません」

「え、あ、はい。解りました。話します……」

怖い。怖すぎる。そんな脳内警告を受け何故か丁寧に対応してしまう壱朗。

初詣帰りだろう、通り過ぎる家族連れや恋人同士カップルの通行人達の中にはヘタレな男の浮気が彼女にばれて、問い詰められているようにしか見えなかっただろう。

しかし、壱郎の側からするとそこまでされなければいけない理由
は解らない。ナンパだと思っっているなら、彼を置いてこの場から立
ち去ればいいはずだ。無理に追いかける度胸など、ヘタレな壱郎は
持ち合わせていない。

壱郎には全く解らないし、理不尽だと思っのだが　彼女の表情
が『もちろん答えてくれますよね？　ええ。拷問してでも聞き出し
ますよ？』と言っている　『自称、及び他称：ヘタレ壱郎』には
何故か、逆らってはいけないという神の声が聞こえている様で、大
人しく答える事にした様だ。

「えっと、高校一年性の時の初めてできた彼女が……………」

壱郎は答えながら、『そうだ。こんなに気になる彼女に出会えた
のも、きつと昨日行つた神社の神様のお陰だ。だからこの神様の声
には従っておく方が良い…………はずだ』と、自分を納得させていた。

……………　学業と雷の神様としてはかなり評判のいい神社が、縁結び
にも御利益があるなどという話は地元の人間ですら聞いた事が無か
ったし、壱郎は近所の商店街でも有名になっていくヘタレだという
事実。この二点には精神衛生上の都合により、大いに目を瞑ってお
く事にしたらしい……………

第01話 新世紀を迎えて……（後書き）

感想やアドバイスを頂いてもお返事出来なかったり、文章に反映出来なかったりします。それでも私は感想を書いてやるうじやないか！という方のみ感想をください。一年ほど色々な小説を読んだあげくとにかく妄想から生まれた文章です。設定や話の内容で類似のものが何処かにある場合はこっそりと教えて頂けるとありがたいです。盗作と呼ばれる様な類似性がある場合はこちらが削除、または改訂します。（内容はともかく時期的にこちらが先の場合は検討します…）

第02話 吸血鬼が生まれた日（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第02話 吸血鬼が生まれた日

レイの態度が豹変した後、二人は歩道橋の下に積み上げられた工事用の資材の上に座り、結構な時間話し込んでいた。いつの間にか手渡された缶コーヒーを片手に、過去に付き合った3人の女性と妻であった女性との成れ染めから顛末迄を、原稿用紙20枚程度の文章で説明させられたあげく、その後数時間に渡ってどんなプレゼントを贈ったか等、詳細を暴露させられた。

家を出た時は暗くなり始めたばかりだった筈の景色も、今では既に真っ暗になった。生れてからずっとこの街に住んでいる吉朗は、全く人通りが無くなった事や周辺の雰囲気から、もうすぐ日付が変わるのだろう事を予測していた。

「大体の所は理解致しました。あまり時間ありませんので、このぐらいに致しましょう」

「ソウデスカ。御静聴アリガトウゴザイマシタ」

レイが白銀の煙管キセルを持った手を膝の上から持ち上げ、腕に着けた高級そうな時計を確認した後、煙管キセルに刻み煙草を詰める作業を始めたのを、俺はじっと見つめる。

話の合間に吉朗が煙草を吸い始めた時に、彼女も白銀の煙管キセルを何処に持っていたのか 鞆から取り出し、足を組んで煙草を吸いだした。吉朗は女性が喫煙するのはあまり好まなかったが『アナタと一緒に時はたまに吸っていたんです』と過去形で言ったレイの表情のは、愁いを帯びたものに变化していた為、ヘタレな俺はそれ

以上は何も聞けなかったし、何も言えなかった。

別に足が綺麗過ぎて白銀の煙管キセルを見る振りをして、綺麗な足に見惚れていたから、何も言えなかった訳ではない。少なくとも今はそうじゃないぞ、と壱朗は心の中で、誰かに必死に言い訳をしていた。その時

「吸いますか？」

そう言っただけで差し出された、年代を感じさせる白銀の煙管キセルからは俺好みのメンソール系の煙草の匂いがしていた。

差し出されたままの煙管キセルを見て、というよりも『吸いますか？』と問いかけたレイの言葉と態度が、とても妖艶な大人の女を感じさせるものになっていたせいで、『関節キスになるな』と青少年ガキのような反応をしてしまい、『自分の煙草がある』と、煙草を出して断ろうと懷に手を入れたが、懷には煙草は無かった。

足元を見ると、無残に散らばった煙草の吸殻が十数本。話をしているうちに、懷にあつた煙草は吸いきってしまった様だ。

俺は現状を理解し、覚悟を決めて吸わせてもらう事にした。

いや、覚悟が必要なのかと問わないで欲しい。目の前の女性レイは最初話しかけてくれた時は、二十代前半らしい可愛い仕草だった筈なのだが、今では夜のお仕事のお姉さんよりも色気のある仕草で、こちらを誘惑しているのだ。

おかげでこっちは、今までの女性経験も全部吹っ飛んで青少年ガキみたいな反応をしている有様だ。覚悟ぐらい必要だろう

などと心の中で誰に話しかけ、言い訳しているのかは知らないが、壱朗の頭の中は混乱しているようだった。もちろん、レイが今の壱

朗の頭の中を覗けたなら、誘惑なんてしていないと否定するのは間違いないだろう。だが、少なくとも壱朗はそう感じていたのである

幸い、煙管キセルは曾爺さんの物を吸わせてもらった事があり、『下手な吸い方をして恥をかく事もないだろう』と、壱朗は手を伸ばした。

「悪いな、自分の煙草は吸いきつちまったみたいだ」

煙管キセルを受け取り吸ってみると、曾爺さんの物とは何かが違う。メソールの刻み煙草も珍しいが、何故か終わりが無い。普通は3回程しか吸えないモノだ。それに、今の自分の様に粹な吸い方に見せようとして、5回も吸っていれば灰が入って来てもおかしくないのだが、と覚悟が必要だった割には、余裕を持って平然と吸っている
と……………

「……………関節キスですね……………」

「ブホッ!!」

今、明らかに吸いこんだ瞬間を狙って言っただろうレイの声に、咳き込んでいる壱朗は目で苦情を訴える。そんな壱朗に、百人いれば百人が見惚れる様な微笑みを浮かべながら、レイが話しかける。残念ながら、レイの笑顔を堪能する余裕は今の壱朗にはなかったが。

「……………煙管キセルは落とさないで下さいね。貴方あなたから貰った大事な物です。私は初めて吸った時には煙管の吸い方なんて知らなくて、何度も吸ってむせてしまつて。不思議でしょう？ これは特別な作りの煙管でして、10回くらいは吸えるんです」

そう言いながら壱朗の手から白銀の煙管を取り上げたレイは、微

笑みながら躊躇いもせずに口に持っていき、残りの数回吸うと煙管を片付け始める。

「初めて、煙管の吸い方を教えてくれた時の貴方は数回しか吸えない事をわざと黙っていて、私は吃驚させられたんですよ？」

「俺は曾爺さんが煙管キセル派だから、吸い方くらい知ってたよ……」

咳き込んだせいか、目尻に涙を溜めながらも壱朗は言葉を返し、手に持った空き缶の中に足元に散らばる煙草の吸殻を詰めはじめ。元々、壱朗は吸殻を道端に捨てる様な人種ではない。レイとの会話に集中しすぎて、気が回らなかっただけだった。

「ええ、だから詰まらないので、吃驚させたくって………これでお相子ですね」

「っていうか『アナタ』って人に騙されたからって、俺にこんな悪戯するなよ。俺を吃驚させてもお相子にはならないだろう。」

「……それよりも、大事な物なら俺なんかに吸わせてよかったのか？」
「構いません。貴方も怒らないでしょうし」

不思議な部分の多々あるレイの言動だが、壱朗はそれに対して何故か嫌悪も疑問も感じなかった。レイがたまに見せる、どこか会話を懐かしんでいる様な表情は壱朗の頭の中をその度に真っ白にし、他の事がどうでもいいと思える程印象的だった。恐らく今、会話はできていても『明日には何を話したかなんて覚えて無いだろうな』と壱朗は思っていたし、何もなければ本当にそうになっていただろう。

「そう、か。………ならいいけどな」

「そろそろ時間の様です。きちんと説明しなければいけませんね」

名残惜しいが、煙管^{キセル}を片付け始めたあたりで、時間がそう残っていない事は気付いていた。壱朗は認めたくはなかった様だが。

しかし、遅くまで話込んだせいで、家族に説明でも必要になるのだろうか。やはり育ちの良いお嬢様なのか？ もしかして、家族との約束を破らせたりしていなければいいが。などと壱朗は考え、謝ろうとした。

「あ、そか。帰るよな。ごめんな。変な場所に長居させて」

「いえ。そうではありません」

「え？ それは……『P U L L L L L L L L』……ん、電話か」

着信を見ると、父親からだった。壱朗がレイを見ると、『どうぞ』と身振りで勧めてくれたので、片手で詫びて電話に出た。そして壱朗は、携帯電話を耳にあてたまま凍りついた。

「嘘だろ？ 親父、曾爺さん今朝まで思いつきり走ってたじゃねえかよ！」

「……吸血鬼……そうかあの化け物どもが……」

「ふざけやがって、曾爺さんが何したってんだ！」

「ああ、とにかく今すぐ戻る。待っててくれ」

壱朗の父親からの電話の内容は、曾祖父の訃報だった。彼の曾祖父は120歳などという妖怪じみた年齢でありながら、化学の進歩と医療の発達のお陰で痴呆症を発症する事もなく、毎朝元気にジョギングしていた。

流石に120歳という年齢は、現段階では人間の世界基準で見ても最も高齢な部類の人でもあったし、あと10年生きるのは無理だ

と医者からも言われていた。

だがそれでも、今日いきなり死ぬはずもなかった。曾祖父は医療用マイクロナシンの投与も受け入れていたし、何より今晚は壱朗の友人の偶像オタクと、1990年代のグラビアアイドルについて語り明かす約束をしていた筈だ。

曾祖父は約束を破った事が無い事が自慢で町内では有名人だったし、壱朗はそんな曾祖父が好きで、その影響も多分に受けていた。

壱朗は携帯電話をポケットにしまい、何度も深呼吸をしてみる。落ち着こうとはしているが、上手くいかなかった。体がまるで壱朗のモノではない様に感じていた。壱朗の意思に反して小刻みに震え続ける体が、それを明確に物語っていた。

吸血鬼。裏付けや確証のある記録に残っている分では、西暦2000年あたりから世界中で認知された存在だと言われている。その存在の情報が一般人にも公表されたのは、2050年頃の事だった。きっかけは、中南米のある大統領が退任演説中に自分が吸血鬼だと表明し、その場で自分の首を完全に切り離して見せた。もちろんそのままでは生活できるはずもなく、すぐに元通りにしており、一時はCGや特撮^{ヤラセ}ではないのかという議論が持ち上がったそうだった。その後、世界中の先進国が自分の国にいる吸血鬼について一般人に公表した事もあり、認知された存在となった。

2000年あたりから、大きく進歩することなく行き詰っていた医療技術は、吸血鬼等の存在の恩恵により緩やかにではあるが発達した。

その事件から50年が経っている。

壱朗の生まれた時には既に当たり前の存在だったし、曾祖父がその恩恵である医学の進歩のお陰で、毎朝元気に走っている事もあり、

比較的受け入れている側の人種だと壱朗自身は思っていた。が、やはり身内が被害にあうと『化け物』と言ってしまう事からも、心のどこかでは人間ではない人外の存在達を区別して見ていたのだろうと自覚した。

壱朗の心は落ち着き始めていた。しかし、体の震えが一向に収まる気配が無い。訳が分からなかった。『今すぐに帰って、詳しい事情を知りたい。友人にも知らせないといけない』と、思っているのに体が動かない。

レイは気付いていた。

彼女は壱朗の身に何が起こっているのかを正確に知っていた

「壱朗様、落ちいて下さい。私が、貴方様の傍にいますから」

「レイ？ 何を言ってるんだ？ 俺は落ち着いているだろう？」

「手を見て下さい。こんなに震えています。それでも落ち着いていると？」

「あれ？ 何だ？ おかしいじゃないか、体が言う事をきかない」

「壱朗様。失礼致します」

レイは羽織っていたコートを傍に置き、正面から壱朗に抱き付いた。

そして、壱朗の耳に口を寄せ、促す様に囁く。

「私を乱暴にして頂いても構いません。強く、強く、自分が生きていると実感して下さい。壱朗様の心は生きる事を望んでいるはずです。体の変化を心で受け入れてあげて下さい……………吸血鬼として生きる為に」

「うううううつつ……………がああああつつ！」

壱朗の心にはレイの言葉は届いていなかったが、彼女は壱朗がどのようにしても許される存在だという事だけは本能で理解していた。

壱朗の腕は意思とは関係なく、レイの服を破ろうとする。しかし破けない。

普通に考えれば、ただの人間に服など簡単に破れる訳はない。

しかし、既に壱朗は人間ではなく初めている。

簡単に破ることのできる程の力がかかっていた。それ以上にレイを傷つけまいとする壱朗の意思の力か、壱朗がレイを引きはがそうとする力は、尋常なモノではなかった。

「壱朗様。お気使いは無用です。御自分の為だけに力をお振るい下さい。傷つけて頂いてもすぐに治ります」

その言葉が引き金になったのか、壱朗はそのままレイを抱き締めると、その体を細切れにしようとしているかの様に、引っ張り、掻き毟り、暴れた

第03話 過去への旅立ち（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第03話 過去への旅立ち

壱朗が暴れ始めてから二時間が経過し、やっと壱朗の体は落ち着きを取り戻した。腕はレイの体を抱きしめたまま、全く離そうしなかったが。

「壱朗様。もう落ち着かれましたでしょうか？」

「ああ、大丈夫だ。ほんとうに、すまない」

壱朗は知ってしまったからこそ、無意識に『嘘』をついた。

壱朗は理解していた。

自分が一体何になったのかを。

そして同時に何故、自称『レイ』にそこまで心惹かれたのかも理解した。

目の前にいる自称『レイ』も同じ、いや、似た様な存在なのだと理解していた。

壱朗は頭の中を何とか整理しようとしていた。

曾祖父が殺された。家で壱朗の友人との約束があったはずの曾祖父が、外に出て吸血鬼に殺された。曾祖父にとってはいつも通りの行動だった。財布を忘れた時も届けてくれた事があった。走って追いかけて、忘れ物を届ける。そういう役目は曾祖父の役目だと家族みんなが思っていた。役目がある事は曾祖父が痴呆症を発症させない事にも繋がる。そんな風に話し合った事すらあった。しかしその役目のせいで曾祖父は死んだ。吸血鬼が許せなかった。それ以上に壱朗自身を許せなかった。曾祖父が外に出たのは壱朗を追いかける為

だったと父親が言った。『どうせ隠してもすぐに気づくだろう』と教えてくれた。

壱朗^{おれ}は今何をしていた？

壱朗^{おれ}は女性^{レイ}と話をしていた。

壱朗^{おれ}は曾祖父が襲われていた時に。

壱朗^{おれ}は女性^{レイ}と話す事に夢中になっていた。

やり直したい。

やり直したい。

やり直したい。

壱朗^{おれ}が吸血鬼になってしまったのは自分の罪の意識からだったのか？

壱朗^{おれ}のせいで曾祖父を死なせた罰だったのか？

壱朗^{おれ}が吸血鬼？ 女性^{レイ}もそうなのか？

やり直したい。

やり直したい。

壱朗^{おれ}は人間^{おれ}も吸血鬼も許せない

やり直したい。

『「過去に戻ってやり直したい」』

そうして『真祖』 彼方 壱朗^{おれ}は生まれた

落ち着いた。そう判断したのだろう。自称『レイ』はそのままの体勢で話しかけてきた。

「話をしても、よろしいでしょうか？」

「いや、家に帰らないと。曾爺さんの事があるんだ」

自称『レイ』も同じような存在だと気付いて、少し嫌悪していた。嫌悪を感じ取ったのだろう。少し悲しそうな声色で話を続けようとする。

俺を抱きしめた手を、自称『レイ』は離す事なく続けた。

「その曾祖父様の事についてですが」

「……………」

「曾祖父様を襲ったという吸血鬼クズの、名前も、血族も、血統技能アビリティも、居場所も、何もかも調べられますし、お教えできます」

「……………」

「貴方様のお望み通りに致します。如何致しましょうか」

俺は十分程考えた後、はっきり言った。

「仇が取りたい。俺ができないのなら、できる誰かに依頼したい。そう言ったら可能かな？」

俺は答えは分かっていたが、一応聞いてみる形は取った。

「貴方様の手で果たせますし、果たすべきです。その為に最初の四千年を費やした。そう聞いております」

俺は自分が何になったかを理解した筈だ。何を手に入れ、何を失ったのか。ガキの頃、ヒーローを夢見た事もある。だけど、俺には無理だと心のどっかですっ飛ばした。でも今は違う、俺には力があり、何ができるかが分かっている

『血』が教えてくれる。

俺の血統技能は『時間跳躍』だと。

「やっぱりそうしたんだな。俺は」

「はい。ただ、初めて跳んだ時は血統技能に気付いていたかどうかまでは覚えていないので、気付いた場合にだけ言っただけ言っただけという伝言を預かっております。『聞くかどうかは俺に判断を委ねろ』と言われております」

俺が人間だった先程までとは打って変って、自称『レイ』の対応は実に丁寧だった。丁寧だったが焦っているのか、無理をしているのが分かった。

「何か急いの方が良い理由があるのか？」

「はい。今の貴方様は、生りたての力の安定しない真祖です。その状態の真祖は二世、三世の吸血鬼にとっては力を上げる、極上の餌となりますので」

「レイは一緒に行くのか？」

「いえ、貴方様お一人で行って頂く事になります」

壱朗は今の状況とこれからの事を少し考えて、結論を出す。

「伝言、……聞いておくか。その様子じゃ、レイに会えるまでに結構な時間がかかりそうだ。声も覚えておきたいしな」

「つつ！……では。」

タイム・パラドックス

世界の修正力との衝突を避ける為、あまり情報は持たずに行くのが望ましい。

一つ目。調べるのは血の力と時間の関係。睡眠中もそれは起こるのか。

二つ目。同じ存在を二人存在させると、何が起こるのか。

三つ目。人として研鑽を積む事は出来るのか。

我は曾祖父の仇を筆頭に、命を無意味に弄ぶ吸血鬼を排除する

……以上です」

「……大それた事を言うもんだな」

「それが許される、世界でたった一人のお方です」

「そうか。それじゃあ、すぐにも行くか。」

それより、なんだか分からないが言いたい事は我慢せずに言っていないぞ?」

「はい……………すみません。後の負担になるかもしれませんが、我が儘をお許し頂けますでしょうか」

恐らく、自称『レイ』は壱朗の眷族なのだろうと気がついていたが、どういう扱いをしてきたのかさっぱり分からない壱朗は『とりあえず自由な方が良いよな』と結論付けていた。

「……………いいよ」

すると、自称『レイ』は素早く体を離し、壱朗の前に跪く。そして、壱朗の『左手』を取り、額に当てた後に薬指に歯を立て『血』を吸い出す。

「痛ッ……………」

吸い出した後、動物が傷口を舐めるように優しく舌が這わされた。結構な痛みを感じたのだが、すぐに治ったようで左手の薬指には傷すら残っていなかった。我が儘を許すと言った以上、何も言えず我慢していた壱朗に自称『レイ』が声をかけた。

「わ、わたくし、レイシア・フェルナリーゼは、この身が滅ぶ、その瞬間まで、貴方様にお仕え致します。……………っっ!」

プロポーズ

きつと、求婚に近い意味を持つ儀式なんだな。耳の先まで真っ赤だもんな。ずっとこんななら可愛いのになあ。詰問されてる時はほんと怖かったし。いやでも、だからこそ傍に置いたんだろうな

などと自称『レイ』いや、ティアの額に触れた左手を動かして、壱朗は頭を撫でながら考える。

「あの……………聞こえていると解っておられて、やっていますよね……………」
「……………うん。なんとなく。血が教えてくれた。レイに、いや。ティアには触れていれば、想うだけで通じるって」

人間だった壱朗はもういない。真祖としての壱朗はティアの知っている壱朗と同じように柔らかく微笑み、黙っている。

「……そういう意地悪な所は嫌いです。優しくして下さいとは言いませんので、お願いですから嘘はつかないで下さい。……それだけで、いいんです」

「嘘ついたの？ 俺が？」

約束は守れと曾爺さんに躰けられた俺が、嘘なんて付くのかなあ

「はい」

「なんて？」

「……えっと。その。私が……『生まれて初めて愛した女だ』と……」

……だから、あんなにも俺の過去昔の女の話に食いついてきたのか。

しかし、あり得ないな。何百年も生きると俺は嘘つきになるのか？

いや、待てよ？ 初めて会ったのが今日……いや、もう昨日かなだとする……

「ん。ティアこそ、嘘ついてない？」

「ついた事などありません！」

「そうかな？ 俺は『ティアに出会って初めて愛を知った』なんて風に言っただけじゃない？」

ティアの表情が驚きに染まる。『何でわかるんですか？』『過去の、いや未来の？ 記憶まで引きずり出せるように能力が上がったんですか？』『こんなにも早く？』という様な意思が伝わってくると同時に、その表情がとても分かりやすい、拗ねた様な表情に変化する。

「……そんな感じだったかも知れません……」

「嘘じゃないよ。『人間だった彼方 壱朗』はひと目『レイ』を見た時に初めて愛を知った。他の嘘は分からないけど、それだけは嘘じゃないよ」

壱朗の今の言葉に嘘はない。ティアにもそれは伝わった。

きつと壱朗の過去は、本当に愛のある物では無かったのだろう。
おままごと 恋愛

御飯事おまめごとの様な、憧れだけの付き合いや結婚だったのだ。別れて当然とも言えるだろう。そう理解したティアは、壱朗の前で嬉しさを抑えきれず、顔が堪え切れなくなる前に姿勢を正した。そして壱朗から少し離れ、空気を変えようと口を開く。

「……………私も待っていますので、向こうに着いたらちゃんと解るように、言ってあげて下さい」

情報を持って行くなという伝言に従う為、ティアに財布や携帯電話などをまとめて預け　流石に服ぐらい良いよな。とも思いながら、言葉を返す。

「今のティアみたいに、泣いてないといいけど」

「泣いてなんていません！」

空気を変える事などできる筈もなく、言い負かされた悔しさよりも嬉しさから、目の端に涙を溜めているティアを後目に壱朗は考え、決意する。

過去のティアに会いに行くか。曾爺さんの仇を取る力を得る為に

覚悟を決めた瞬間。壱朗の周りの景色がぼやけ始め、陽炎のようにゆらゆらと漂い始める。

ああ、真祖ってこんなに簡単に力を行使できるのか。すごいな

「ティア、帰ってきた俺をよろしくな」

「はい。御迷惑をおかけするとは思いますが、未熟な私をよろしく

「お願いします」

「任せとけ」

ゆらゆらと陽炎の様に、かすれて見えなくなっていく壱朗に、ティアはこの数十年の間で考えた『会心の一声』をかける。

「愛していますっ！ 御主人様っ！」

最後に吃驚した表情をティアの心に残したまま、壱朗の姿は消え去った。

ティアも壱朗が眠りに就いてから知ったのだが、21世紀初頭には爆発的な人気を誇った、形だけのメイドのいる喫茶店は壱朗が生まれた頃には、完全に衰退していた。そして今も生きているサプカ通称：オタクルチャー愛好家達の間ですら、メイドに御主人様と呼ばせる行為は、過去のモノとして嘲笑の対象となっている。

逆にそれが可能な存在は、本当の意味での超上流階級層であり、名実ともに貴族、華族、名士等と呼ばれる事に恥じる事なき実績と血族を持つ者だけの特権になった。

つまり、先程まで此処にいた壱朗は庶民であり、御主人様等という呼び方をされる事は会社の宴会で酔っ払っても経験した事のない、赤面モノの罰ゲームか何かだと認識していたハズである。

事実、ティアは壱朗と共に三千年もの時間を過ごしたがその間ずっと『御主人様』と呼ぶことは禁じられていた。

『してやつたり』とティアはその豊かな胸を張って、やりきったと思っていた。だがしかし、ティアのこの行動のせいで向こうに着いた直後の壱朗は、あまりの恥ずかしさに地面に転がって悶えていた。

そして壱朗は『次にティアに会ったら絶対に苛めてやる！』『絶対に御主人様とは呼ばせない！』と決意するのだが、ティアがそん

な事には気が付く筈もなかったのである。

第04話 記憶と帰還（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第04話 記憶と帰還

『元人間 壱朗』を送り出した現在、ティアはすぐに『真祖 壱朗』を迎える為の準備を始めていた。
タイムパラドックス
世界の修正力との衝突を避ける為、『真祖 壱朗』は絶賛冬眠中
なのだった。

壱朗の曾祖父が生まれる以前の、西暦1900年から、曾祖父が殺されて壱朗が真祖となる2100年迄の二百年間を衝突が起これば、壱朗の存在が消えかねない時期として認識し、その時代に活動する事を避けていた。世界大戦も起こる為に紛争のない地域に、自分専用の地下四〇階ぐらいの墓所を掘るといふ徹底ぶりだ。墓所の場所は、戸籍が偽造しやすいお隣の大国を選んだ。
人口過剰な
名前とは裏腹な国

そして『真祖 壱朗』を迎える為の門を開く準備を済ませ、起きてくるのを待ちながら、『元人間 壱朗』の顔を思い出す。

生りたての壱朗様、ちょっと目つきが優しかったなあ……

日本で幼年期整形が流行り出して五十年。今では三十代までの男女の90%が、普通以上の美形だ。残りの10%のうち9%が超美形。1%が不細工でありたい変わり者か、幼年期に手術をしないまま忘れている者だ。

だが、吸血鬼は血に大きく左右される生き物だ。だからこそ幼年期のDNA形成型整形手術が効果を発揮しない。もし整形していたとしても吸血鬼のDNAは医療用のDNAなどよりもはるかに強く、本来あるべき顔に戻してしまう。

西暦2000年あたりの、シリコンを入れるなどの整形手術をすれば、おそらく整形も不可能ではないだろう。

しかし、吸血鬼は赤外線や紫外線すら視認できてしまう存在だ。

そんな吸血鬼からすれば、顔に異物を混入する整形など不細工にしているのと同じ事である。
鼻に洗濯バサミをして鼻が高いと言っている様

恐らく、向こうでは『元人間 壱郎』の顔も本来あるべき造りに戻っているだろう。ティアが知っている『真祖 壱郎』の顔との差は、ほぼ無かったが。

それは壱郎の祖父のせいでもある。彼が元々、日本人らしい強面の顔つきで、美形とは言わないまでも渋い男前であった為、特に整形は必要無いと家族に幼少の頃に判断されたのだ。

吸血鬼で顔を変えた者は血統技能で変身や変装の能力を得た者が、長い時間をかけて少しずつ、顔の骨格の形を変えた者しかない。

だが、吸血鬼の血統技能は基本一人一つだ。

理論上、核爆発クラス力でも血統技能で身に着くかも知れない吸血鬼が、その血統技能が変身や変装等の能力だった場合、その吸血鬼は余程の事が無い限り、吸血鬼社会では弱者になってしまうだろう。

吸血鬼の能力は大きく分けて二つある。

吸血鬼であれば誰でも持つ種族能力。

吸血鬼の真祖から派生する血統技能。

種族能力は吸血鬼であれば誰でも使えるし、覚える事ができる事から『能力』と呼ばれる。血統技能は血統の者しか使えない為、『血技』と呼ばれている。

種族能力は『吸血』『不老』『再生』『怪力』『霧化』『蝙蝠化』『浮遊移動』などの、吸血鬼であれば誰でも得る事のできる全部で

12種類の能力であり、訓練や血の力の強さでその効果は変動する。しかし限界もある。例えば、『霧化』したからといって霧の量が、吸血鬼の元々の体積を超える量にはならない。

アビリティ スキル
血統技能は種族能力とは違い、その血統の真祖の『血技』に左右され、自分の系統の真祖の『血技』の派生版を得る。どの程度の違いが出るかは血の濃さによって変わる。『血技』は吸血鬼が経た年数や訓練により、強弱や能力そのものを変質させる事が可能だ。種族能力とは違い、今のところ、その効果の限界は知られていない。

現在のアメリカ合衆国には2人の真祖がいるが、そのうちの一人の真祖の『血技』は『重力』である。彼は真祖に生りたての時は、その『血技』で1t程度の物を持ち上げるのが精一杯だったが、移民である白人に迫害され、怒りにまかせて能力を振るうなどの過程を経て、約千二百歳の現在では、二ミッツ級航空母艦（約80000t）すら持ち上げる。

ティアは自身の『血技』を使用して習得した、結界術の一つである『^{ゲート}門』を発動させている。これは指定した場所との空間歪曲移動を可能にするものである。

ティアは壱郎の曾祖父が『彼方』を名乗ってからずっと、『彼方壱郎』の生まれる環境を守る為、『彼方一族が不幸に襲われない結界』を張り続けてきた。2100年元旦に壱郎が初詣に来るまでは、ほぼずっと神社の地下に籠りきりで結界を維持していた。

タイムパラドックス
世界の修正力との衝突を避ける為、今日まで壱郎の姿を直接見れなかったのだ。今日からは壱郎の家に押しかけ、子供の頃の写真など色々見せてもらおうと心に決めていた。

もちろん、ティアは壱郎が反対した時に対しての『言い訳の口実』も考えていた。百年近くもの間、張り続けた『彼方一族が不幸に襲

われない結界』が消滅した事で、幸福量保存の法則に従って、その反動から彼方家には不幸が降りかかる筈だ。

だから家に住み込んで、家族の皆さんを守らなければいけない。という言い訳だ。

ちなみに幸福量保存の法則が否定されようとしても、壱朗の曾祖父が吸血鬼に襲われて死亡したのは、ティアが結界を維持できなくなったせいかもしれないと言つつもりだし、それを口に出す事を許す程『壱朗様』は酷い主では無いとティアは認識している。

そして、旅立った壱朗との『帰属儀式』の正式な完了により、彼方血族の眷族になったとティアは思っていた為、今まで彼方一族が避けてきた筈の不幸が、ティアにも降りかかる筈だとティアは考えていた。

その時、不意に不穏な気配を　それなりの吸血鬼の　感じ、ティアは肩に羽織ったコートをきちんと着込む。

見知らぬ吸血鬼等に、壱朗様の為に整えた体つきを、間近で見せてやる義理はないわ。先に『真祖（壱朗以外）』が起きて来ていれば、綺麗に着飾った自分を見せれた筈なのに……

そんな風にティアは考え、思惑を見事に破壊してくれた存在に苛立ちながら、身なりを正す。

『キンツ』と澄んだかすかな音のが鳴った後、人間の胴体よりも太い氷柱（ティア）がティアの後方から飛来し、襲いかかる。それを壱朗の指示で習得した武術のお陰で、振り向く事もなく認識する。その氷柱を紙一重で躲す。大事な　壱朗が冬眠する前に最後に

選んだティアのお気に入りの　純白のコートが汚れない程度に離れて、ではあるが。

「何か用があるのなら、まずは名乗りなさい。いきなり攻撃を仕掛ける等と、どこの下賤の者ですか？」

ティアはそう言うてはいるが、氷柱という攻撃方法を認識した瞬間には、相手の素性はおおよそではあるが見当を付けている。フ랑스在住の真祖、『ラマルティーヌ卿』の二世以降の者だろう。『水氷』の血技は『氷の貴公子』とも呼ばれる、ラマルティーヌ卿の系統が最も有名だ。ただし、『水氷』の血技以外にも氷柱を作り出すだけならば可能な為、『水氷』を真似ている可能性を考えて聞いているに過ぎない。

「女。先程、此处で生まれた真祖がいるだろう。今すぐに差し出せ」振り向き、歩道橋の上に佇む男の顔を見る。服装は上質。金髪碧眼で身長も高く腰の位置も高い。白人系だ。そして、男の顔がそれなりに整った者である事と、ティアを真祖だと勘違いしなかつた事から、三世以上だと判断し、男を侮辱するべき言葉を選ぶ。

「『氷の貴公子』は眷族の躰もできない方だと有名ですが、名乗りに上げられないようですね。それとも、四世以降の当主の顔も分からない程度の吸血鬼なのでしょうか？」

三世より血の濃い吸血鬼にとって、四世代以下に見られる事は屈辱以外の何物でもなかった。

「女。五体満足でいられると思うなよ！　真祖共々、四肢を切り落とした状態で我が主の元へ届けてくれるわ！」

男はそう言いながら両腕を前に持ちあげ、『怪力』を発動させたのか、指と爪が四肢を引きちぎる為の鋭さを持つ、凶器へと変質していく。

ティアは確信する。『これで相手はラマルティーヌ卿の手の三世で間違いない。二世ならラマルティーヌの姓を許可されているはずだから、プライドにかけて名乗る筈』と。『恐らく、日本に唯一いる真祖がラマルティーヌ卿への借りを返す、という名目で日本の真祖誕生の時期を教えたのだらう』とも判断していた。

しかし、一番最初に問題を起すのが、ティアが嫌いなラマルティーヌ卿とは。『これも降りかかる不幸の一環かしら……』などと考へながら、体勢を変え時間を稼ぐ為の台詞を考える。

「それが可能だとしても？ 我が主は今、『血技』の試技で此処を離れておられるがすぐに戻られる。『氷の貴公子』程度の千年も生きていない真祖の眷族ごとき、我が主は相手にせぬわ。相手をして欲しくば、『城』^{ホーム}に逃げ帰り、主を連れて来くるがいい！」

今のティアは百年にも及んだ『結界』の維持と今開いたままの『ト扉』^ゲの為に9割程の力を失っていた。

だから相手を挑発し、近接戦闘を挑ませて体術と会話だけで、壱朗が戻るまでの時間を稼ぐ心算だった。

「生まれたての真祖などに帰属した程度の分際で……我が主を侮辱する者は決して許さん！！」

『帰属の儀式』を見られていた事という事は、この吸血鬼はかなり遠くからこちらの様子を伺っていた事を理解した。何故なら、この吸血鬼の気配は先程まで感じなかった。という事は半径10 km以内に居なかったはずだ。

三世で10 km程度の移動に、この位の時間をかけると言う事は、ティアにとつては大した相手では無いと判断していた。

ティアの表情から『大した相手では無い』という評価を読み取った男は、その事実さらに侮辱だと怒り狂い、『怪力』に加え『血技』を発揮しようとした。

その瞬間

「俺の眷族に何しようとしてやがる。餓鬼^{ガキ}」

空間が軋んでいるのではないかと思わせる程の存在感を身に纏った壱郎が、男の隣に存在していた。

「なっ」

「五月蠅い。喋ろうとするな。口を開けるな。腐った豚の臭いが広がるだろうが」

その瞬間から、男は指一本1ミリたりとも動かさなかった。いや、動かせなかった。動かせば死ぬ。呼吸すら、するなと自身の『血』が言っている。

「御帰りなさいませ。壱郎様」

ティアは隣にいる男を完全に無視し、優雅に頭を下げて挨拶をする。

「おう、おはよう。ティア。俺は嘔吐きだったか？」

「いえ。嘔吐きではなく、ただの意地悪だと、再度理解致しました」
「酷いな。俺に愛していると叫んだ癖に」

成熟した真祖

今の壱郎は旅立った頃の記憶など、ほぼ覚えていなかった。しかし、ティアの記憶を覗き、どんなやり取りをしたのかを知る事など、眠っていても可能だった。

「あ、あれは、可愛らしい反応をなさる、壱郎様に申し上げたのです！ 意地悪な貴方様に言ったものではありません！」

「……………嬉し泣きしてたくせに」

「っ！ もうつ！」

そんな意地悪ばかり言うなら、膝枕も添い寝もしてあげませんよ！」

「それは困る。狭く硬い棺桶で眠るのにはもう飽きた。今日はティアの膝枕で寝ると決めてるんだ」

「だったら、意地悪を言うのはおやめ下さい。……………棺桶が嫌だ、なんて言う吸血鬼は壱郎様か、四世以下の吸血鬼^{クズ}ぐらいですよ……………」

「……………そうか？」

だがそれはそれ、と別にしたとしても、今日はずつととおいた初めてを貰わないといけないしな」

その言葉を聞いた瞬間、ティアは壱朗が『冬眠』に入ってから二百年の間、考えない様になっていた壱朗との約束を思い出した。

「　　っ!」

ティアは顔、耳、手、足、と肌が見えている個所を順番に、その全てを赤くして一言も言葉を発しなくなった。

「さて、ティアが再起動する前に面倒事から片付けるか」

壱朗は隣に立つ吸血鬼に首から上だけを向け、完全に見下した目で命令した。

「　　聞いてやる。名乗れ。餓鬼^{ガキ}」

第05話 待ち続けた約束（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第05話 待ち続けた約束

「聞いてやる。名乗れ。餓鬼^{ガキ}」

男は目の前の現象が理解できなかった。
できなかったが言う通りにしなければいけないと『血』が騒いでいる。

それを抑えられる程の力がなかった男は、言われた通りに名乗る。
「……ふ、フランスはマコンにおわします真祖、ラマルティーヌ卿が血族の三世のピエール・オリヴィエと申します。」

我が主、ラマルティーヌ卿の命により、生まれたばかりの真祖様をお迎えに上がりました」

「ふん。お迎に、な」

ピエールは知らなかったが、吉朗はティアの用意した『門^{ゲート}』の向こう側で会話を聞いていた。つまり、ティアに『四肢を切り落とす』などと暴言を吐いていた事も知っていた。

「わ、我が主は、新たな15番目の真祖様の誕生を祝い、その将来を思えばこそ、フランスへの移住を……『黙れ。俺は話していいと言ったか？ 名乗れと言っただけだ』……はっ。……」

生りたての真祖は、固有の血統技能^{アビリティ}を創生する力が血に込められており、真祖の身体の安定するまでの百年間^{生きた年数}は、血の質が違ふ。
その血は二世、三世の吸血鬼にとって『血の熟成』と『努力』以外の方法で力を得る絶好の機会となる。

真祖は他の真祖の血から力を得る事は出来ないが、人間の血液よりも魔力の回復には役に立つ。そして、生りたての真祖の血液は、

極上のワインよりも美味であり、処女の血液や精通前の男子の血液よりも、上等な嗜好品でもある。

だからこそ、生りたての真祖は他の真祖に飼われる場合が多い。吸血鬼はほとんどの場合、吸血鬼の子を成なせない。

真祖以外が吸血鬼を産んだ例は一度もない。ごく稀に、真祖同士の間には真祖が生まれる事があるが、それも過去に二人だけしか例が無い。

では真祖以外の吸血鬼には、子供が作れないのかと言われれば、そういう訳ではない。ただ、百年かけても一人もできない場合が多い、それに生れてくる子供は何故か、唯の人間になる。そして、吸血鬼から生まれた子供が真祖となった例も、その子孫がなった事も今のところ一度もない。

故に真祖の血が欲しければ、誕生した者を見つけ出すしかない。そう認識されているのが普通だ。

ピエールには訳が分からなかった。過去に二度に渡り、自分より上位血族である二世の方と共に、真祖の捕縛を行った事がある。

現在、真祖で12番目と14番目と呼ばれる方の時だった。その時の生りたての真祖は、両方とも生れてから50年は経っていたが、それでも三世である自分でも、十分に連れ帰る事が可能な程度の力しか持っていなかった。

しかもピエールは、三百年しか生きていない三世でありながら、生りたての真祖の血を二度も飲み、三世としては世界でもトップクラスの吸血鬼の筈だった。

「しかし、ラマルティエヌか……あのアンドレのクソガキが……二百歳ぐらいの時に、なりたての血は吸うなどお仕置きしたはずだったが。あの程度じゃ、お仕置きが足りなかったか？」

ピエールは目の前の真祖が呟いている言葉が信じられなかった。彼の言うアンドレとは、恐らくアンドレ・ラマルティーンの事。つまり七百年以上も生きている真祖であるはずの我が主を『クソガキ』等と言っている事になる。そんな事が言える存在はこの世に三人しかいない筈だった。いや、四人か。

どちらにせよ、『生りたての真祖』にできる言動では無い。つまり、この真祖は先程まで此処にいた『生りたての真祖』ではないという事だろうか。確かに顔はほぼ同じだが、服装が違う。別の真祖が年齢と外見を調整して、同じ顔に見せているのだろうか。

吸血鬼であれば『不老』で年齢を調節できる。訓練しなければ吸血鬼の外見は普通に年を取る。逆に訓練すれば赤ん坊の姿にもなれるし、老人にもなれる。もっともその変化には、年を取るのと同じだけの時間が必要となるが。つまり、10歳の姿の吸血鬼は70歳の姿になるのに60年かかるし、70歳の姿の吸血鬼が10歳の姿になるのにも60年かかるのである。大抵は気に入った年齢で現状維持をする。

しかし、ピエールの『血』が違うと騒ぐ。先程まで此処にいた『生りたての真祖』と目の前の真祖は同じ人物だと『血』が言っている。先程『帰属の儀式』をしていた、眷族の女が従っているのが何よりの証拠だ。

眷属は『吸血』によって創られる。真祖が直接吸血し、創った吸血鬼は二世。二世が創れば三世。三世以降は血が薄く、真祖とのつながりも希薄で力もかなり弱くなる。実際、四世以降の吸血鬼は、人間でも一流の武道家なら十分に相手にできるレベルに収まる。

吸血鬼が世界中で受け入れられている最も大きな理由は、吸血鬼全体の90%以上を占める四世以降の吸血鬼が、人間でも十分管理

可能な程度の力しか持っていない事だと言われている。

一般人が四世以降の吸血鬼になったとしても『霧化』や『蝙蝠化』で飛んで逃げられない限り、警察官二、三人で取り押さえる事が十分に可能だ。

しかし、三世より血の濃い吸血鬼は別である。世界に十四人しかいない真祖の大半が、人類との共存を約束しているからこそ大人しくしているが、弱点などを考慮しなければ、千年生きた三世ですら完全武装の軍隊一個師団に匹敵する。同じく千年生きた二世や真祖など、対比評価すら難しいだろう。

つまり、人間には簡単に管理しかねる自由を持つ者が三世以上。人類に管理可能なのが四世以下という明確な違いがある。そして、その世代の違いは百年程度の『血の熟成』では覆せない程に大きい。

年齢による力の増加

『血の熟成』という意味だけで言ってしまうえば、真祖が百かけて得る力は、二世ならば二百年かかる、三世ならば三百年かかる。四世以下は血が薄く何年かかるかも分からない。ただし、真祖は最初の百年で、のちの千年分の力を得る。

同じ時期に百歳を超えた血族の力の比率は、

真祖、二世、三世、四世の順に、1000:100:100:100:100だ。

更に二百年経ち三百歳になると、1200:200:167:150となる。

更に千年経って千百歳になると、2000:600:433:350となる。

二千年経って二千百歳となると、3000:1100:766:600となる。

現在の最高齢の真祖が二千歳という事実を顧みれば、真祖以外の吸血鬼が力で、真祖を頂点とする吸血鬼社会を覆すには、六千歳以上の二世が真祖を倒すしかない。九千歳の三世や一万二千歳の四世

でもいいが、どれも現実的では無い。つまり、西暦2100年までの吸血鬼社会では現状の序列を覆す存在はいなかったし、不可能に近かったのである。

「おい、餓鬼^{ガキ}。この時期に真祖が生まれる話を教えたのは日巫女^{ひみこ}で間違いないな」

ピエールは言葉を発することなく、首を縦に振るだけだからうじて答える。

「あの女……よし、新年の挨拶も兼ねて殴りに行くか……」

「あの。吉朗様。日巫女^{ひみこ}様とは仮ではありますがありますが、不可侵の取引をしておりますので、それはちょっと……」

再起動を果たしたのか、ティアが吉朗の行動を止めようとする。

「何で、不可侵なんだ？」

「私の日本国内での結界の発動を、許可して頂く為です。煩わしい揉め事は避けるべきかと思ひまして……」

「……いや、殴りに行く。というか見てるだろ、あの女なら。

もう二千歳を超えたババアだし、ティアの結界の中でも状況は見れてたはずだ」

「で、でも『約束』したんですよ？」

「……………」

「……………」

「……しかたない。文句だけ言いに行く」

ピエールはすぐに主の元に舞い戻り、この状況を伝え、判断を仰ぎたかった。主の事をクソガキと呼び、血の熟成^{年齢}だけなら現在の吸血鬼社会の中でもトップのはずの日巫女^{ひみこ}様をババア等と呼び、殴るとまで言っている。

しかも、それが可能だと『血』が理解している事実混乱していた。

ピエールは先程までの事を頭の中で整理してみた。

ピエールは生まれたばかりの真祖を発見し、その傍にいる女吸血鬼をどのように排除するかを考えていた。すると女吸血鬼は『帰属の儀式』を行っていた。つまり、女吸血鬼は『はぐれ吸血鬼』だったわけだ。

『はぐれ吸血鬼』に相応しく、血の力魔力も大した事はなさそうだったが『生りたての真祖』が、陽炎のように消えてしまった。もしかすると女吸血鬼の『血技』で逃がしたのかと、すぐさまその場所へと向かい、何らかの儀式を行っていた女吸血鬼に問いただした。

その直後、消えた筈の『生りたての真祖』が服を着替え、尋常でとんでもない存在感をその身に宿して隣に立っていた。

消えてから再び現れるまで、1時間も経っていない。そして吸血鬼が最も信頼する、『自分の血』が同一人物だと告げている。

整理してみても、全く訳が分からなかった。

なんとかこの場を離れ、主に早く伝えるのが最優先の使命だと考え この場に居たくない、逃げ出したいというのが本音だったが

ようとした、その時、壱朗の目が再び、ピエールを捕えた。

「おい。餓鬼、ガキさつきまでの無礼について、お前の主の責任だ。とつと尻尾を巻いて帰れ。んで言うておけ、『14番目を連れて一週間以内に謝罪に来い。来なければ、こちらから出向いてお前の絵画コレクションを全部燃やす』とな」

「ひいっ！ 理解致しました！ 今すぐに帰り戻り、主に

お伝えさせて頂きますです」

よく分からない言葉遣いになったピエールに、壱朗は首を傾げていたが『もう興味はない』とばかりに 犬を追いかう様に 手

を振られ、ピエールはその場を逃げ出した。

ティアは、ピエールの負け犬っぽさがなんとなく可哀想だったが、壱朗の気まずそうな雰囲気から、弱い者苛めをした気分になったんだろぅなあ。と察した。

「よろしかったのですか？ あのまま行かせてしまっても」

「問題ない。『世界の修正力との衝突』は起こっていない様だから、これからは正体を隠す必要もない」

壱朗の目が自分の服装に向けられた気がして、ティアは純白のコートの裾や襟などの身だしなみが変でないか、さり気無くチェックした後、問いかける。

「では？」

「ああ、すぐにでも仕事を始める。まずは曾爺さんの仇の吸血鬼、その後、他の真祖のクソガキどもの、目を覚まさせる準備。そんなトコだな」

ティアはコートのポケットから符を取りだすと、目を瞑り額に当てる。

「確認致しました。犯人の吸血鬼は今、京都の街の貧民街区画で死肉を漁っていますね。これが情報です」

追跡用に飛ばしている蝙蝠 といってもティアの体の一部を『蝙蝠化』させたモノだが、をずっと犯人の吸血鬼に張りつかせていたのだ。そこから得た情報を式符に込めていく。

「よし、ちよつと眠気覚ましの運動がてら、行ってくる。

ティアは一応、俺の家族を頼む。その後は寢床を確保して、隅々まで綺麗に磨いておけよ？ 俺は一切我慢するつもりが無いからな？

寢床の場所は任せるが、明後日までは滞在できる場所にしてくれ。

「そう言つて、壱朗は空へと浮かび上がった。壱朗の背中には、飛

行を補助する透明な渦が四つ、五つ見える。その渦がロケットの様に力を吐きだす事を知っているティアは、壱朗が飛び立つ前に返事を間に合わせる。

「　　っ！　　は、はい。準備もちゃんと、綺麗にして、お待ち、して、おります」

その言葉が耳に届いた瞬間、壱朗はティアに視線をやりながら、尖った犬歯をかすかに覗かせてニヤリと笑った。それをティアが目にし、再び顔が赤くなりそうになった所で、透明な渦は爆発し、壱朗を空の彼方へと運んで行った。

ティアはこの後の事を考えた。

これで恐らく、壱朗様は一時間以上は戻らないだろう。

ターゲット
犯人の吸血鬼を消滅させるか、明日以降に虐める為に半殺しにして捕縛するか、どちらかを行うまでは。

壱朗様がそんな事をしている間に移動して、体を清めよう。壱朗様の家族の事と、寢床の事を頼まれたが、そんな準備はとくに済ませているのだから。

私にしてみれば三千年も待った初めてなのです。出会った頃は、それこそ私の方から何度もアプローチしてきましたが、『世界の修タイムバラドックス』の影響を理由に、やっぱりと断られてきました。正力との衝突』

壱朗様は『女を本気で抱くのは、もうすぐ死ぬ女だけだ』とずっと仰っていました。万が一、自分との間に子供ができ、『世界の修タイムバラドックス』の影響を受け、相手の女性かその子供のどちらか、もしくは両方が消滅してしまう様な事態を恐れている、との事でした。

ですから、近々死ぬ女以外を抱くのは、現代に戻る迄は我慢するつもりだと聞かされていました。

壱朗様の旅立ち

タイムパラドックス

今回の予定が『世界の修正力との衝突』を生む事もなく、無事に送り出した暁には私の全てを貰って頂く。いえ、壱朗様は『ティアが嫌がっても徹底的に満足する迄奪う』と仰っていましたね。嫌がる筈ありませんけど。それが冬眠する前の壱朗様と交わした『約束』でした。そして壱朗様は『約束』は守る御方です。

やっと正式な着族に成れました、しかも今日が初夜です。もちろん、寢床は部屋から見える景色までをちゃんと厳選して、三ヶ月前から半年間前払いで、高級ホテルの最上階を1フロア丸ごと貸し切りました。下の階から天井を叩く阿呆が居ない限り、邪魔は入らないはずです。

1600年辺りの

アンティーク

が搬入済み

自分好みの調度品に変えてあるホテルの部屋へと向かいながら、だんだんと実感が湧き始めたティアの頭の中では、嬉しさと恥かしさから生まれた妄想が凄い事になっていた

しかし、妄想の最中、ティアはふと気付いてしまった。

キスや触れるだけで

最後の一線を超えないだけで、それ以外の行為で物凄く攻められ、ティアは三千年もの間ずっと、そんな壱朗の行為に満足させられてきたのである。しかも壱朗は、興が乗ると意地の悪さが三倍程になり、ティアの奉仕で壱朗が満足しても、ティアが失神する迄は絶対にやめない。

そんな壱朗が『本気で徹底的に満足する迄』の相手をして『明後日の自分は生きていられるのだろうか』と、かなり本気で不安になるのだった……

第06話 初夜と真実（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第06話 初夜と真実

『冬眠』から目覚めてから8時間後、腕の中のティアの身じろぎを感じ、壱朗は意識を通常レベルに覚醒させる。

「あ、申し訳ありません。起してしまいましたか？」

「いや、寝てはいなかったと思う。まどろんでいただけの気がする」
「着族になった気を使おうが何だろうが、今の状態のティアに『嘘』は意味が無い。触れていれば、全て理解されてしまうからだ。」

ピエールを追い返してから、京都の街の貧民街スラム区画で仇の吸血鬼を捕捉した壱朗は、『縛符』と呼んでいるティアのお手製の札で、身動き一つできない状態にして、ティアの用意した部屋の隣に放り込んでおいた。

そして家族に、曾爺さんの仇を見つけたので追いかけると連絡を入れた。すぐに家に帰らなかったのは、壱朗は曾爺さんが死亡した時の壱朗ではないからだ。

何千年を生き、友人を殺された事もあれば、逆に友に裏切られて殺した事もある。今すぐ家に帰っても、家族と同じ気持ちになる事は出来なかった。

だからこそ、ティアと二人で部屋に籠った。それから四時間。徹底的にティアを堪能あいした。まだまだ足りないし、やめる気もないが、それでも魔力を限界近くまで消費していたティアには、休息は必要だった。

壱朗が散々注ぎ、つぎ込んだ魔力体液のお陰で、ティアの髪も元々の金髪に戻っていたし、肌の色も艶も先程までとは段違いに美しい。

ティア自身の魔力も大体、元に戻っているだろう。その分、体力は消費しているだろうが。

人間だった 過去世へ旅だった^{人間だった} 壱朗は知らなかったが、初めて会った時の銀髪にも見えた灰色の髪は、魔力を消費しすぎての白髪になってしまっていただけである。ティアの目は灰色だが、髪は元々綺麗な金髪だ。

「壱朗様は、最初に何処に行かれたのですか？」

「最初か？ 空も飛べなかっただろうし、使えたのは能力の『怪力』^{スキル}ぐらいだっただろうし、そのまま過去に飛んだだけだと思うぞ？」

「あ、そうですね。私と初めて会った時には、壱朗様は既に真祖としてもすごい方でしたので勘違いしてました」

ティアは壱朗の胸に顔を擦り寄せ、甘えている。今日までの三千年、心のどこかで不安を抱えていたのだろう。ティアの生まれた時代の知識では『時間跳躍』という概念がまず理解できなかった。それが意識の共有できない不安の一つになっていた。逆に理解できてしまっただけは、余計に不安になった様だった。

とにかく『生りたての壱朗』を送りだしてしまえば、『^{タイム}世界の修正力との衝突』は起こり得ない、壱朗はそう定義していた。

ティアが一人で百五十年間『結界』を維持できる魔力を得た時、この計画を実行した。壱朗が最大級の『結界』で墓所と棺を覆う。その中に自分を閉じ込め『冬眠』し、ティアが一人で彼方一族を『不幸に襲われなくなる結界』で守る。

ティアは『彼方』という姓が生まれた事を確認した後、西暦2000年から2100年までの百年間、神社の地下に籠り、地下で結界を維持し続けた。

たまに遊びに外に出たらしいが、それ以外はずっと籠り、上手くいった時に壱朗としたい事を幾つも考えて、時を過ごしていたらしい。

そして『彼方 壱朗』は歴史通りに生まれて、無事送り出された。

ティアは時間の許す限り、三千年一緒にいても教えなかった事を全部聞こうと心に決めているようだ。

「どれぐらい昔に跳ばれたのですか？」

「ん。そのあたりは覚えてねえな。『魔血晶^{背中}』、触っていいぞ？」

「あ、はい」

壱朗の背中には『魔血晶』が16個付いている。この『魔血晶』の数は吸血鬼の生きてきた年数に応じて変動する。ティアは抱きついた姿勢のまま、左手で背中を探る様に撫で、目当ての『魔血晶』を見つけた。

「あ、ありました。初めは大正時代と呼ばれる時代に跳ばれたようですね」

ティアが『魔血晶』の内でも、最初の頃を記録している物を触りながら言ってくる。壱朗の記録や記憶に関する事を知る事が自体が、嬉しいのだろう。声が弾んでいた。壱朗もティアの触れている『魔血晶』に意識を集中し、思い出そうとする。

「あ、そうだったな。初めは日本特有の古武術をできるだけ習得して、第二次世界大戦が起こる前にアメリカへと渡ったんだった」

「第二次世界大戦、ですか……あまりいい時代では無かったです。」

私も壱朗様が『冬眠』されてからは日巫女^{ひみこ}様の元にお邪魔していて、ほとんど地下から出ませんでした」

「まあ、『酋長』が生きてる限りは、もう二度とアメリカが戦争を起す事はないだろうがな」

「私はお会いた事ありません。どの様な方ですか？」

「そうだな、気のいい爺さんって感じたな。もう千二百年は生きてるはずだ」

ティアは顔を上げ、壱朗の顔を覗きこむと不思議そうに聞いてきた。

「『酋長』様は千二百年生きておいでなのに、戦争を止めなかったのですか？」

「止めようとはしたんだろうがなあ……」

「御存知ないのですか？」

「俺にとつちや、歴史への介入は禁忌タブーだったからな。止めると言えねえし、協力もできなかったしな。詳しい話は今度、『酋長』と酒でも飲みながら聞くんもりだ。今のアメリカは恐らく『酋長』が他の真祖ガキを抑えてるんだろ」

ラマルティーヌ卿と同じような真祖がアメリカにも居る様なモノなのか、とティアは理解したようだ。

「とにかく、大陸を変えて西暦900年〜1900年の間を何度も生きたな」

「ずっと不思議だったんです。何故、その期間だったんですか？」

ティアとは最近の三千年しか一緒に暮らしていないが、それでも壱朗と二度、過去に跳んでいる。その時から考えていたんだろう。

「西暦900年より前に跳過去んで、誤ってティアの祖先を殺す訳にもいかないだろ？」

「……………っ！　そ、そういう事をしれっと言つのはずるいと思いますっ！」

真っ赤になった顔を隠す為に、ティアは再度、壱朗の胸に顔を埋め、掛け布団を頭の上まで引き上げた。

ティアは壱朗が西暦900年より昔に跳ばないのは、ティアが生まれてくるのを守る為だと初めて気付いたようだ。

タイムパラドックス
世界の修正力との衝突から百五十年は身を守る程の結界術が完成するまでは、『1900年の壁は越えられない』とティアはずつと教えられていた。だからちょうど1000年遡さかのぼるのは、ただの区切りだと勘違いしていた。

西暦900年にはティアは吸血鬼になっていた筈だ。

「今だから言うけどな。ティア、過去に行く前の俺に『帰属の儀式』

しただろ。あれのせいで、俺はティアのある程度の情報を持ったまま、過去に跳んだ。しかも、出会った時から、触れてればティアの思考は俺にダダ漏れた」

「~~~~っ!!」

ティアは布団に籠りながら、壱朗のお腹を抓りまくった。ティアが触れているせいでティアの思考が壱朗に流れ込んでくる。

『恥かしすぎる！ 二十歳超えた後なんて、毎晩の様にアプローチしたし、毎晩ベッドに入りこむのに、さり気無さを装うのに必死だったはずなのに！ なのにそんな思考がずっと伝わっていたなんて！』

ティアは当時を思い出しただけで、悶え死にしそうになっているようだった。

「ま、それを黙ってたのは、ティアが俺を送り出した時に『御主人様』って呼んだからなんだが」

「……………うう。やったと思ったのに……………仕返してきたと思ったのに……………」

ティアはかなり血の濃い二世だったが、主を失った後で壱朗に拾われて帰属する事を望んだ。理由は簡単だった。

『理性を失いたくない』ただそれだけ。

吸血鬼は記憶が脳の容量の限界を超えた時点で理性を失い、ただの獣と化す。吸血鬼であつたとしても脳の容量は人間と変わらない。ただ、人間が30%以下しか使っていないモノを100%使えるだけの話である。

吸血鬼が理性が保てたとしても、およそ五百年が限界だ。それは真祖だろうが、二世だろうが変わらない。五百年以降は何もしなければ、人格を形成していた部分の記憶が消えてしまい、発狂し、理性のない化け物になり下がる。

そして、そんな限界を安全に回避する唯一の方法がある。

それが『記憶の結晶化』である。

『記憶の結晶化』は吸血鬼の記憶とDNAを引きずり出し、吸血鬼の背中に『魔血晶』を作り出す。これは真祖にしかできない上に、どの記憶を結晶化するのも真祖の判断に委ねられる。

そして消去も、破壊も、真祖の思いのままだ。

例えば、真祖がその血族者の性格が嫌いだった場合、性格形成する部分の記憶を結晶化し、背中に埋め込まずに破壊したとしよう。するとその吸血鬼は生きてきた記憶はあるのに、自分の好みや主義などが白紙に戻ってしまっている。その為、『血』の指示に従い、ロボットの様に真祖の言葉にだけ従う様になってしまう。

二世以降の吸血鬼の寿命と運命は、真祖に握られているのである。どんなに二世や三世が力を手に入れて、物理的な強さで真祖を超えてしまおうが、『死』や『血の束縛』という概念から抜け出すには真祖に尽くすしかないのである。

安全ではないが、もう一つ方法がある。

それは『脳の消滅』である。

ただ破壊しても、吸血鬼の脳細胞は時間が経てば、記憶も元通りに復元される。だが『聖水をかけ、炎で焼かれた脳細胞』には記憶が復元されない。外見的にも能力的にも復元はされるが、新しい脳細胞となってしまう、あつたはずの記憶が消えてしまう。

この方法が安全でない理由は、『どの記憶が消えるか全くわからない』事だ。この方法がとられた場合、最悪、体の大きな赤ん坊の吸血鬼が誕生する。『魔血晶』が一つでも背中にあれば、そこから生活の方法などは復元できるだろうが、それすらない場合、本当の赤子と同じになる。体と力は化け物並みの、である。

医学の発達により、脳のどの部分が、どんな記憶を司るか分か

つてきてはいるが、それでも完全ではなく、自分で実験したいと言う吸血鬼も居ないだろう。

自分の姉が真祖になった翌日に、ティアは二世の吸血鬼になった。平穩に暮らせたのは初めの数年だけで、最終的には教会から迫害される。姉は、ティアを吸血鬼にしてしまった事を悔み、ティアを村から逃がす為、真祖でありながら民に殺される事を受け入れた。そこに前もって知っていた壱朗がティアを迎えに来たのである。

そして今、壱朗の言葉でティアは気付いた。

『壱朗はティアの情報を持ったまま過去に飛んだ』そう言ったのだ。つまり、迎えに来れるだけの情報は知っていた。

『壱朗は知っていて姉を見殺しにした』
ティアの吸血鬼化も、止めようと思えば止められた筈。

その瞬間、壱朗の腹を抓っていたティアの指に込められていた力が、何倍にもなって腹から血が噴き出し、肉がえぐれる。

掛け布団で顔が見えないティアに、責める事もせず、壱朗はただ聞いてみる。

「……恨むか？ ティア」

「………解りません。『たら』『れば』に意味はない。そう教えてくれたのも壱朗様です。………私は、壱朗様と共に歩む生き方以外、知りません」

「………」

「………ですが、教えて下さい。何故、吸血鬼になるまで待ったのですか？ 何故、姉も一緒に救って下さらなかったのですか？」

「………待った理由は『吸血鬼のティアが欲しかった』ただそれだけだ。他には何も考えなかった。ティアの姉の方も同じだ。誰もティ

アの主でいて欲しくなかったから、見捨てた」

『嘘』だ。壱朗の優しい『嘘』だった。伝わってしまう事も分かっている。

だが、壱朗は『嘘』をついた。

「『嘘』はつかないで、下さいと、お願い、したじゃ、ないですか」
壱朗の感情が流れ込み始めて、ティアは涙を止める事ができない様だった。

「覚えてないな」

それも『嘘』。旅立つ壱朗へのティアの願いは、今も覚えている。忘れた事など一度もなかった。冗談を言った事や、言いくく口籠った事はたくさんあったが、許されない『嘘』をついた事は一度もない。

ティアは壱朗の腹の傷に口を付け、癒そうとするかのように舐める。それと同時に当時の記憶がある『魔血晶』を探して、その記憶と感情の全てを見ようとした。

その当時、壱朗はティアの姉も助けようとした。その為にティアを迎えに行く時期をできるだけ遅くし、自分の『魔力の蓄積血の熟成』に五千年もの時間をかけた。

吸血鬼は、生きれば生きる程、その力は増す。『魔力の蓄積血の熟成』と言う概念は壱朗の為にある様なものだった。現代ですら^{いま}日巫女の『魔力の蓄積血の熟成』が二千歳で最高だ。当時でその倍以上である。

力を得た壱朗は、できない事など何もないはずだと信じていた。だが、それは大きな間違いだと気付かされる。

世界に『絶対』はない、と。

ティアの姉の^{真祖}血技は壱朗の血技と同じく、特殊であり強力だった。

『強奪』

ティアの姉^{真祖}の血技は、どんなモノをも奪う事ができる。そういう恐ろしい能力だった。血も、力も、『血技』も、奪う事が可能だ。能力の使用の代償に『血の熟成』を失うのだが、『血の熟成』すら奪えるのなら、補充は可能だった。壱朗の五千年もの『血の熟成』^{魔力の蓄積}すら奪い、殺されかねない能力だった。

それを知っても、壱朗はティアの姉^{真祖}に救いの手を差し出した。だが、ティアの姉^{真祖}はティアの為に死ぬ気だった。強力すぎる『強奪』は二世であるティアにも受け継がれ、そして二世であるが故に、代償を背負わせていた。

ティアはティアの姉^{真祖}とは違い、『強奪』を所持するだけで『血の熟成』を著しく消費する。それは記憶を失うのと同じ。そして、ずっと消費し続けていた。

つまり、ティアは吸血鬼であるだけで自然と死んでしまうのである。

壱朗は悩んでいたが、ティアの姉^{真祖}は答えを出していた。

『ティアから血技を『強奪』し、自分が死ぬ』

そうすれば、ティアは死ぬ事が無い。

他の真祖に帰属し、その真祖の血技を得ても問題はない。

だが、ティアの姉^{真祖}が生きていては、他の真祖へ帰属できないし、『血の熟成』と共に再び『強奪』の力に目覚めるだろう。

確かにその方法は有効だった。壱朗は血技の研究でこういった受け継がれ方をするのか、十分知っていた。だが、壱朗も食い下がる。『自分ならばティアが吸血鬼になる前からやり直せる、過去を変えられる』と。

そして、ティアの姉^{真祖}は壱朗に笑顔で聞いた。

「それなら、もう既にやり直されているはずなんじゃないの？」

それ以降、壱朗は何もせず。ティアだけを助け、旅に出た。

ティアの姉真祖とのやり取りはティアを助けた直後に『魔血晶』へと封じ込めておいた。思い出す事が無い様に、ティアに気付かれる事が無いように、と。それからの壱朗は、さらに歴史への介入を徹底的に避けるようになった。

全てを知ったティアは、必死に取り繕った陽気な声で話しかけてきた。

「『帰属の儀式』が成功した訳ですから、私も過去に跳べるんですかね？」

ね、壱朗様？」

「……………そうだな。飛べるかもな」

「じゃあ、商店街で一週間前に食べ損ねた『2100年越しパフエ』も食べに行けますよね。一緒に行ってくださいます？」

「……………ああ、過去人間だった壱朗の俺に会わない様に、ならな」

「生まれたばかりの壱朗様の顔も、見てみたいんですけど、いいですか？」

「……………俺は病院には入らないけどな」

「じゃあ、じゃあ……………」

……………お姉ちゃんを助けに行きたいって言ったら、一緒に行ってくださいますか？」

「……………本気でお前が望むんならそうするさ。タイムパラドックス世界の修正力との衝突とだって闘ってやるぞ」

ティアは、それ以上は自分を繕えていなかった。今の壱朗ですら、見るのが怖い、優しい笑顔を見たのだ。壱朗の記憶の中にあるティ

アの姉は、見た事のない強い意志と、見惚れるぐらい綺麗な笑顔で、ティアの為に死を選んでいる。

ティアは耐えきれなくなったのだろう、暴れた。壱朗の腹筋を掴み、千切り、鳴咽も、涙も、我慢も、加減もできておらず、壱朗の腹筋はティアのせいでボロボロで、ベッドは血まみれだった。

「い、壱、朗様はっ。や、さしいからっ。きらいです」

「そうか。俺はティアが大好きだ」

「もっつ、と。じょうつずに、嘘をついてほし、かったです」

「そうだな。約束を破ったのは、あの時が初めてだと思うが練習するべきだな」

「嘘でっすよおお！ お姉えちゃんにも、いちろう様にもっ、嘘ついて欲しくなかつたっです！」

言葉と共に力任せに叩きつけられた両腕は、壱朗を傷つける事なく、壱朗でなければ大穴が空いていただろうが、その下のベツドだけを破壊し、とてつもない音を立てた。

「ああああああっ！！」

「泣いていい。今度は全部、俺が受け止めてやるから」

力任せに腕を振り回すティアの体を、物を壊さない様に片手で抱き締めて固定してから、ティアごと空中に浮かびあがり目を瞑る。ティアは暴れるのは止めたが、物凄い腕力で抱きつかれたままの状態になる。恐らく先程からずっと、無意識に『怪力』を使っているのだろう。壱朗でなければ圧迫死どころか、胴体が真っ二つになっているレベルだ。

「うっうっ……おねえちゃん……」

『PULLLL。PULLLLLL』

ティアがベッドを破壊した音が、下に響いたせいだろう。従業員

からの確認の電話だと予測がつく。片手で受話器を取り、相手の話も聞かずに一方的に通達する。

「何だ。音なら気にするな、ただの痴話喧嘩だ。『邪魔しに来るなよ』」

壱朗は言葉に魔力を乗せて、来ない様に『言霊』で念を押しておいた。

「すみません。いちろうさま。また、ごめいわくをかけてしまいま
しい……」

「なんだ、子供にでも戻ったのか？」

「ちやいますよお。ぎえんぎよちゅうしゅうぎゃ、おかしく」

「喋るな。思うだけで伝わるだろうが」

「あ……あい」

恐らく、体の混乱が言語中枢にまで及んだのだろうと察しておく。

『壱朗様、ごめんなさい』

「どうしたい？ ティア」

『何もできないですよね。過去って変えられないですよね』

「恐らく無理だろうな」

『だから、お姉ちゃんは笑ってたんですよ』

「そうだな。ティアの事だけ考えて、満足してる笑顔だった」

『壱朗様は、死なないって約束してくれますか？』

「それはどうだろうな。死なない存在はない。吸血鬼だっていつかは死ぬさ」

『じゃあ、私より先に死なないで下さい』

「ふむ。それは俺が嫌だな」

『むう、じゃあ一緒に死んで下さい』

「心中がしたいのか？」

『違います。解ってて聞いてますよね？』

「ああ、止む追えず死ぬ時は、一緒に死なせてやるよ。どんな事をしても死なさない様に散々、足掻いた後でならな」

『それでいいです。お姉さまの事は我慢します』

「お姉ちゃんの為にも、そのほうがいいな」

『その呼び方は忘れて下さい』

「お姉さまの為に強く生きる」

『はい。御主人様と一緒に生きます』

「つたく、我が儘な眷族だな」

『はい、壱郎様のたった一人の眷族ですから』

そのまま、下らないやり取りを少し続けていると、落ち着きを取り戻したティアは眠りについた。そのままの状態で眠ってしまった為、壱郎もそのままティアの為に、ティアの壊したベッドの代わりをする事になった。

第07話 家族（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第07話 家族

壱朗は目の前の状況を見無視し、ティアと自分達の血技について考える。

結局、ティアの姉の目論見は9割方成功した。ティアと壱朗は三千年の間、一緒にいたが、結局ティアの血技は完全に消える事はなく、『記憶をコピーする』というモノに落ち着いていたし、それ以上で成長する事もなかった。

ティアは知らなかった事だが、『帰属の儀式』は眷族側が行うだけでは『血技』は付与されない。眷族側が行う事で真祖による『記憶の結晶化』が可能になるだけだ。だからティアが旅立つ壱朗に儀式をした事で、壱朗は幼いティアと初めて会った時にはすでに『記憶の結晶化』が可能だった。ただ出会った時のティアの主は姉だった為、姉が死ぬまでは不可能だったが。

結局、ティアが生きた三千年の間に壱朗により、背中に六つの『魔血晶』が創られた。そして、これからも増えるだろう。

真祖側の『帰属の儀式』は壱朗自身が恥かしがったので、ホテルの部屋で抱いた時にこっそり済ませておいた。おかげで抱いている途中から、壱朗の意識がダダ漏れになり、焦らしたり、反応を楽しんだり、苛めようとする意思がティアにバレて怒られた。素直に苛められてくれなかった為、壱朗は少し不満だった。

本来の意味で儀式が完了した為、ティアには壱朗の『時間跳躍』の血技が新たに付与された。ティアは壱朗が吸血鬼化した訳ではない。『帰属の儀式』により眷族となっただけなので、血のつながりは薄い。なので『時間跳躍』も大した効果はないだろう。

とりあえず、3時間後の自分宛てに手紙を跳躍ジャンプさせたりと、暇な時に微妙な訓練を行っている。

そして、壱朗が何故こんな事を考えているのかというと、今まさに壱朗は現実逃避の真っ最中だからである。

「あら、お母様。御夕飯のお買い物でしたら、私ワタクシが購入しました材料がもうすぐ届きますのでお待ち下さいな」

「あら。ティアちゃん。悪いねえ、そんな事まで気にしてくれなくてよかったのに」

「いえいえ。これからは家族として過ごさせて頂くんですもの。今日ぐらいは私ワタクシが全て用意させて頂きますわ。旦那様にも、御両親にも私の手料理を召し上がって頂きたいんです」

壱朗にとって、あまりにも現実味の無いやり取りが、目の前で交わされている。仕舞には爺さん婆さんまでが調子に乗りだした。

「ティアさん、ワシらも御一緒させてもらってえんかのお」

「あら、お爺様。もちろんですとも。旦那様からは、お婆様といつまでも睦まじいお二人で、大変幸せそうだとお話を伺っております。その秘訣を御食事をお召上がりになられながら教えて頂けますか？」

「ええ、構いませんよ。爺さんが浮気しそうになった時の話も、してあげましょうかねえ。ねえ、爺さん？」

「婆さん、それはもう許すと言ってくれてたじやろうが。今更、蒸し返さんでもええじやろに……」

壱朗は爺さん婆さんの態度の変化に、頭が痛くなってきた。

「……爺さんも婆さんも。年末までは、爺さん婆さんと呼ぶなと俺に言ってなかったか？」

「そうじゃったかの？」

100歳を超えた

「『爺さんというのは曾爺さんくらいの年齢の人を差すのだ!』とか『ワシらの事は民子さん敬三さんと呼びなさい!』って二人揃って言っただじゃねえか!」

「壱朗ちゃんや、婆さん達ももう若くないんよ? いつお迎えが来

るか分からんけんね、今の内に『肩叩き券』と『肩揉み券』使つて
おこつかねえ」

「婆さん、俺はそんなもの作ってプレゼントした事なんか無いぞ。
親父の間違いだらうが。つーか、『けんね』ってどこの方言だよ！
ウチは三代前まで全員、大阪生まれの大阪育ちしか居ないって言
つてただらうが！」

「壱朗や、優しい婆さんをそんなに苛めるもんじゃないぞ。

苛めはよく社会でも問題になるじやろうが。苛めていいのは、自
分の嫁さんを布団のな…………『バキッ』……………」

「…………婆さん、殴るのは良いが…………それはちよつと凶器が過ぎ
ないか？」

「壱朗ちゃん、これはスチールバットに見えるだけのプラスチック
のバットやけん大丈夫よ？」

「…………そうか。ならいい。部屋に戻るから飯ができた^{メシ}ら呼んでくれ」
そう言つて、壱朗は自分が生まれてから28年は過^スごした家を、
懐かしく感じながら二世帯住宅の二階へと、階段を上がり自分の部
屋へと入って行つた。

そこには、八千年前と変わらない部屋がそのままあり、寝正月を
満喫しようとしていた為の用意も、そのまま置いてあつた。

「確か、煙草と酒を買ひに出たんだよな」

西暦2100年1月2日に曾祖父が死亡し、壱朗は過去へと跳ん
だ。八千年かけて研究し、現段階の方法では過去は変えられない事
は、間違いない。

この時代にやつとたどり着いたが、葬式に出る事もしなかった。
昔の知り合いに、吸血鬼になった事がばれるのが怖かった。
いや、友人に『化け物』という目で見られるのが怖かったのだ。
家族にも知られたくなかつたが、ティアに説得された。
家族が死んでからでは、伝えたいことも伝えられない、と。

この部屋に、まだ2箱も残っていた煙草に火を付ける。用心深い性格だったのだろう。だから、あと3箱しかないと考えて煙草を買いに行った。今では何でも出来るようになったからか、『2箱も』なんて考えている。

この時代の煙草は軽い……軽過ぎて目にもしめない。泣くことすらできなくなった壱朗自身の様だった。

姉貴と弟は葬式が終わって、すぐに東京に帰ったらしい。仕事人間な二人らしい行動だ。

壱朗は明日から会社が始まるが、辞表を用意した。何らかの形で迷惑をかけるなら辞めた方がいいと判断していた。

ティアは交際している女性、という設定で上がり込んだ。親父が警察から戻り話が始まれば、それもすぐに嘘だとばれるが。

『お父様がお戻りになりました』とティアからの『思念通話』^{テレパシー}が届く。『すぐに降りる』と返し、一階の居間へと向かう。

居間では大きな卓袱台が出され、ティアが一生懸命、地中海風の鍋物を作っていた。ティアには空気を読む、という期待はしない方がいいらしい……

「おかえり、親父」

「お前こそな、壱朗」

「さあさ、先にご飯を食べてしまいましょ。貴方もお腹すいたですよ？」

「ああ。爺さんの焼酎出してくれるか。美津子」

「はいはい。それと、漬物よね」

そう言って母さんが親父を促し、食事が始まる。コレがきつと、『彼方壱朗』が真祖になった時に、無くしてしまったはずの『日常』の一つだったのだろう。

その後も壱朗とティア以外にとっては、曾爺さんが居ない事以外

何も変わらない日常の風景のまま、酔っ払わない程度に全員が酒を飲み、　　壱朗とティアは全く酔う事が出来ない体だったが　　食事が終わる。

ティアと母さんと婆さんが片付けの為に、台所で洗い物を始めた頃を見計らって、話を切り出した。

「親父、爺さん」

二人はやつとか、と言わんばかりにジロリとこちらを睨み、流石親子、そっくりだった　　しかし、壱朗が話し始めるまでは、何も言わずにお互いのグラスに焼酎を入れ合っていた。

「俺は、吸血鬼になった。そして、ティアもそうだ」

台所では壱朗の母、美津子が食器を落としていたが、ティアが床に落ちる前に掴んでおり、割れる音が響く事もなかった

「曾爺さんを殺した吸血鬼も捕まえて、閉じ込めてある。これから復讐する為に」

「そう、か。だから、電話の後、すぐに帰って来なかったんだな…」

…」

「ああ、帰りがかったけど、もう日常には戻れなかった。明日から会社が始まるけど、辞表を出すつもりだ」

こういつ時の彼方家の人間は強い。医者から、曾爺さんの残りの寿命の話をされた時もそうだった。感情的で、無駄な事は聞かない。必要な事だけを話す。

「どうやって生きて行くんじゃ？　当てはあんのか？」

「爺さん。当てはある、こう見えてティアはかなり長く生きてるんだ」

「一緒には、暮らせんのかい？」

「それができそうなら、今ここで話してない。って事だよな、壱朗」

「すまない、婆さん。親父の言う通りだ」

壱朗の『血技』と現在の年齢については、話さない事に決めた。

しかし、家を出る事は壱朗の中で既に決めており、ティアはかなり渋ったが、その為、家族を安心させる設定を考える事にした。

ティアが人類に友好的な吸血鬼としての地位があり、高齢である経験が豊富であるという事を話し、当面はティアに面倒を見てもらうという、男としては何とも情けない形にする事になっていた。

そういう話にする許可を、ティアから貰うのには苦労した。

ティアは壱朗の家族に、高齢に見られるのが嫌なようで、壱朗は『不老なのに気にするのか？』と女心の分からない、ヘタレらしい事を考えていたが、散々話し合う事になった。

我慢してもらう為の代償に、二人きりで南の島へバカンスに2週間も連れて行く事になり、ティアは、『それぐらい当たり前です。女にとって、旦那様の御両親の印象というモノがどれだけ大事なのか分かっていません』と壱朗の居ない所で怒っていたが、壱朗は今後の予定の修正をする事になったのだった。

「親父、申し訳ないけど適当な時期になったら、警察に行つて、もう一度俺の行方不明届け出しておいでくれ」

「はあ。お前なあ。俺が今日、警察で何人の人に『人騒がせな』って顔で見られたと思つてるんだ？」

警察や世間の間では、曾爺さんの仇打ちをすると家を飛び出した、曾孫（28歳）は家族からの警察への連絡で行方不明扱いとなり、1週間経つた後、仇の吸血鬼が見つからず、無傷で帰ってきた。というヘタレなオチが付いていた。今日、壱朗の父親は、それを警察に報告に行っていたのである。

「悪いな」

「壱朗らしくない落ち着きっぷりだったから、何かあるは思ってたがなあ。他に、わしらにできる事はないんかの？」

爺さんの好意は嬉しい。だが吸血鬼は弱肉強食、善悪の価値は力で決まる事が多い。人間のみんなには何もできないし、足を引っ張るだけだろう。

「……………」

何も言わない事で、その全てが伝わる。祖父は本当に曾祖父そっくりで、その辛そうな顔を隠す笑顔が、壱朗には辛かった。

「そうか……………」

爺さんの顔を見たせいでティアは、言いたい事をじつと我慢していたのが限界を超えたのだろう。ティアは自分は何も言うべきではないと、家に来る前に自分で言っていたのに反し、言葉一つ一つを模索するように話し始めた。

「壱朗様が、毎年、初詣にこの街の神社に来られる様に、私が、何とかします。ですから壱朗様の事を、お忘れにならないで下さい。

私達は、皆様がお亡くなりになられても、その後も、きつと、ずっと、生き続けてしまい……『ティア、もう良い』……………はい……………」

「壱朗にはもったいない嫁さんだのう」

「若い頃の私みたいだと思いませんか？ 敬三さん」

「それを言うなら、この家に来たばかりの美津子にそっくりだよ」

「お前はいつまでたっても、美津子さん離れができのう。お前がそんなだから、壱朗はティアちゃんを捕まえる前に、バツイチなんかになるんじゃない」

「父さん、それは壱朗自身のせいでしょうが！」

壱朗はそんな祖父母に対し、『過去の事持ち出すなよ。後で、ティアの機嫌が悪くなったらどうしてくれる』などと考えていた。

「前の嫁さんはひどかったからのぉ。一回も民子さんって、呼んでくれなかったしねえ。壱朗ちゃん、ティアちゃんと仲良くの？」

「ティアさん。壱朗の事。よろしくおねがいします。毎年大晦日には、神社でお待ちしていますね」

「あ、はい。お義母様^{かあさま}」

何やら意味深な返事の仕方をしているティアを壱朗は努めて無視し、父親と向き合う。

「壱朗、いつ行くんだ」

「……………今晚中には、行くつもりだ」

「次は、年末か……………約束は、守れよ？」

「俺は『約束』しないぞ、親父」

「こんないい嫁さんを嘘付きにする気が？」

「……………努力はする」

母親とティアが共に傍にきていたので、壱朗は『まだ嫁じゃない』という言葉は呑み込んだ。『まだ』に反応されても、『嫁じゃない』の方に反応されても碌な事にならないのは分かっている。

「お母さんもお父さんも、その……………吸血鬼の事はよく知らないけど、壱朗が苦労するっていう事は分かるわ。でも、何があっても壱朗は私達の息子よ？」

「わしらの孫じゃしの。のう、民子さん」

「そうじゃねえ。敬三さん」

『俺も彼方の家の子に生まれて良かったよ』と思ったが、口に出したら負けだと壱朗は思い、頷いて見せた後に心の中で感謝しておいた。

「俺の息子だ。特に自慢できる所はなかったが、良い嫁さんを連れてきたのが良い男の証だ。……………行方不明にするんじゃ、周りの誰にも自慢できないじゃないか。おい、壱朗。商店街の皆にティアさんを自慢してからじゃダメなのか？」

「アホな事言うな、親父。母さんと爺さん婆さんを見習って、カッ
コよく締めるよ。それじゃ俺の中の親父は、いつでもアホな親父じ
やねえか」

「アホでいい。だから忘れるな。俺はお前の家族だ」父親

「姉貴と隆式りゅうしきへの説明よろしくな。ちよつとは吸血鬼の事調べてか
ら、話すかどうか決めてくれ」

「一美ひとみと隆式りゅうしきにも一度は会つとけ。後が煩いからな。……………そう
だな四月になったら話す。それまでに会いに行け」

「分かったよ。ティアと必ず行つとく」

横を見るとティアも少し目が赤くなり初めていて、壱朗はそろそ
ろ潮時かと考えたのだが。

「じゃ、日付が変わるまであと三時間はある。美津子、飲むぞ」

「いいのう、確か死んだ父さんの秘蔵の芋焼酎が出てきた筈じゃつ
たる？ あれも開けるぞ。民子さん、熱燗と冷はどっちがええ？」

「あらあ、どっちもいいですねえ！ 敬三さん、まずは熱燗にしまし
ようか」

「貴方、おつまみに漬物は全部出しちゃいますね。御歳暮の残りも
何かあつたかしら……………」

「……………旦那様？ お酒が無くなるまでは、出発できそうにないです
ね？」壱朗様

調子に乗って呼び方を変えるティアを睨むと、そんな視線は気に
ぜずに、壱朗の家族を見ているティアの笑顔に、壱朗も文句を言う
事を諦める。

「ああ、全くアホな家族だと、湿っぽくもなりやしないな」

「……………その割には嬉しそうですか……………『ティアちゃん。一緒
に飲むわよ』……………はあ！ お義母様。では旦那様壱朗様。飲んで
きますね」

「ったく……………」

……その後、本当に酔いつぶれた母親と祖父母が居間で寝ている間に、寝たフリなのが一目瞭然な父親に礼を言い、ティアと共に家を出た。

「旦那様。素敵な家族でしたね」

「ティアの両親にちょっと似てたな」

呼び方については、明後日ぐらいまでは好きにさせてやろうと思っ
っている。

「はい、きつとこれから先も、あんな家族に出会いますよ。その時
に思い出すんです。私達の家族もそうだったって」

「そうだな」

「私達にも、家族はできると思いますか？」

ティアは遠くを見ながら、確認する様に聞いてくる。

「望めばなんだってできる……とは、言えないよな。力がある
と余計に、できない事が分かってしまうもんな」

「そうですね……でも！ いつか、旦那様の子供を産みます！」

「酔っ払ってるのか？ ティア」

「酔ってませんよ。吸血鬼は酔いません」

「だな」

力を手に入れると現実がより現実^{リアル}になる。できる事が増えると、
できない事がはつきりと解ってしまふ。嫌な話だった。

空の高度を知る為に鳥を超え、空の高度を知ったからこそ、宇宙^{ソラ}
では生きていけない事を知った。そんな話を聞いた時、寿命が短い
生き物だからこそ、人間には愛が溢れ、希望に満ちているのだと思
った。

俺は俺の腕にしがみつきながらも、笑顔で隣を歩いてくれるティ
アを、いつまで愛していただけるのだろうか。

「ずっと、一緒にいて下さいね。一緒に死んでくれる約束も忘れちゃ嫌ですよ?」

ティアは気付いていたのかもしれない。

現代に二千歳以上の吸血鬼が居ない理由に。

そしてそれは、耄朗達にも適用されているのかもしれない事に。

「だから、『約束』したのか?」

「……何です? 旦那様?」

「いや、何でもない。『約束』は守る。ティアとの南の島の『約束』バカンスもな」

「はい! きつとですよ」

そうやって支え合いながら、ティアと耄朗は闇夜の道を歩いていく。まるで、人間が支えあって生きていくかのよう。

第08話 お披露目（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第08話 お披露目

ティアは門の前に礼儀正しく立っており、次々と来る入場者を捌いていた。

ティアの後ろには扉が幾つも並んでおり、扉と扉の間には日巫女ひみこの眷属がそれぞれ立って、ティアと同じ様に案内をしている。

「ヨーロッパ方面の血族の方は、AからEの扉へとお願ひ致します。えと、アジアの方ですか？　ならHからKの扉へとお向かい下さい」

「ティアさん、三世の方が『四世以降と一緒に馬鹿にしているのか』って怒ってます〜！」

手伝いをしてきている、日巫女ひみこの眷属である壹与いよが泣きそうな声で走り寄ってくる。

「壹与さん、またですか？　とりあえず、有無を言わせず扉の中へと放り込んで下さい。そうすれば、彼方様の『結界』のせいでおとなしく座る以外、行動出来ないはずですよ」

「それが、扉の中に入る前に、文句を言い始められました〜」

壹与いよは三世だが日巫女ひみこと同じく、二千年近く生きており、背中の『魔血晶』も既に三つ付いている。故に、その辺の三世や、四世以降に遅れを取るはずが無いのだが、いかんせん気が弱い為、強気に出られるとついつい萎縮してしまい、ティアに泣きついて来るのである。

お陰でティアの立っている後、一際大きな扉の前には吸血鬼が十人程、正座させられている。全て、壹与いよに因縁をつけ文句を言って、ティアにお仕置きされた二世と三世だった。

「それは、分かってはいるんですけど、何故か、皆さん怒るんですよ〜」

ティアは壹与いよを見て、何度目になるかわからない溜め息を吐いた。壹与いよの外見の事を考えて、『これでは仕方ないのかもしれない。またお仕置きしますか』と思いながら壹与いよに指示を出す。

「とりあえず、文句を言う輩は真祖でないかぎり、全てこちらへ回して下さい。真祖の方々が一般門に来る事は無いと思いますが、誤って来られた場合は、直ぐに『念符』で連絡を。御迎えに上がりますので。宜しいですね？」

「はい、解りました。」

壹与いよは間延びした話し方のまま 本人的にはシャキツとしたつもり仔馬の尻尾の 返事をし、ポニーテールに纏められた綺麗な黒髪を揺らしながら担当の扉へと戻って行く。ティアには歩き方までフラフラしているように見えるのだが、本人は至って真面目に、真っ直ぐに歩いているつもりらしい。

日巫女の血族は全員、日本人らしい黒髪だ。それが血族の条件なのかと聞きたくなるぐらい、黒髪の者しかない。そして何故か十代に近い容姿の者が多い。日巫女本人は『年齢不詳の京美人』といった出で立ちなのだが。

ティアは、その後ろ姿に『日巫女様も変わった趣味の方なのね』ひみいと思いながら、入場者が疎らになってきた事を感じ、正座している面々に話しかける。

「さて、『結界』を解きますが、大人しく座席へ向かえますね？」

既に戦意喪失どころか、とにかくこの場から離れたいと考え始めていた二世や三世の面々は、ティアを怒らせない様に、ただ黙って首を縦に振っていた。

「では……………解！ これで動ける筈です。問題を起こさないで下さいね」

やっと解放された面々は、とにかく逃げる様に己に指示されてた扉へと入って行く。この時正座させられた面々が、『吸血鬼社会に

変革をもたらす存在』としての壱朗の、力の誇示に一役買い、広告塔になり得る存在だった。

ティアを含め、扉の前で案内と雑務を担当している数名は皆一樣に、背中の大きく空いた衣装で行っている。

ティアは純白のイブニングドレス。壹いよ与を含め、日巫女の眷族である八人の男女は、袴が男女色違いの巫女服だった。何故、背中を大きく露出させているかというと、簡単にいえば『身分魔血晶』が解る様にある。

五百年以上生きた者
力のある吸血鬼は背中に『魔血晶』が付いている。

その色と数が、ほぼそのまま力の格差となる。

色は、真祖なら『黒』。二世は『青』。三世は『赤』。四世以降は三原色の『黄色』に近い、明るい色をしている。

数は基本的に正多角形の呼び名で呼ばれる。

五つ持ちは『Pentagonペンタゴン』、六つは『Hexagonヘキサゴン』、七つで『Septagonセプタゴン』。

何故、多角形の呼び名で呼ばれるかというと、『魔血晶』を創るつまり『記憶の結晶化』の際には、自然とその力に合わせた魔方陣が浮かび上がる。また、全力で力行使する際にも背中に、魔血晶を基点とした同じ色の魔方陣が浮かび上がるのである。

この魔法陣は自分では見えない為、真祖か他の吸血鬼の『強大な力記憶の結晶化』を見た事がある者しか実物を知らない。『強大な力魔血晶』をいくつも持つ吸血鬼。その全力での戦闘を、見た事がある者達も知っているだろう。生き残っていれば、だが。

そんな呼び方をするのは、伝統や格式を重んじる三世以上の者が多い。

何故なら四世以降の者で、千年を超えて四ツ星『テトラゴン』^{Tetraagon}になる事は、あまりにも珍しい事なのである。故にまだ若い吸血鬼や四世以降の世代は、単純な言い方で『モノゴン』^{Monogon}を一ツ星^{シングル}、『ディゴン』^{Digon}を二ツ星^{ダブル}、『トライゴン』^{Trigon}を三ツ星などと称する場合が多い。伝統や格式を重視する事のない、下位の吸血鬼社会の中ですら禁忌^{ブイ}となっているのが五芒星^{pentagram}（ペンタグラム）や六芒星^{Hexagram}（ヘキサグラム）^{am}を意味する呼び名だ。

ティアは六つ持ちの『ヘキサゴン』^{Hexagon}であるがその背に現れる魔法陣の様子は六芒星ではなく、雪華模様^{スユヅ}に似た 壱朗が長生きとかけて『万年生きる亀模様』と言ったら殴られた 六角形模様である。

五芒星^{Pentagram}（ペンタグラム）や六芒星^{Hexagram}（ヘキサグラム）は吸血鬼に對抗しうる、教会所属の魔法使いや魔術師、日本の陰陽師や中国の符術師などが行使する力に現れる魔法陣である為、吸血鬼からは忌み嫌われている。

壱朗やティアはそんな事とは関係なく、技術として符術や陰陽術、果ては魔術まで世界各地の魔力で使用できる術を色々と収集している。

そんなティアでも、姉妹共に教会の人間に迫害された記憶があるからか、五芒星や六芒星には忌避感を隠さない事が多い。

壱朗からすればどんな技術を使っても、自分の血技の謎を解明しなければいけなかったし、なにより娯楽 小説や漫画、アニメなど の中に魔術師や符術師など山ほど出てくる時代に生まれた為、恰好良いなどと評しており、その様な事は吸血鬼が口にすべきではないと、ティアによく怒られていた。

今、この正面の大扉を管理しているのは、背中に『Blue Hexagon』^{蒼青の六角血晶}を背負ったティアだ。

この大扉は『真祖』専用。世界に十四人いると言われる真祖の内、

既に十人が中にいる。

扉は一度も開けていない。

だが真祖なのだ、それぐらいの事はやってのけるのが当たり前だ。例え、この会議場が壱朗の全力の『結界』により『扉』以外からの、入退場や破壊が出来ない様にされていたとしても。

愚か者達を全員解放したティアは、外から見えない様にお腹に貼った『符』を剥がす為にドレスの中に手を入れる。

壱朗の指示の通り、『血^{血の力}の熟成』を誤魔化す『符』を貼ってワザと愚か者を集めるのは、もう十分な筈だった。

「おい、何故三世たる私が四世とも等と、同じ区画に入らねばならんのだ」

壹与^{いよ}の処で文句を言っていたという愚か者^{三世}だろう。近づいて来ているのは目の端に映っていたので知っていたが、名乗りもせずいきなり言う事がこれとは。ちょうど『符』を剥がそうとした時に話しかけてきたので、まだティアの魔力^{血の力}には気づいて居なかった様だ。剥がしてから姿勢を正し、答える。たとえ、格下相手だろうと壱朗の眷族として守るべき作法は守る。礼儀まで守ってやるつもりは無いようだが。

「我が主たる真祖様の意向です。貴方はどちらの方ですか？ 力あ^{真祖}る者として振る舞いたいのなら、上位者への礼儀作法^{や二世のよう}ぐらいは、守りなさい」

まるで子供を叱る教育者のように振舞われ、中世の貴族の格好をした、三世の吸血鬼は頭に血を昇らせたが、ティアがそれを許す筈もなく、さらに畳み掛ける。

「壹与^{いよ}殿は日巫女様の眷族たる『赤^{赤の}三角魔血晶^{三角魔血晶}』です。その彼女に無茶を言ったと聞いておりますが、『魔血晶』すら持ちえぬ貴方程度の何を持って我々の手を煩わせるのです？ 格下は格下らしく言う事を聞いていればいいのです」

三世の男は、突き付けられる上位者のからの宣告に身動きが出来なくなつた。

「言葉も返せないとは。一体、どのような教育を二世から受けているのですか？ 三世の教育も出来ない二世が居るといふ事ですか。同じ二世として、嘆かわしい事この上ありませんね。話があるのなら、お前の親たる二世を連れて来なさい」

ティアは男に背を向け、此方に近づいて来る別の二世　恐らく『ディゴン』Digonだろうと一瞬で判断し　に、扉の場所の案内をする為に、小走りで向かう。

その場に取り残された三世は、急に大きくなつたティアの魔力に絶句し、走り去る背中の『Blue Hexagon』蒼青の六角魔血晶まで見てしまつては更に文句をいふ事も出来ず、ただ来た道に戻つて自分に相応しい扉へと入るのだった。

「そろそろ時間ですね」

ティアは腕の発条式時計を　骨董品のお気に入りだ　確認してから、壹与いよの元へと向かう。

「壹与さん。全員に中に入るように連絡を。これから五分後、『封鎖結界』を予定通りに発動します」

「もうそんな時間ですか？ 解りました」

これから杏朗による、吸血鬼社会全体に対する挑戦が始まる。ティアはその宣誓式展会場ともいえる、場所の維持を任された。

日巫女や壹与いよ達にすら、『封鎖結界』だと教えているこの建物の結界は、杏朗の八千年に及ぶ研究と知識を使用した『時空間捕縛結界』五次元だ。しかし、それを維持しているのはティアの魔力だ。

あとは、予定時刻に來なかつた者に関しては、入れるつもりは無いし、真祖が來ていない場合はこの会合後、壱朗が直々に出向くと言つていたので放置で良い。

とは言つても、冬眠中で來れない二人の真祖を除けば、來ていないのは二人だけだ。

そして、刻一刻と時を刻む骨董品の発条式時計アンティーク ぜんまい 吸血鬼は魔力で水晶の振動に影響を与えてしまう為、水晶振動子時計クォーツは使えないを見つめながら、『時』と『壱朗の言葉』を待つ。

ティア、時間だ。始めよう。

血族間通話

壱朗の聲がティアの頭に響く。それを聞いたティアは、その大扉の内側に入つた後、『時空間捕縛結界』発動の為の最後の一枚の『符』を扉に貼る。

他の全ての扉では、すで日巫女の眷属が同じ様に貼つてくれている。

結界に穴が無いが確認した後、ティアは壇上付近へと向かう。

会議場はすり鉢状の形をしており、北側のスクリーンを中心に周囲270度の観客席がある。壇上には普段は置いてある演説台はなく、その中央には四人掛けのテーブルセットが一揃いとその左右に五個ずつ、計十個のサイドテーブル付きの豪華なソファがあり、既に十人の吸血鬼が着席していた。

中央には三人が、左側は五人埋まつており、右側には二人しか座つていない。しかし、中央にいる日巫女ひみこはこれで全員と判断すると席を立ち客席に向かって話し始めた。

中央にいる真祖を取り囲むように、一階部分の客席にまばらに座る二世達 およそ五十人程 は一様に起立し、日巫女に向かい頭を下げる

「諸兄らの参集、誠に嬉しく想います。此度の参集は異例のモノで
すさかいに、すぐに終わらせますよって、御静聴お願い申し上げます」

京言葉のイントネーションや雰囲気、日本人以外の吸血鬼に理解できるはずもないが、真祖たる日巫女が丁寧な挨拶をしているというのは、会議場にいる全ての者に伝わっただろう。日巫女は『言の葉は伝わりやしあせんでしょねえ』などと考えていたが、実は日巫女の熱狂的信望者はかなり多く、この場にいる七割近い者が日本語を習得している。だが、観客席の吸血鬼達はお互いにそれを隠しており、完璧には理解できずとも、ある程度は理解していた。そして、二千年の歳月で整えられた、日巫女 of 美貌と肌の艶 肌が露出しているのは、その大きな胸元と鎖骨迄だったが、そして、体つき。それに花魁の様に綺麗に結い上げられた、美しい黒髪を見て、感動に打ち震えていたのは本人達にしか分からない、事実であつた。

そんな彼らの心の内はさておき、これ以降、この場にいる真祖以外の吸血鬼は単なる傍観者か、声を出す事も許されない観客にすぎない。

「それでは、日巫女殿が我らを呼んだ理由を教えてください」
中央に座ることの許された『酋長』と呼ばれるアメリカ先住民族の古き装束を身に纏った千二百歳の真祖が問う。

「いくら最高の『血の熟成』^{年齢}を誇る日巫女殿とは言え、いささか性急な呼び出しではあつたのお」

同じく中央に座る『春の女王』^{クロウディア}も、早く理由を知りたかったのであろう。彼女は日巫女とたった貳百年しか変わらない、千八百歳だった。彼女は日巫女と同じく着物姿でありながら、日巫女とは正反對だった。

優雅ではあるが、胸元の開き具合から妖艶さを強調した、花魁そ

のものな日巫女に対し、『春の女王』^{クロウディア}は桜模様の着物をきつちりと着こなし、風情のある涼やかな乙女、という印象だった。

血技が日巫女のモノよりも戦闘向きである分、戦闘能力は『春の女王』^{ディア}の方が上で、日巫女に強く出る事の出来る真祖の内の一人だった。

「そうですね、ほなきちゃんと紹介させてもらいましょか。我ら^{ウチ}が日本にお生まれにならした新しき真祖どす。二千年を迎えた翌日に真祖にならしたばかりやよつて。まだ生れて四ヶ月という所どすなあ。

では、彼方様^{キナタ}こちらに……………」

その瞬間、特に日巫女をよく知る、真祖達は皆一様に驚きのあまり、腰を上げそうになった。日巫女が敬称で呼ぶ相手が居ると言う事に。

そして、スクリーンの手前に『門』^{ゲート}が出現したかと思うと、日本人らしい黒髪黒眼で、真つ黒の礼儀服に身を包んだ壱朗が姿を現す。その姿を見た真祖達は、日巫女が何をしようとしているのか、意味が全くわからなかった。たった一人、ラマルティーヌ卿を除いては。

「さあ、このお方が我ら^{ウチ}が日本の真祖、彼方様^{キナタ}どす。よしなに。では……………」

「日巫女どの、待たれよ。理由を先に申せ、妾を呼び付けた理由が、ただの真祖の紹介というのではあるまいな？」

言葉どおりの意味ではない。壱朗を中央のテーブルに座らせようとする日巫女に『春の女王』^{クロウディア}が説明を求めているのである。そこに壱朗が口を挟む。

「だから言つただろうが、日巫女。こんな茶番よりも、とつと本題に入るべきだつてな」

「へえ、せやかて。彼方様、真祖の挨拶でゆうんは、いつもこうしてやってはつたんどすえ？」

「そうなのか？」

「そこなラマルティー又はんが抱え込まはった、14番目の娘はんも百歳超えはったら、ブルケラはんの後見してもらって、お披露目する予定やつたんやさかい……」

そこに『春の女王』^{クロウディア}が割って入る。

「待たんかぬしら！ 何を妾抜きで話をしておるか！ 大体なんじや、たかが生りたて真祖の分際で日巫女を呼び捨てか。日巫女も落ちたもんじゃのう。ついでにブルケラと姓を呼ぶな！」

「春はん、そないに目くじら立てんでもええんちゃいますのん？ 春はんとは違^{ちが}うて『酋長』はんは解^ときはったみたいやけどなあ？」

壱郎が『酋長』の方に振り向くと、『酋長』は椅子から下り床に跪いて壱郎の手を取ろうとしている所だった。それを見て、苛立たしげに爪をかじるスーツ姿の白人系男性。その姿を横目に、ラマルティー又卿が声を出す。

「日巫女様も彼方様も戯^{あそ}れはおやめ下さい。『酋長』殿も分かっっておられるのならば、御遊びを辞めて頂けるように、仰ってくださいませんか？」

普段のラマルティー又卿とは違う、場をわきまえた態度と発言。そして『彼方様』という言い方に、隣で爪を噛んでいたウィルソン卿は業を煮やし口を挟む。

「ラマルティー又卿、貴様まで何だというのだ。『酋長』殿。貴方も我がアメリカ合衆国の誇る真祖ならば、その様な生りたてに跪くなど、お止めになつてはいかがか？」

「黙れ、戦好きのガキが。この御方の事^{魔力}が分からん程度の者は、例え真祖といえど会話に入る資格などないのじゃ。黙って金の勘定でもやっておれ」

アメリカの抱える真祖同士の不仲は有名だったが、これでは話が進まない、ラマルティー又卿は壱郎に声をかける。

「彼方様、『結界』をお解き下さい。話が前に進みませんので」

訝しげな目で壱郎を見る『春の女王』^{クロウディア}と、その他の真祖の視線に

晒された壱朗に、日巫女は視線と仕草で『御随意に』と促す。それを受け、日巫女の悪戯に付き合うのは止め、壱朗は結界を解く。

背中を逆撫でされた後、首を掴まれ深海の底へと引きずり込まれる感覚。

実際には深海に潜った事のある吸血鬼等あまりいないので、感覚的なものでしかないが

全ての吸血鬼が同じ感想を抱いた。

格が、いや住んでいる世界が違う、と

その場で行動できたのは、やはり『血の力血の熟成』のお陰か、日巫女唯一人だった。三千年を共に生きたティアですら、全ての『結界』を解除した壱朗を、目の当たりにするのは初めてだった。

「もう一回。ちゃんと、紹介させてもらいましょか。」

ウチ我らが日本にお生まれにならした新しき真祖の彼方様どす。二千百年を迎えた翌日に真祖にならしたばかりやよつて。まだ生れて四ヶ月という所どすなあ。

あ、後。ウチの旦那はんやさかいに、誰も手え出したらあきまへんえ？」

日巫女はその血技である『予知』と、飄々としてはいるがあまり話さず、話す時には重要な事ばかりを言う普段の行動から、吸血鬼の中でもその言葉には信用がある方だった。しかし、この時ばかりは誰も日巫女の言葉を信用しなかった。

生りたての真祖がこんな存在魔力感を放つ筈が無い、と

日巫女の最後の言葉に納得のいかない壱朗の唯一の眷族は、『約束』がある為、今日までは京都日巫女が住んでいるにある神社に滞在しなければいけないが、明日以降の寝床の場所は『京都からは離す』と心に決めたのだった。

第09話 会合（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第09話 会合

ティアの後ろで成り行きを見守っている日巫女の眷族の二世達は、ティアの滑らかで男なら誰でも触りたくなるような綺麗な背中を、色んな意味で見続けていた。

普段は日巫女から遠ざけられている程、欲望に忠実な部類の彼らも、今回ばかりは目の前の背中に欲情を抱いたりしなかった。

何故なら、壇上で『本気の壱朗』が放つ魔力に圧倒されていたし、何よりティアの背中に、『Blue Hexagon』の魔方阵が、浮かび上がっていたからである。

ほんの先程まで、一緒に案内をしていたティアを初めて見た時の彼らは、その外見と放つ魔力の美しさに見惚れ、内心欲情していた。

だが、ティアを怒らせる愚か者が次々現れ、『Blue Hexagon』の魔方阵が肌に浮かび上がる度に、叩きのめされ、正座させられている人数が増えていくのを横目で見てからは、『この背中』は自爆スイッチだ。触れたら死ぬ』と認識していた。

文句を言いつつ、馴れ馴れしくもティアの肌に触れようとした愚か者と同様に、ティアの『御主人様以外の方に触れる事を許す程、安い肌ではありません』という言葉と共に、地面に肩まで埋められる末路をたどるのはご免だった。

そんなティアが、何故か今も『Blue Hexagon』の魔方阵を肌に浮かび上がらせ、真祖達の方をじっと見つめている。

二世だが日巫女と暮らしていない彼らは、あまりの恐ろしさに吸血鬼の誇りも忘れ、早くこの場から解放されたいと心の中でずっと祈っていた。もちろん、吸血鬼は神になど祈らないので、祈る相手

は自分の主だ。彼らが普段の日巫女を知っていれば、間違っても彼女に祈ったりはしなかったが。

「おい、日巫女。旦那さんってのはなんだ。俺の可愛い眷族が怒るから、下らない冗談はやめろ」

「あきまへんかあ？　なら、お妾でもよろしおすえ？」

一階席の一部では、壹朗の発言と共に魔力が減少し、日巫女の発言の後、倍以上に膨れ上がる。

日巫女が壹朗の眷族をからかっているのは、日巫女の眷族には一目瞭然だった。

そして、最も壹朗の圧力に晒されている壇上では『血の熟成』の強い順に、行動できるようになっていき、言葉を発し始める。

「して、日巫女殿。本当の所、そちらの御方は何年もの間、どちらで眠っておられた御方なのじゃ？　妾もきちんと挨拶すべきだと思うのじゃが」

先程までとは打って変わり、額に汗を流し無礼にならぬように話しかけようとする『春の女王』は、日巫女の目には面白い玩具に見えるのか、意地の悪い笑顔で答える。

「春はん、そないな事言わはっても、ウチは嘘なんか吐いてやしまへんえ？　それにいまさら丁寧に口調を戻さはっても、手遅れやと思いますすえ？　春はん、先刻はええと……『たかがなりたてのヘタレでやすけない真祖の分際』とか言わはったやおまへんか。いくら旦那はんが、気の優しい御方やいうても、限度ちゅうもんがありますえ？」

「それぐらいにしてやれよ……」

いくら何でも可哀想だと思った壹朗は、助け舟を出すが……

「あら、旦那はんはウチよりも春はんの方が好みですのん？　ウチのべべと違って春はんのは安もんですえ？　わからんように底上げたはるけど、旦那はんが満足できる程の大きさやおまへんし、それに髪もウチを真似て染めたはりますけど、ホンマは赤毛なんどすえ」

日巫女は肩や、その深い胸元が大きく開いた着物を見せつける様

に、壱朗に擦り寄りつつ、凹凸には^{貧相だ}乏しいが桜の模様が美しい着物を、きつちりと着こなし、染めているとは思えない黒髪を持つ『^{クロウディア・ブルケラ}春の女王』を流し目で見て、挑発する。

「……っ！ 貧相と言っな……っ！ しかも捏造するな！ 『ヘタレ』と『やすけない』は言ってない！ とういか『やすけない』って何だ！」

誰も貧相とは言っていないにも関わらず、気にしているのか自爆している。

「はいはい、お嬢ちゃんも挑発に乗るな。『やすけない』は品がないって意味だ。それと日巫女、俺は外見にも着てるもんにも興味はない。傍に置く着族は理屈では選んでないからな。お前も傍に置くつもりはないぞ？」

「旦那はんのしぶちん！ ティアちゃんがけなるいわあ……」

これ以上の脱線は困るので、日巫女を椅子に椅子に座せる。そして、泣き崩れたフリをする日巫女を無視し、壱朗は『^{クロウディア}春の女王』に話しかける。

「お嬢ちゃん。俺は此処には挨拶に來ただけだ。それに自分の四分の一も生きてない小娘が、何をゴチャゴチャ言っつていようが全く気にしてない。だからお嬢ちゃんも気にするな、安心してろ」

「……っ……」

『^{クロウディア}春の女王』にとつて、それはそれで問題だった。

日巫女に次ぎ千八百年を生きる真祖である妾が、小娘扱いされている。しかも今、この真祖は四分の一と言った。つまり妾の4倍七千二百年を生きているという事になる。確かにこの圧力はそれぐらいはありそうだが、それは一体何だ？

本当に吸血鬼と言う存在か？

などと『^{クロウディア}春の女王』が考えている間に、『酋長』が話に加わり始めていた。

「大いなる力をお持ちの真祖様。お久しぶりでございますのう。あの時はお名前をお伺い出来ませんでした。此度はお名前を知るお

許しを頂けるので？」

「やっぱ、爺さんには解つちまうか。名乗るかどうかはまた後でな。近々酒でも飲もう。爺さんと一緒に、かなりきついヤツでなら酔えるかもしれない。狼達のその後の事も、聞かせてもらいたいしな」

「うう、泣き崩れるウチを袖そでにして、爺おじいと話に華咲かすやなんて……旦那はんのいけず。ウチが行かず後家になったのは、旦那はんのせいやのに……」

「酷い言いがかりだな。俺ティアの眷族が、お前の眷族を圧迫死させかねないから、そういう冗談はやめとけ」

普段なら、真祖の中で最も我が儘な『春の女王』クロウディアが真面目な顔で話を進めようとした。

「彼方様。『挨拶』というのはどの様な？　むしろ来いと言わしめる事すら可能かと思われませんが？」

「ふむ、思ったより頭が良いな。流石に真祖なだけあるか。言葉使いは、気にせんでいいぞ。とっとと用事を済ませて、爺さんと眷族ティアで酒盛りするかな」

そう言いきると耆朗は、縋りつこうとする日巫女をやんわりと椅子に戻し、他の真祖達を視線で撫でる様に一瞥すると犬歯が見える程、口を歪ませて笑った。

「改めて自己紹介だ。俺は『彼方』。名は俺に従う者にしか許す気はない。生れたのは日巫女の言った通り、西暦2100年1月2日深夜。3日になってたかもしれない。が、どうでもいいか。おかしいと言われる前にさっさと誤解を解いておこうか。」

俺の『血族技能』アビリティは『時間跳躍』だ」

その言葉に、既に身動きができる様になってはいたが、事態を静観していた真祖達が腰を上げる。しかし、耆朗は真祖達を再度一瞥する事で、座らせ話を続ける。

「詳しい事まで話すつもりはないが、俺は時間を何度か跳び、通算

で八千年近く生きている。これが証拠だ」

壱朗は儀礼服の上着を日巫女に投げ、受け取った上着に顔を埋めて悶えている日巫女と危険な眼差しのティアを務めて無視し振り向いて、白いシャツの背中部分が空いている為に、むき出しの背中を見せる。

そこには合計十六個の『魔血晶』と、上下二つの八角魔法陣が重なる様に描かれていた

二世の誰かぽつりとつぶやく。

「『漆黒の八角魔血晶Black Octagon』……」

「それも二重にあるぞ……」

そこに更に壱朗は話を続ける。

「俺に従え、とは言わん。だが覚えておけ。俺は今日より、むやみに人間の命を奪う吸血鬼を許さない。そして、生れたての真祖を幽閉し、魔力を強化する為の餌とした者は必ず滅ぼす。生れた真祖が心から、それを望めば止めはしないがな。本当に望めば、な」

「旦那はんは甘いどすなあ」

艶かしい視線と仕草で、そう評価する日巫女に全く動じない壱朗。「悪いか？」

「いいええ。ウチ、本気で惚れそうやわ」

「それはいらん」

「いけずう……」

「……冗談はさておき、俺の『血技』に疑問を持っている輩もいるだろう。そんな現実を見れないアホどもの為に、用意した趣向がある……ティア！」

ティアは前もって言われていた通り、画面以外には『結界符』が山ほど張られたテレビを持ってくる。

「さて見えるか？ まあ、見えないヤツはいないだろうが。この画

面に映っているのが今現在のこの会議場以外の場所の映像だ」

画面の中にはこの会議場の外の様子が映っており、時間に合
わなかった吸血鬼等がせわしく歩き回っている。

「こいつらに落ち着きが無い訳じゃないぞ。目と頭の良い奴は気付
いただろうが、今、『この会議場は未来に向かって跳んでいる』中
の俺達を含めてな。そして、もうすぐ到着する。この中にお前等全
員が入ってから『3日後の未来』へな」

そこで比較的若い吸血鬼達、特に1900年台後半以降に生れて
いる者達は気付いた。この会議場が未来に飛ばされているという事
は、外と中とで時間の流れる速さが違う。この中に入ってまだ一時
間も経っていない。一時間が3日になる。およそ72倍の速度で外
の時間が流れる事になると。

「さて、『^{五次元}時空間捕縛結界』で俺達の存在を守っているが、この会
議場自体は守っていない。3日後に飛ばされた会議場は、3日後の
未来で2つ存在するのか？ できるのか？ その結果もお見せでき
るだろう。お前達には傷一つ付かん事は保証しておいてやる。安心
しろ。後15分だ。到着までな」

そう言う中央のテーブルにテレビを置き、正面のスクリーンに
『^{ゲート}門』用の符を張り、ティアを連れ『^{ゲート}門』へ向かう。

「俺に従う者は自分の意思で挨拶に來い。來ない者は中立だろうが、
何だろうが全部敵だ。中立を保ちたいならそれを言いに來い。心配
するな、期限は決めん。挨拶に來れば、その瞬間からは保護対象だ。
來るまでは何が起ころうが助けないし、敵対すれば殺す。この会議
場がその結末を教えてくれるだろうよ」

「旦那はん、ウチを置いていく気いどすか？」

符術で会議場の外へと出ようとしている壱朗に、それに気付いて
いた日巫女がしな垂れかかる。

「いいのか？ 眷族が困った顔をしてるぞ？」

「ええのええの。たまには眷族から離れて、ゆっくりしたいし」

壹^{いよ}与を筆頭に日巫女の眷族は、『逃げられたら、数十年は見つけ

られない！」などと頭を抱えていたが、壇上に跳び込む訳にもいかないで、ただ困り果てていた。そんな事はお構いなしに、真祖達は自由に動く。

「さて、行くが……」

あ、おい、アンドレ。ミーシャはどうしたいと言った。ちゃんとしたんだろうな？」

「も、もちろんです。彼方様と共に行きたいそうです。はい！」

ミーシャとは、まだ生れて八十年ほどの14番目の真祖だった。ラマルティーヌ卿が自身の眷族に見つけさせ、その血を楽しむ為に飼殺しにしていたのだが、一ヶ月程前に壱朗達に城に殴り込まれ、ミーシャの好きにさせる様に約束させられた。

おかげでラマルティーヌ卿が、やつとの思いでルーヴル美術館の本物とすり替えた絵画の数点がティアに燃やされ、ラマルティーヌ卿は大事なコレクションを守る為に、壱朗には逆らわない事を決めていた。

そして壱朗がミーシャと呼ばれた真祖に目を向けると、ミーシャは『ビクッ』と一度肩を震わせた。ミーシャにしてみれば何故壱朗が、自分に優しくしてくれるのか解らなかった。

だから、会合の後は好きなようにさせてやると言われた時も、どうせ嘘で、会合が終わればまた元通りの生活だと思っていた。壱朗が本気を出すまでは。

そして今。話が本当だと分かり、ミーシャはおずおずと口を開いた。

「もう、おじさん達に噛まれたり、しない？」

「ああ。誰にもません。だからお前も人間を噛むなよ？」

吸血を経験済みのミーシャは、少しその味を思い出したが諦める。「がんばる。だから、一緒に連れてってくれる？」

「よし。じゃあこい」

「うん！」

ミーシャは八歳で吸血鬼になった、その瞬間から無意識に『不老』を発動し、それ以降は全く変わっていないかった。そしてミーシャはその外見通り、子供らしい笑顔で壱朗に駆け寄ると壱朗の首に飛びつき、甘え出す。

「吸いたくなったら、俺のを吸えよ？ 何もかも我慢しなきゃいけない訳じゃ無いからな。したい事は言っていいいんだぞ？」

「うん……じゃあ、我が儘言っても怒らない？」

「内容によるな。何でも言っていいいわけじゃないぞ？」

「じゃあ……パパって呼んでいい？」

その瞬間、日巫女とティアは凍りつき、壱朗よりも圧力があるのではないかと思う様な暗いオーラを背負いミーシャへと目を向ける。「怖いお姉さん達が睨んでいるから、それは止めた方が良くないんじゃないかな？」

壱朗も内心では鬼婆だと思ったが、空気を読んで言わなかった。

すると悲しそうにティアと日巫女を見て、

「駄目？ お姉さんなの？ 日巫女ママとティアママって呼んじゃダメ？」

雷が走った様に体を震わせた二人は、壱朗に抱えられ首に抱きついていてるミーシャを奪い、我先にとミーシャを抱きしめ許可を出す。「ええ、ミーシャちゃん。かましまへんえ。旦那はんはパパ。ウチはママ。それでよろしおすえ。そこにいる眷族の事は鬼ババアでかましまへんえ？」

「ちよつと、日巫女様。そんなに力を入れたらミーシャちゃん死んじゃいます。どうせ、子育ても子守もした事ない様な、行かず後家なんでしょうから、無茶は止めて下さい。」

……オホン。ミーシャちゃん。長年、彼方様と連れ添った私が、ママとしてパパの事も色々と教えてあげますからね。その行かず後家は『オバサン』とでも呼んであげてね。」

壱朗は女達のそんなやり取りを無視し、
主に自分の精神衛生

上の為に　それを見守る『酋長』に声をかける。

「爺さん、後で会いに来てくれるか。アンタのトコの白豚合衆国　ウイルソンに興味はないがアンタとはやり合いたくないからな」

「分かり申した。儂は此処に残ってお力の一端を拝見させて頂いた後、改めて真祖でも酔える酒を持って、お伺いするとしますかの」

「彼方殿！　妾は、その……」

「クロウディア、だったか？　今は自分の血族の事に集中しろ。気になる事があるんなら聞きに來い。一年は日本を出るつもりが無いからな」

そう言葉をかけたあと『門』ゲートの方へ向き直ると、右手を日巫女と左手をティアを繋いだミーシャが明るく笑っており、なんとなく満たされた気分になった壱朗は、笑顔で三人と共に『門』ゲートをくぐった。

『BlackTwiceOctagon』漆黒の　重積　八角魔血晶それが『春の女王』と『酋長』が名付けた、壱朗の本気の『血の熟成』の呼び名だった。

壱朗達が立ち去ってから、その力の結果に日巫女の眷属以外は動けずにいた。日巫女の眷属はさつさとこの場を離れ、日巫女の搜索元会議場に向かっている。他の吸血鬼達は瓦礫の山の中で、真祖達が動くのを待っていた。その中でも最初に動いたのは、灰色のイタリア製のスーツに身を包んだ、ウイルソン卿だった。

「この力、素晴らしい！　研究し、解明すれば不可能はなくなる！　どうです、皆さん。真祖全員で協力し、あの彼方という真祖を捕

えるのです。そうすれば我々にもさらなる力が手に入りますよ！」

ウィルソン卿は両手を広げ熱のこもった台詞を吐くが、賛同の眼差しを向けた真祖は一人もいなかった。しかし、真祖は賛同していなかったが、二世、三世やそれ以下の者達の中にはその考えに賛同する者達が、かなり居そうだった。

「阿呆か貴様。今のこの惨状を見る。手を出せば、我らすら死に絶えるわ。よく見てみる。残っているのは守られておった我々と、床などだけじゃ。外壁、外装、屋根。何処に行ったと思う？ 同じように消滅したいのか？」

『春の女王』は残された事の不満をウィルソンにぶつけるかの様に睨んでいる。

「ウィルソン、お前が僕を騙して研究した『重力』の研究、その研究過程で生み出した副産物の様な紛い物をもっと増やす気かの？」

『酋長』の言葉は騙された恨みは忘れていないと、射殺す様な視線と共に放たれている。

『春の女王』と『酋長』に駄目出しされ、その怒りの圧力にも何とも言えないウィルソン卿ではあったが、戦闘向きではない日巫女と今はまだ幼いミーシャを人質にすれば、どうにかならないものかと頭の中で計画を考え始めていた。

そして、『春の女王』と『酋長』の二人は自分達が、良識ある行動を取る者として壱朗に期待され、此処に残された事に気付く。他の真祖達は、壱朗の見せた力への対抗策も無いまま、己の立ち位置を決めてしまうのは不味いと感じていた。

それ故に、『春の女王』と『酋長』の二人より先に動き、壱朗に伝わる事を避ける為、ただ黙って座っていた。

「どちらにしろ、『春の女王』様と『酋長』様はあちらにつくのでしょうか？ ボクは自分の目で彼を見定めてからにするよ。格上に対しては失礼かもしれないけれど、このスタンスだけは崩せないね」
動かない面々に見切りを付け、消滅のせいで埃まみれになったソ

ファから、優雅に立ちあがった金髪碧眼の男は、その場に残る全ての者の目の前から、何の予兆も痕跡もなく消え去った。

「私は挨拶を済ませてから、帰らせてもらいますよ。これ以上コレクションを燃やされては敵わない。彼方様云々の話はともかく、あのティアという眷族には、城に近寄って貰いたくないのでね」

コレクションの為に中立しか選択肢の無いラマルティーヌ卿は、そう言いながら自分の眷族に指示を出し、撤収を始めた。

その横ですつと何かを考えていた、チャイナドレスに身を包んだ真祖の一人が、この場で最も力のある二人に対し、提案を持ちかける為に話し始める。

「『^{クロウティア}春の女王』様と『酋長』様は黒髪魔神というお話を聞いた事がありますか？」

その提案が、誰の為に、何の為にされたのかは、今の段階ではまだ誰にも解らないのだった……………

第10話 生りたて真祖冒険記 其の壱（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

この話は御遊びです。読まなくても問題ありません。
ただ単に、筆者の好きな過去の人物との絡みを入れようとしただけ
です。

説明が長いのでめんどくさい方は無視して下さい。

第10話 生りたて真祖冒険記 其の壱

とある神社の付近の森。

そこに、その付近の景色の美しさには似合わない声が響き渡っていた。

「ティア〜。くっそ〜!!」

壱朗は、最後のティアの言葉が原因で、その付近に響き渡る声でティアの名を連呼し、呪いの言葉を吐いていた。

「覚えてるよ〜次に会った時には、百倍返しにしてやる……」

壱朗が今居る場所は、周辺が何故か森だった為、周りを気にする事もなく、地面にのたうちまわり悶えたいた。現段階では、『能力』は『怪力』以外全く発現していない為、そこに近づく二人の人物に、全く気付いていなかった。

そして少し落ち着くと、誰が結んだのかは解らないが、大木に結んであった薄汚れた白い帯を見つけ、今度はその帯に八つ当たりを始める。

「くっそお、あんな不意打ちを食らうとは……油断してた……これは黒歴史に成るやもしれん……」

などと、ちよつと古臭い言葉使いで自問してるあたり、既に傍から見ればかなり怪しい男に見えるのだが、『御主人様』などと呼ばれる事に比べれば大したことはない。

少なくとも、壱朗はそう思っていた。

そして、八つ当たりで白い帯を引っ張り、振り回し、木に叩きつけている内に帯が切れてしまうと『怪力』を発現している以上は当たり前の結果なのだが、そこで自分のしている事に初めて気

付く。

「し、しまった。コレ、どうしょ……代わりなんか用意できるはずなのに……」

「もし、その君……」

壱朗は焦った。誰も居ないからと思い、やっていたはずなのに誰かに見られていたとは。冷静に考えると『時間跳躍』で過去に跳んだはず。今が一体、何時^{いつ}なのかも分からないのに自分は何をやっていたのか、と壱朗は自問自答し始める。

そこでかけられた声を無視しているあたり、まだ冷静ではなかったのだろうという事はよく分かる。しかし、声をかけた方にはそんな事が分かる筈もなく、再度声をかけてきた。

「もし、君。先程から熱心な掛け声で、修練をしているようだが型が悪いのではないか？」

「そうだな鈴木君。帯を見るに、まだ学び始めてそにやあに経つとらんちゅう事は察するが、いかんせん腕力に頼りすぎちよる。その細腕で、そこまでの力を出せるちゅう事は、才能はあるかもしれんがの」

その二人の発言で我に返った壱朗は、とにかくこの場は無難に過ぎ、現状把握と生活基盤の確保だな、と思い至る。目の前の人には修練だという事で、千切れた帯の事は許してもらえらるだろう。

「あ、その、見よう見まねだったので……」

「へえ、見様見真似でその結果か、君の真似ているのはどこぞの古武術かい？」

「いや、鈴木君。武術自体が初めてなんじゃなかか？」

「は、はい。そちらの人の言う通り、武術をやった事はないです」

「^{おもしろ}にしゃあ、武術の心得なしで帯をちぎりおるか……ふむ……」

目の前にいる、小柄な男は和装の出で立ちで、もう一人の青年は同じく和装なのに何故か下には襟のないYシャツの様なものを着て

いた。二人は吉朗の着ている服を珍しそうに見ている。と吉朗は思っていたが、実は見ていたのは服ではなく体つきだったのだが

鈴木と呼ばれた青年の服装の方が珍しいんじゃないか、など思っていた。

「四郎殿？ また悪い癖が出ておりますな？」

「にしゃの先程迄の掛け声から察するに、何者かなにもんに負けたんじゃないやろう？」

「え、と。あの、そういう訳では」

「隠さんでもよか。鈴木君と先程の掛け声が気になってのお。力のこもった掛け声にじやったけえ、覗いてみたんじゃない。何度も負けておるのかの？」

「……と言っていた負け歴史ちゆうとったじやろうもん？」

鈴木と呼ばれた青年の言う事から察するに、四郎という名前の初老とまではいかないが、四十は超えているであろう男性と二人で、先程までの吉朗の一人芝居モドキを見ていた様だ。それに気付いた吉朗は、頭を抱え悶えそうになるのを、必死に堪える。

「余程、負けたのを気に病んでおるんじゃないのお」

「会津でよく聞く掛け声から、会津あたりの方かと思いましたが、服や言葉遣いは東京の育ちでしょうか？ 服も外国の物で揃えてある様ですし」

「文明開化と共に日本を離れた商家のもんかもしれんのう。それならば武術に覚えがなくとも仕方なかる」

「ああ……日本に戻ってみれば、講堂館の柔道の波にのまれてしまい、荒れている柔術家に暴力で負けた。と言ったところでしょうかそれで『ていやーていやー』と叫びながら修練に打ち込んでいたのでしょうか」

目の前で次々と勝手に話が進んでいる上に、『ていやー』ではなく『ティア』だと思ったが、説明しろと言われても困る。だから、

黙ってそれを受け入れていた壱朗だったが、とりあえず聞くべき事を聞く事にする。

「あの、申し訳ないのですが、今は何年でしょうか」

「ん？ 年号も知らないのか？ 今は大正二年になったばかりだよ」

「いや、鈴木君。年の瀬からやっておったのではないかの？ 年が明けた事に気付いておらんのじゃろう」

「なるほど。そういう事ですか。しかし、四郎殿のようですね。時間を忘れ修練にかまけるなど」

「鈴木君も言う様になったのお」

「ところで君、失礼だが名前は？」

壱朗はここで初めて、回答に真剣に悩んだ。万が一だが名前を何らかの記録に残されても困る……と。そしてあまり待たせるのもおかしいと、咄嗟に答える。

「『田中一郎』です」

「ふむ。ありふれた名前じゃの。特に聞いた事はなかが……」

「そうですね。この辺りでは農家の方はほぼ同じです。根掘り葉掘りすまないが、漢字はどのような？」

「すまないと思うなら聞かないでほしい。壱朗はそう思ったが、傍から見れば自分が不審者なのだったと気付き、聞かれた事に答える。

「田んぼの田に、上中下の中、横一本の一に桃太郎の郎です」

もちろん出鱈目を。心の中で天国の曾祖父に「この『嘘』は必要悪なんだよ、かんべんな」などと言いつつ訳しながら。しかし、この時代に壱朗の曾祖父は、産まれてすらいないだろうが、それに気付く事は無かった。

「そうか、漢字もありふれているね。あ、すまない。僕は鈴木義雄という。鈴木天眼という名前に聞き覚えは？ 父なんだがね。四郎殿ほど有名ではないがね」

「そんな事なかるうもん。鈴木先生にやあ、世話になっちゅう者も多かるうて。」

わしゃあ、西郷四郎ちゅうもんじゃ」

「西郷四郎……どこかで聞いた様な……」

「そりゃあ、君。知らない方がおかしいさ。聞いた事ないかい？」

『寄るな触るな西郷四郎、触ると恐いぞ西郷四郎』

「ってね。子供達でも知ってるよ。『山嵐の西郷四郎』の名はね」

「ああ！なる程。それで……」

「それも昔の事よ。わしも無敗ちゅうわけやないしの」

耆朗は、先程の自分を褒めてやりたかった。全く気付かなかったとはいえ、歴史上で、ある程度の記録に残っている人物の傍に、本名でいられる訳がない。まかり間違えて、何らかの記録に残ってしまったらどうするのか。

曾爺さんが『彼方』という名字を付ける時に、そういう人物が過去に居た事を調べ上げ、止めてしまったら、それだけで歴史が変わってしまう。それで自分の名前が変われば、どんな変化があるかも分からないのだ。

とにかく無難にこの人たちとは別れよう。そう思ったのだが。

「のう若いの。にしゃあ古流をやる気はななか？」

西郷四郎殿がそんな事を仰って、ぶち壊しにして下さいました。

「どうしてでしょうか。自分は大した才能も……」

「そんな事はなか。にしゃあ、その力がある。嘉納先生の元で『柔よく剛を制す』と道を極めてみようとしたものの。古流の技、異人の恵まれた体格の前には『道』だけでは勝てん事も多かった。確かに『柔道』は素晴らしいもんじゃが、しかしそれが最強、最高という訳ではなか」

耆朗は困った。そして隣を見ると、鈴木青年も困っているように見える。何が起こっているのか。何でこんな話になっているのか、理解できなかった。

「不躰にすまんの、しかし、その力を見てしまうと心が抑えきれん

での。にしゃあ武術はしとらんと言つとつたが、しとつたら間違はなく、わしは試合を申し込んでおつた。それ程までの『剛』じやのわしの『柔』でどこまで制する事ができるか試したかつたわ」

「そんな事は……」

恐らく能力の『怪力』の力を見抜いているのだろう。いくら薄汚れているからと言って、流石に帯をちぎるのは不味かつたようだ。全く折れてくれる気配が無さそうな西郷四郎に壱朗は困り果てる。「隠すな。でないといわしが間抜けになる。いくつかの流派の師範と共に考えた事がある。『柔よく剛を制す』のではなく『柔剛一体』となればどうなるのかと。年を重ね、技を磨いたからこそ解る。今のわしの技が二十の頃に使えたら、とな」

「……素晴らしい技となる、でしょうね。四郎殿であればなおさら」

鈴木青年にも言っている事は解るのだろう。本当に素晴らしいと思っている表情をしている。壱朗にも分かった。柔道だろうが空手だろうが、同じ技なら体重の重い方が勝つ事がある。もちろん小柄な方が仕掛けやすい技もあり、一長一短なのだろうが。

だが、西郷四郎殿の言っているのはそういう事だけではない。恐らく体格に優れた者、陸上選手には黒人の選手が多い様に『怪力』を使える壱朗の体で、郷四郎並みの技を行えばどうなるのか。そういう事を言っているのだろう。

「しかし、私は此処に流れ着いたばかりです。身元も解らない者を徒つてくれる流派もないでしょう」

「一郎君と言つたの。やる気があるんなら、ある程度はわしが、後は古流をいくつか紹介しちやる。君は幾つじゃ？」

「四郎殿、本気ですか？ 長崎まで連れて行く気ですか？」

此処でも困つた。壱朗は吸血鬼の真祖になった。今はもう、日が昇っているので日光は大丈夫なようだが、鏡に映らないとか、海を渡れないとかいう弱点をよく聞く。そして老けないとも。そのまま

の年齢を言う訳には、いかなかった。

「老けている、とよく言われますが、次で二十歳。今は十九です」

「僕と同じ年かい。確かに老け……いや、貫禄があるね。うん」

内心では『うるせえよ。28だよ。当たり前におっさんだよ』と思っただが、何も言わなかった。言えるはずもなかったが。

「よし、決まりじゃ。一郎君、これからよろしくの」

「四郎殿の我が儘には敵いませんね。一郎君。長崎までは一緒だからよろしくね」

壱朗は、今日何度目になるか分からない混乱の最中であつた。

『何で、一緒に行く事になつてんの？　しかも長崎つて。そう言えばここどこか聞いてない。跳ぶ前は大阪にいたはず。過去に跳んだだけなら此処は大阪？　いやいや、そういう事ではなくて。連れて行かれるのは決定事項なのか？』といった疑問が渦巻いていたが、目の前の二人はそんな自分の意思を無視し、『僕たちの宿に一旦行こう。そこで詳しい話も聞きたいしね』などと促され、ただ流されてついて行くのだった。

次の日、一緒にの宿に泊まらせてもらった。もちろん壱朗はお金を持っていないので奢ってもらった。後、四郎達の用事が済んでから、買い物をした。その後、堺の港まで馬車に乗って移動した。

とにかく困ったのが移動だった。『怪力』の効果で身体能力に加え、体力まで増えていなかったら、絶対にこの時代に生きていけそうになかった。日程が迫っている為、馬車に乗ったのだが、そうで

なければ徒歩の予定だったらしい。県を超えるのに、徒歩で行くというのである。

壱郎の生きてきた西暦2100年でも、車は空を 20世紀に有名だった青い狸型ロボットの漫画で描かれる未来の様には 飛んでいなかった。しかし、個人所有の車や単車があった。それが大正時代のはじまったばかりには、一般に普及していないのだ。基本はとにかく徒歩。これが何より辛かった。もちろん蒸気機関車や車もあったが、残念ながら縁はなく、四郎達の用事がある間と買物の間はずっと徒歩だった。

「つまり、一郎君は異人に負けたせいで、親から勘当された。そういう訳だね」

「明確にそう言われた訳ではありません。が、家に戻る事も、有名になる事も避けたいです。特に家に戻るのは不可能なので、知られる訳にはいきませんので」

「わしはかまわんよ。……その気持ちも理解できるしの。一郎君が技を身につけた結果を、見せてくれればそれでええんじゃ」

「四郎殿はそれでいいかもしれませんが、私は父上に説明しなければなりませんので。それと一郎君。ウチの新聞社で、雑用をして頂きますからお忘れなく」

「はあ。私は働けるのなら、それに越したことはないですが。無一文ですし……」

「とりあえず、わしの指導しておる柔道、弓道の道場に居候という事になる」

「戸籍が困りそうですが……まあ、田舎の方で隠されていたと言つて、何とかしましょう。父の『鈴木天眼』は衆議院議員にもなった事がありますので、伝手でなんとかなるでしょう」

壱郎は複雑な心境だった。記録に残りそうな所からは、離れなければいけないのではあるが、しかし生きていく当てもない。

買い物の途中で目立ちたくないからと、着ている服の出所については嘘をついて、服を全て売り払い　これが実に良い金額になった　新しく和装を整えた。

そんな訳で三名は今、長崎に向かう船の上で会話をしている。船旅は壱朗にとって窮屈な物であったが、四郎の語る『道と術』の理論に、壱朗は漫画や小説の知識からの机上の空論で相手をし、それが理解できない鈴木青年が身の上話を切り出した、という状況だ。

「しかし、にしゃの事を見くびっておったようじゃな。異国へ渡ればその様な考えの武術があるのか？」

「どうでしょう。大陸の武術はもつと奥が深いと聞いていますが」「四郎殿の御実家の方にも確か、御留流が残っていると聞いていますが、薩摩や出羽の方にもある様ですね。行ってみるのでしたら、古流の師範代あたりへの紹介状が要りますね」

「いや、そこまで学べるかどうか、分かりませんし……」

「まずは最低の基礎からじゃの。奥義に近い理想論は持っておつても、実行できる土台がなけりや、どないもなりやせんじゃろ」

壱朗が四郎と話して気付いた事は、確かに漫画や小説等で語られる武術の技は、無理があるものもあるが、実は日々の修練と、それを体現できる先駆者がいれば、決して不可能なものではない、という事だ。

これである意味、スポーツに特化してしまう過程で、失われてしまった技や概念には力がある物が多い、という事がよく分かる。小説や漫画に『奥義』やら『秘伝』などが出てくるが、実在のそういったモノは存在したが壱朗の居た未来には伝わっていない。もしくは、伝わっているのだが公開されていない。そういう事なのだろう。そして壱朗は、それを見てみたいと思ってしまうていた。

「一郎、行くのかの？」

「はい、四郎先生。三船師範の元へ向かいます」

「恐らく、次はもうないじやろ。にしゃには確かに見せてもらったぞ。『古流』にある『術』や『道』では見れなかった可能性を」

「私こそ四郎先生には、数々の技を見せて頂きました。後、この古流の噂や記録。これを辿ってみようと思います。この先に武の到達点が見れるよう、祈っていて下さい」

四郎に連れられたあの日から、十年が経っていた。四郎の指示で基礎を学んだが、吸血鬼である彼にはあまり必要がなかった。ある条件を満たせば、覚えが良すぎるのである。

条件とは、『死の危険』が伴う事であった。実際に死ぬのではない、吉朗が死ぬかも知れないと、思い知らされる状況で覚えた事は、血が忘れなかった。

「にしゃは危なっかしいが、覚えは悪くない。やり方は悪いが、道場破りのつもりで死に行けば、いつかは辿り着くじやろう」

吸血鬼だという事

「はい。私の事情を知って、それでもなお、受け入れてくれた四郎先生とだからこそ、出来た稽古でした。一生忘れません」

受け身一つとってもそうだった。四郎が殺す気で、頭から落ちかねない技を放てば、嫌でも受け身を取った。

それを『血』は覚えており、次からは同じ技は効かなくなったし、自分でも再現できた。ヘタレな怖がりの、壱朗ならではの習得法だったのかもしれない。

吸血鬼である事に慢心して、のぼせ上がって命の危険を感じなくなれば、習得に時間がかかっていたかもしれない。

そして何よりも、吸血鬼である事がばれても、受け入れてくれた四郎とでなければ出来ない事だった。それ故に壱朗は四郎に感謝していた。

「わしの事たあ忘れても構わん。だが可能性を辿り、その神髄に辿り着いたら、それだけは志高き者に伝えてくれ」

「はい。必ず、その神髄だけは後の世に残します」

その願いが、壱朗の聞いた四郎の最後の声になった。

それから壱朗は日本全国を回り、剣術、柔術、居合、弓術、唐手、山の様な武術の形を見て、一つ一つ手に入れていく事になる。

しかし、そのさなか、第一次世界大戦における徴兵でかなりの口伝、秘伝が失われている事を知り、戦争に対する嫌悪を抱いた。口伝や秘伝が失われる前へと跳んで、回収したいという欲望を抑える事に労力を割く事になった。

そして、壱朗は西暦1930年に三船師範が、隅落しを完成させた事をきっかけにしてアメリカへと渡る。それは完成を待っていた

のではなく、ただ三船師範の試合、その場に集まった高段者が古流の面影のない、スポーツの柔道を目指したものばかりだった事が理由だった。スポーツとしての強さは維持していたが、神髄を究める意思が見えなかったからである。

もちろん、日本国内でそれを目指す流派もあつたが、そのほとんどは接触済みで、海外に渡った柔術家を追いかける為にアメリカへと渡つたのである。

のちに、吉朗はこの技術をテニアに教えてしまふ。そしてその日から、テニアを苛めた後には必ずと言っていい程、お仕置きと称して逆関節を決められる日々が来るのだが、渡米する段階の吉朗はそんな未来は知る由もなかった。

第11話 思惑（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第11話 思惑

しな垂れかかって来る日巫女を脇にどけながら、壱朗はティアの煎れてくれた緑茶を飲み、煎餅をかじっていた。

「日本で能力の使い方に慣れた後は、最初にアメリカに渡った。その時から『血の熟成』の研究を始めたんだよ。その研究がおおよそ形になった後、ありったけの力を使つて、アメリカ大陸で過去に遡さかのぼった」

「……はあ」

ティアはどうにも意図が分からない、といった顔をしている。

「その後で『酋長』に出会ったんだ。出会ったのは結構経つてからだったけどな。西暦1900年あたりまであの国にいたんだが、西暦1500年くらいからだったか？」

白人が移民してきてな。その中に三百歳くらいの真祖のガキがいたんだ。そのガキがな、調子に乗つて白人主導の国を作り始めたんだよ。知つての通り、歴史には携わる訳にはいかなかったからな、そのままアメリカ大陸を出た」

忌々しい、そんな表情を隠す事なく言う壱朗に、当時の悲惨さが伺える。

「そうなんですか……」

「ただ、先住民族を排除しようとする、白人系の奴等のやり方に頭に来てな。つい、手を貸しちまった。それが狼の群れと暮らしてた、『酋長』の部族だった」

ティアはそれを聞き、安堵する。歴史への干渉はしないと言いつつ、人助けをする。そんな壱朗の優しさが、ティアは好きだった。「そういえば壱朗様は、たまに人助けしてましたよね。その後に必ず『歴史が、歴史が』って言いながら、唸つて後悔されてましたが

……」
「旦那はんらしおすなあ。ウチも阿呆な眷属から、助けておくれやすう」

日巫女は話の合間を読んでは、誘惑しようと壱郎の胸元に臍を寄せる。

「日巫女様！ いちいち、壱郎様にしな垂れかかるのはやめて下さい！」

そう言つてティアは、日巫女を壱郎から引き剥がし、二人の間に腰を下ろした。

「ティアはん、会合の終わつた翌日迄は、好きにさせてくれるお約束やおへんか」

「ええ。そうでしたね。少し違いますが似たような『約束』はしましたね」

不満そうな日巫女にティアは笑顔で肯定する。

「ほんなら……『ですが』……え？」

「約束では、『4月17日迄は、日巫女様のお好きな様にして頂いて構わない』というものでした。会合の翌日ではありません」

「……………まさかっ。旦那はんっ！ ウチの事、騙しはったんかいな！ このっ。旦那はんの変態っ。いけずう！」

ティアが壱郎との間にいる為、日巫女は煎餅を壱郎に投げつける。

壱郎はそんな日巫女に苦笑しながら、飛んでくる煎餅を受け止め、籠へ戻している。

壱郎は会合が始まつて、直ぐに会議場を三日後に跳ばした。つまり、今は4月16日に会合が行われた三日後、4月19日なのである。

壱郎以外はティアも日巫女も、約束の日時の事に気付いていなかったが、あまりにもティアの機嫌が悪くなるので、壱郎がこっそり気付かせるや否や、ティアは鬼の首を取ったかの様に、日巫女を妨害し始めたのである。

「パパ！ ママ達も！ 見て！ 猫ちゃん！」

どこで見つけたのか、猫を抱えて走ってくるミーシャ。

「お、ミーシャ。懷かれてるな。でも気をつける、猫は気まぐれだからな。ちよつとでも嫌になると逃げ出すぞ？」

「一緒にいられないの？」

三毛猫を抱いている、ミーシャの表情が曇る。

「飼うなら、日巫女の神社に預ける事になるなあ」

「ごめんね、日巫女様の所には長くは居ないから、置いて行く事になっちゃうね」

ミーシャは、猫がどういった動物なのかも知らなかった。

「そっかあ……」

ミーシャの精神年齢は幼い。

吸血鬼となり、無意識に『不老』を発動した事で体が成長せず、気味が悪いと両親に病院へ放り込まれた。その後はずっと幽閉状態で暮らしていたし、ラマルティーヌ卿に捕まってからも、それは変わらなかった。

故に、付近には桜が満開のこの茶屋も、壱朗達と食べている和菓子もお茶も、猫を抱いているミーシャにとっては、新鮮で楽しい事だらけだった。そんな些細な事が嬉しく思えてしまう程、ミーシャの今迄の生活がどれだけ暗く、そして重い人生だったのかが、他の三人には解ってしまう。

だからこそミーシャに同情してしまい、ある事に気付けなかった。それを後悔するのは、数日後の事となる。

茶屋には今、従業員はいない。此処は日巫女専用のお茶飲み場所であり、迷い込んだ一般人の対策に、茶屋の形をとっているだけだ。普段はずっと、日巫女の眷属が暇つぶしに営業している。

ただ、日巫女の眷族はまだ会議場に閉じ込められている為、誰も

居ないだけだ。

会場を出てからの四人は、壱朗作の『血の熟成』の力を抑える『符』を身に付けて、ずっと茶屋にいた。それに気付かない日巫女の眷族は、会場を出たら京都からは逃げただろうと、全国へと散って行くだろう。

冷静さを欠いていると、意外と気付かないのは人間も吸血鬼も同じ様だ。

過去の日巫女の逃亡癖が、そうさせるのかも知れないが。

「パパはお札が無いと、いつも怖いパパなの？」

ミーシャは可愛らしく首を傾げて、こちらを覗きこんでいる。

「そういうわけじゃ無いさ。でも今は隠れんぼの最中なんだよ。見つけた人だけ、美味しいお茶とお菓子と桜が楽しめる。そういうお遊びなんだ」

「せやからミーシャちゃんも、腕のお札、破がしたらあきまへんえ。そないな事したらミーシャちゃんが鬼になって、ウチらが逃げてしまえますえ？」

「やだ。パパとママ達と一緒にいる！ 破がさないよ」

日巫女の言葉に、ミーシャは札を張った腕を背中に隠し、守っている。

壱朗は日巫女の言い方は子供心をくすぐる、いい言い方だと思っていた。これでミーシャは、当分は札を身に付けているだろう。お札そのものでは見た目が悪い。何か考えてあげなければ、と壱朗は頭を悩ませていた。

しかし、ティアは日巫女の意図に気付いていた。ミーシャに『ママ達と一緒にいる』と言わせたかっただけなのだと。壱朗に聞こえる様に、ママ『達』と。

「しかし、これで気づく人いるんでしょうか……これ、壱朗様の渾

身の『符』と同じですよね？」

「『酋長』は結界にすら気付いたじゃねえか。一人一枚だし、大丈夫だろ」

壱朗は楽観的だが、実は自身を過小評価していた。この状態で気付けるのは、『魔血晶』を背負う真祖か日巫女の眷属の血技、後は偶然ぐらいいであった。

「何枚も貼れるの？」

「ええ。そうすれば更に解りにくくなるのよ。」

「じゃ、ミーシャもつと貼る！」

頂戴と両手を前に出し、アピールするミーシャ。

「だ、め。それはズルっこだぞ。一枚で我慢しなさい」
「うう〜」

壱朗にあっさりと断られ、ミーシャは頬を膨らまして、拗ねる様に壱朗を睨む。

壱朗はそんなミーシャの頭を撫でてやった。実は壱朗は本気でそう思っている訳ではない。ただ、札の効果は貼られた者の魔力を kullanarak 発動している為、生りたての吸血鬼に負担がどれだけあるのか、分からないのだ。

『符』の効果は、体の表面から十数cmより外側に、魔力を^{血の力}出さない様にするだけだ。おかげで魔力の残滓が、体表を循環し治癒も高める効果があるが、目視されれば気付かれる。壱朗が会議場で力を見せない為に張っていた結界とは、完全な別物だった。

一定以上強くなれば、自然とその強さを隠すのも上手くなる。それは人間も吸血鬼も変わらない。自分の力を誇示するなど、阿呆のする事だと思っている者は多い。特に真祖や二世はそうだ。

背に『魔血晶』を背負えば、更にその傾向は強くなる。格の違いを突きつける為に見せる者も居るようだが、普通はしない。何故なら三世以上は血が濃い為、上位者の存在は見れば解る。『血』が上位者の存在に畏怖を感じ、敬意を表する様に騒ぐので、見せる必要

もない。

『魔血晶』を背負う吸血鬼からすれば、四世以降の者などは人間と大差ない存在だ。血の力が弱く、解り難いからだ。千年以上を生きた真祖や二世なら、三世すら同じ吸血鬼として認識していない場合もある。

恐らく今、京都タワーなど高い建物の上には、挨拶に来ようとする者達が、壱朗達を視認しようと登っているだろう。

どんなに魔力が感じられなくても、『見れば解る』筈である。

その為に壱朗は、普段の生活ならば完全に消している滲み出る魔力の残滓、それを今は抑えていなかった。その上で、見つけやすいように見晴らしと景色の良い場所、お茶を飲んでいるのだから。

久しぶりの和菓子を楽しみながら、壱朗は日巫女に聞きたかった本題へと話を進める。

「日巫女、お前は背に幾つ背負ってる？」

「旦那はん、そういうんは寢屋で聞いておくれやす。旦那はんからすれば、対した事おまはんやしれまへんけど、ウチはこれでも祇園で最も高いお華やった女どすえ。安う見てもおては困りますえ？」

日巫女は茶化すが、壱朗には通じなかった。

「……死ぬ気か？」

「……旦那はん達は特別な『血技』をお持ちやから、知らはらへんまま、乗り越えはったんかと思てましたけど……知ってはったんどすなあ……」

「壱朗様？ なんのお話ですか？」

ティアは知らない。本能で気付いているかも知れないが、はつきりと自分の中で認識していない。

「それに答える前に旦那はん、教えておくれやす。ティアはんの四つ目創りはった時、その時はどないしはったん？」

「時空間捕縛結界で棺ごと眠らせた。試作品の結界符だったから、内心ではヒヤヒヤしていたがな」

「え？ それって、私の『魔血晶』の創生に失敗しかけた時の事ですよね？」

「う？」

ミーシャには話の内容も単語の意味も、分からないのも無理はない。不思議そうにしていたが、理解するのを諦めたのか、猫をくすぐる作業に戻っていった。

「旦那はんの時はどないしはったんどす？」

「前半二回は過去に跳んだせいかと思い、気力で耐えた。後半二回はティアにとった方法と同じ、みたいなものだ。二回耐える迄はティアと会えてすらいなかったからな。ティアに会う為に死ぬ気で耐えた」

「これに二回も耐えはったんどすか。さすが旦那はんどすなあ……それにしても。ほんに、ティアはんがけなるいわあ……」

「え、と？ あれ？ 何のお話なんです？」

ティアも気付いている癖に、未だに認めるのが嫌なのだろう。思いついたく無いと拒否しているのだけかも知れない。

「ウチも、そこまで思うてもらえるんなら、頑張ってみてもええんやもしれまへんけどなあ……」

その日巫女の表情に、何か危ないものを読み取った壱朗は、驚きに目を見開くと同時に、ティアを退かし日巫女の身体を抱き寄せる。そして、元々肩にかろうじて引っかかっていた程度の着物を、後ろ襟を掴んで引き下ろすと肌を晒させる。

「旦那はん、こないな昼間から屋外でやなんて、ウチ恥ずかしおすかな」

「茶化すな。場合によっちゃ責任はとってやる」

「い、い、い、壱朗様っ！ 一体何をっ！」

「おかしいとは思ってたんだ。舞妓姿なら、背中が結構見えてても、おかしくなかったのにな。お前、胸元はえらく見せてるくせに、背中を隠してたろ」

「旦那はん。遊びなれてはるんどすか？ 御華遊びなんかしてないかと思つてましたけど……まあ、ウチかて本気で隠せるとは、思てやしまへんでしたけど」

上半身を裸にされた日巫女は、袖から腕を抜いて壱朗の首に抱きつき、ワザとその豊かな、下着も付けていない胸を押しつけている。ティアはそれを止めさせようとしたのだが、そんな日巫女をの態度を無視し、背中を見る壱朗の顔が真剣そのものだった為、同じ様に黙つて背中を見た。

もちろん、ティアは日巫女の背中など見た事は無かったが、ちゃんと見る事でその異常さに気が付いた。

背中だけ、異様に汗をかいている。それはまだ可愛い方だった。日巫女の背中には四つの『魔血晶』がある、そして魔方陣も浮かび上がっている。

異常なのは、その『Black Tetragon』の魔方陣が血管や神経のように蠢き、明滅しているのだ。

「こ、これは……壱朗様つ。もしかしてっ！」

「その通り。ティアの時と同じだな。そして俺が四回経験した事のあるものだ。俺はこれを自殺陣病と呼んでる。ティアの時は魔血晶の創生に失敗したとばかり思つていたが、自分の十二個目を創つた時に気付いた。コレは予定調和だと」

「自殺因子……どすか。旦那はん、上手い事言いはりますなあ……」

ティアも今の日巫女の状態の苦しさは知っている。何しろ、約千年前に自分も四つ目を創つてもらつた直後に経験した。その時はティアは創生の失敗だと思つていたし、壱朗の符で乗り切つたので、自分の背中を見た訳では無かった。だから、今の壱朗の確証がなければ、すぐには気付かなかつただろう。

「旦那はんも知ってはるんやったら、話しは早おおすなあ……………」

実は、もうそないに持ちまへん。せやから、旦那はんにはウチのトコの子らをお願いしたかったんどす。お詫び、ゆう訳やおまへんけど……ウチの事、好きにしてくれはってよろしおすさかい。なにとぞ、引き受けたってもらえやしまへんやろか……」

「そんな理由で、女を抱ける男だと思ってるのか？」

「思てやしまへん。だから、あんじょう抱いて貰える様に、氣いつこうたのに。旦那はんがウチの事騙しはるから、やわになつてもうたんやおへんか」

「……………そうか」

「あんまり女に恥かかすもんやおまへんえ？　ココ迄言わたんどす。男らしゅう、責任とつてくれはっても、ええんやおまへんか？」
日巫女眼は既に笑っておらず、真剣そのものだった。

壱朗はティアをみる。ティアからは日巫女に聞こえない様に、血族間通話で話しかけられる。

『眷属をお引き受けになれますか？』

『それはリスクが高すぎると思う。俺の血技を広める事になつちまう』

『では、死ぬつもりの日巫女様を無理矢理生かすか、死なせて、その眷属を放置するか。ですよね』

壱朗の答えは解っているのだろう。壱朗がティアの強さに甘えていただけだった。

『……………そうだな』

『いいですよ。一人ぐらい愛人が増えても。』

他に増やさないって、眷属も作らないって「約束」してくれるなら、ですけど。

どうします？』

『……………すまん』

ティアは、壱朗が放っておけない事は分かっていた。自分の時もあり出したく無いくらい、生きる事を諦めてしまふ様な感覚だったのだ。いつの段階で、日巫女がこの状態になったのかは知らない。ティアの時は創生して二日で同じ状態になり、発狂しかけて壱朗に眠らされた後、気付いたら収まっていた。

日巫女はそれを耐え、眷属を壱朗に託す為に今日まで我慢した。壱朗の表情を見れば、自分の体験を思い出せば、それがどれだけ辛いものか嫌でもはつきりと解る。

「旦那はん、そないな情けない顔せんとおくれやし。最後に抱かれる男が、そないな顔してはったら、ウチの華もしぼんでしまいますえ？」

茶化す日巫女に壱朗は本気の眼で言い返す。

「俺は、俺の我が儘でお前を生かす。許せとは言わん。責任ぐらいつてやる」

「やめておくれやす、ウチはもうかましまへんのだ。ウチの子らだけ見てやっておくれやす」

壱朗はそれ以上説得をする事を諦める。そして、血の力を抑えている符を剥がす事も煩わしいと、力を開放する事で符を弾き飛ばす。「ティア、ミーシャと一緒に此処にいる。お前を見つけた者がいたら、すぐに戻るからと伝えておけ。多分来るなら『酋長』が最初にくると思うから、困ったら『酋長』に相談しろ。」

「はい。お帰りをお待ちしています」

ティアはもう、何も言うつもりはなかった。

「旦那はん何する気い？ やめてんか。ウチの事はまあ、ほっとしておくれやす」

日巫女は壱朗が何をする気なのか分からず、拒絶しようとする。壱朗の魔力の開放に当てられ、崩れかかっていた結い上げられた髪は、日巫女が首を振る事で完全に解けてしまう。

「うるさい。だまれ。時間旅行に連れてってやる。Ｔレックスとか

見ものだぞ？」

そんな綺麗な黒髪を、器用に胸元に垂らしてやりながら、無茶を言う壱朗。

「は！？　ほんまに何しはるつもりやのん！？　やめて、はなしておくれやす！」

日巫女の叫びも虚しく、壱朗は日巫女を抱えたまま、その場から消え去った。

実はティアの考えでは壱朗の為にも、日巫女を失う訳にはいかなかった。真祖が眷属にはなれないので、壱朗が拒めば愛人が増える事は無い。だから日巫女さえ抱かれる事を諦めてくれれば、それで良かった。そして、目的に協力してくれれば問題無かったのだ。

だが、死んでしまうというのは困る。

どんなに時間がかかっても、日巫女の協力を得て知りたい事があったのだ。

ティアが二世以降は『血技』を増やせると知った時、ティアは真祖より二世の方が強くなるのでは？　と考えたが、それはある意味間違いだった。

なぜなら『血技』は両刃の剣でもあった。『血技』を使用できる吸血鬼は、同時に『血技』一つにつき一つ、絶対的な弱点が発生する。

全ての吸血鬼に適用される弱点は『聖水を使い制作された武器による心臓の破壊』これだけである。ただ心臓を破壊しても意味はない。

それに加え『日光』や『銀』、『ニンニク』など『血技』の数だけ弱点が増える。『血技』の強さにも比例する。

既に真祖が死滅した『日光』が弱点だった血族の死に様が、教会所蔵の古い文献の記録に残っている。

その真祖は『日光』を体積と同質量浴びる事で完全に死滅した。
その二世は『日光』を体積と同質量浴びる事で灰になり、灰の中に残っていた心臓を聖水を使い制作された武器により破壊されて死滅した。

その三世は『日光』を浴びて体が焼け爛れ、二四時間浴び続けた後、灰になり、灰の中に残っていた心臓を聖水を使い制作された武器により破壊されて死滅した。

その四世は『日光』を浴びて体の動きが極端に鈍くなり、捕縛されて心臓を聖水を使い制作された武器により破壊されて死滅した。

弱点についての一番の問題は、ティアも壱朗も弱点が分からないという事だ。二人は同じ血技を持つ眷族が居ない為、血技を持つ事で生まれる弱点が、なんなのかは分からない。最悪、他の吸血鬼に頼み、ティア自身が実験台となつて、調べてもらふ必要があるかもしれない。

しかし、日巫女の血族の血技は『予知』であつた。眷属はそこから派生したものが多く、眷属一人一人種類は違えど『本来知りえない情報を知る事ができる』というものらしい。

どちらにしろ、日巫女の血族は知ろうと思えば知る事ができるのだから、隠しても仕方ない。開き直つて聞いてしまふ方が、手っ取り早いとティアは考えていた。

おかげで、壱朗が真祖になる時期を『未来予知』で引き当て、ラマルティーヌ卿の血族に知られてしまったのだらう。

そして、日巫女は恐らく壱朗が眷族を託すにふさわしいかを見定めるべく、ラマルティーヌ卿の血族に情報を流したのだ。これらの予測に関しては壱朗と同意見だつた。

その為、今の段階で日巫女に亡くなれると困るのだ。最悪自分が実験台になるが、壱朗がそれを許すとは思えない。

だから、日巫女には生きていてもらわないといけなかったのだ。

る。

ティアは『あーあ。夜の回数減るなあ……ミーシャもきつと何百年後には、そういう事、言い出すだろおなあ……』と独占欲丸出しの事を考えながら、猫と戯れる子供にしか見えない少女に、何とも言えない意味不明な視線を送るのだった。

第12話 周期の克服（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第12話 周期の克服

壱朗は日巫女を抱え、いつか分からないほど大昔に来ていた。日巫女さえ落ち着けばすぐにあの時代に戻るのだ。自分と日巫女が存在しなかった過去なら、いつでも良かった。

壱朗はティアと連れ立ち、結界が完成した後も、自分が旅立った直後に跳んで戻るという方法を、とらなかつた。

未来に跳べなかつた訳ではない。ティアに自分が会っているから送り届ける必要があつたという理由もあつたが、本当の理由は『魔血晶』十六個目の、四回目の二千年の時期を、ティアに見られずに眠つて過ごす為だつた。

四度目の自殺陣病アポトシスを乗り切る為に。

それに耐える自分を見せたくは無かつたので、専用の冬眠墓地を作つたのだ。

そして、今の日巫女にも壱朗の時と同じく、恐らく結界で因子を抑え込むだけでは足りないだろう。生きている実感が必要になる筈だつた。壱朗の二回目までの時は、自分に痛みを与えたり、お腹を満たしたりした。その実感とティアへの想いで耐えきつた。三回目、四回目には、符術もそれなりに使えたので、生きている実感を感じていた記憶を符で呼び覚まし、エンドレスで頭に流し続けた。どの時もそうして誤魔化している間に、抑え込んだのだ。

「旦那はん、こないなトコ連れてきはつても、どないもならしまへんえ」

「ふん。俺を甘くみるなよ。八千年で計四回も経験させられたんだ、何とかするさ。だが、やり方は好きにさせて貰うぞ……………」

「え？ あ、ちょつ。そないなトコつ。んっ、いきなり触らはるやなんて……」

日巫女は慌てて、壱朗の手を抑えにかかる。しかし、壱朗の手から溢れる魔力の強さに、日巫女のそこは無理矢理、感度が引き上げられ、快樂の塊のような刺激がとめどなく襲いかかる。触れられているだけで、である。

「何だ。さっきは好きにしていって、言っただだろっが」

「言っただけど、もおっ、言っただけど。そっちはっ、ウチのっ、あああつ、子らを、ああっ、もおっ……………んうっ。ああっ……………」

……………あきまへん。ああっ。そないにしたら、あきまへんってばあ……………」

そのまま壱朗は、日巫女の腰まである艶やかな黒髪をどけて、首筋に唇を這わせる。それを手始めに身体を隅々まで触れていきながら、所々に魔力の塊を流し込んでいくと、何処に持っていたのか、人が四人は入れそうな黒い柩を取り出した。

そこに日巫女を放り込み、自分も入ると蓋をしてしまう。

すると柩の足元から大量の札が溢れ、柩が見えなくなる勢いで張り付いていく。すぐに柩は札に完全に覆われて、真っ白になった。

札に完全に覆われる迄は漏れ聞こえていた、日巫女の押し殺した様な声も、耐えきれずに上げてしまった艶やかな嬌声も、何一つ柩からは聴こえなくなった。

壱朗は巨大な鉄球が連続して、ビルに叩きつけられる様な音で目を覚ました。

あれからどの位、時間が経ったのかは分からない。
延々と続く音に嫌気がさしてきた頃、隣にいる日巫女も目を覚ま
した様だ。

「旦那はん、何ですのん？ この音。逢瀬の最中で邪魔するやなん
て野暮やわあ」

「案外、本気でドレックスかもな。まあ、この柩に居れば問題ない。
東京スカイツリーから落としても壊れんぞ、こいつは」

「あれからどれぐらい経ったんやろか……」

「さあな。時計をみれば解るが……おい。何すんだ」

「嫌やわ、旦那はん。そう言う事を、女の口から言わすんが趣味な
んどすか？」

あんまりええ趣味やとは言えまへんなあ……」

壱朗自身を撫で回しながら、日巫女はそんな事を言い出す。

「言わすのが好きだと言う訳ではないが、状況次第では悪くは……
ってそういう事じゃなく。もう大丈夫なのか？」

「大丈夫おすなあ。もうあの時でかなりぎりぎりやったさかい、そ
ないに時間かからんかったんやろか」

「それはそうかもな。ほら、背中向ける。見えないだろ」

そう言いながら、日巫女に背を向けさせる。

「あん。もう、ちょっとは、優しゅうしておくれやす」

日巫女の背中には、既に魔方阵は浮き出ておらず、一安心と言っ
たところだった。後は再発がないか確認し、数日問題ないのであれ
ば、それで乗り切ったという事の筈だ。

そして、日巫女には黙ったまま、右手で『魔血晶』に触れ、記憶
を探る。

「あつ、あかん。いくら旦那はんやいうたかて、女の秘密を勝手に
…… ああん、もおっそういう時だけ、そんな触り方するつ、やっな
おな
記憶

んてっ、旦那っ、はんのっ、ああああっ、すけべえ、あっあっあっ、いけずう！」

日巫女に生きている実感を無理矢理感じさせる。それは眠ってしまっ前まで触れていた時と同じように、限界まで日巫女の快楽を引きずり出す。

「ちゃんと知っておかないとな。自分の女の過去ぐらいは。そう思うだろ？」

後ろから抱きしめられ、前に回された左手にソコを刺激され、抵抗できない日巫女は、壱朗に文句を言い続ける。

「もおっ。都合のええ事、ああっ、言わっはってからにっ。後でっ。つつああっ。旦那、っはんっのも。見せてっあっ、あっ、あっ、んう。もらいますえっつ。……はあっ」

日巫女は駆けあがってくる快楽に抗えず、背を反らす。後ろの壱朗の耳元で、心地よい吐息と共に嬌声を上げる。そんな日巫女に意地悪い笑顔で答える壱朗。

「気が向いたらな」

「ずるいわあ。そんなんっ、あっああああっ、あっ、あっ、ううん」

耳元で囁かれた後、耳を甘く なぶ 嬲られ、日巫女は更に追い詰められていく。

日巫女は、血を吸う際に快楽を与える事はあっても、与えられた経験は少ない。

しかも今は、かなり弱っている。

そんな日巫女に、壱朗の攻めは耐えられる筈もなかった。

「あっあああ、ああっ ううんっ ああ っ」

壱朗はそんな日巫女を他所に、見たかった物が見つかり、そこで口と手を止める。そして記憶に意識を集中し考え始める。

やはり、日巫女は吸血鬼の弱点を見れる。それなりに相手の情報が必要な様だが、可能な様だ。ふむ、コレはラマルティヌの弱点を見ている時か、あいつは大地？ 埋めればいいという事か。ああ、水だから大地に吸収されて形が保てなくなる様なイメージか。後は……日巫女は火か。焼き尽くす、か。可能なようで難しいな。吸血鬼に限らず人間もだが、肉体というのは案外燃えきらない、跡形もなく焼き尽くす火力など短時間では簡単に起こせないな。火葬が良い例だ。それなりに時間がかかるからな。しかも、黙って燃やされている訳がないのだ。その間に反撃されない訳がないし、逃亡されるだろうしな。俺たちの弱点も、そういうものなら良いんだが……

「……………はんっ……………もうっ……………こらっ！」

「んん？」

日巫女は壱朗を拘ねた様な目で睨む。

「もおっ！ こないな事したまま、他の事に集中せんとして。旦那はん、おかしいんちゃう？」

壱朗は啞えたままだった唇を離して苦笑し、見たものとは関係ない事を話す。

「記憶を見て気付いたんだが、花魁や舞妓と色々やってたんだな」

「花魁やった頃は、吉野太夫って呼ばれた事もあるえ」

「それで言葉が混じってるんだな。俺の大阪弁と標準語みたいなものか」

「せやなあ。全部、京訛りで喋らる人には同じ様に返しますな。そつやない時は、相手はんがわかる範囲迄しか、訛りでは喋らへんなあ。旦那はんもせやろ？ 所々で関西弁が出てますえ？」

そついえば、と会社勤めの頃を思い出そうとする壱朗。

「……………ふむ」

「……………だから、旦那はん」

「ん？」

「そないなトコに手え、入れたままにせんとつて。恥ずかしがればええのんか、怒りやええのんかわからしまへんわ……」
言われて気付き、抜いて触^ふれる場所をずらす。だが壱朗^{さわ}が触るのをやめないのは、それを望んでいると感じるからだ。

案の定、日巫女はそのまま身体の向きを変え、胸に頭をのせてくるので黙って引き寄せると『あん』と可愛らしく囁き、体重をかけてくる。

「すまんな。」

……一応、経験から言つと再発がある場合があるが、数日問題ないのであれば、それで乗り切ったという事の筈だ。あれから一日半は経つてな」

「ほんなら、あと数日は旦那はんを独り占めできますなあ。外でれますのん？」

出れるんなら水浴びしたいわあ、今のままじゃ色々困りますよって」

日巫女のお腹辺りが所々、血が張り付いて乾燥したかのように力サカサになっている。おもに壱朗のせいだった為、壱朗は責任を感じたが一応、忠告はする。

「Tレックスとかいたら大変だぞ？ 弱らせるのに苦労したんだあいつは」

「旦那はん……生身のままで怪獣と闘わはったんどすか……無茶しはりますなあ……超の星のお人みたいに、巨大化しはるんちやいますのん？ ……三分だけ」

「いや……」

Tレックスは怪獣ではない。そう思いながらも、当時を思い出す。

あの時は好きで挑んだ訳ではない。過去に跳んだりするのに必要な条件を模索していたら、テストで時代の認識などを間違えて、

誤ってTレックスの前に跳んだのだ。過去のアメリカ大陸にそんなものが居ると知っていたら、研究の為にアメリカには行かず、ロシアに行っただろう。

しかし『怪力』のおかげで力はこちらの方があるのだが、いかにせん身体が大きさが違う。『霧化』で牙を避けながら頭上へ移動し、踵落として頭にダメージを与えて、動きが鈍った内に元の時代へと逃げ出したのだ。のたうち回っていた様だが生きていたので、問題ないだろう。

ユーラシア大陸北部に、Tレックスがいなかったという保証はないのだが、今の壱朗もそんな知識はない。しかも、はるか未来でそのTレックスの骨が発掘され、壱朗の砕いた頭の骨が複雑骨折になっており、発掘した考古学者たちにパズルをさせる事になった事は、誰も知らない。

とりあえずその事は忘れ、日巫女の望みをかなえるべく棺を開ける。

「む、えらく眩しいし、暑いな……」

「棺の中の方が快適やなんて、ウチらしいけど、けつたいな話どすなあ……」

実は太古には現代の人間では耐えられない、ウイルス性の病原菌などが多数存在する。するのだが、吸血鬼のDNAや細胞は、むしろそれ自身が吸血鬼ウイルスと言って差し支えない代物であり、そんな病原菌ごときに負ける筈もなかった。

そして壱朗は空気を読んで、あえて気付いてはいたが日巫女が騒いでも面倒なので黙っていたが棺の周辺の地面には、そのあたりを縄張りしているのか、マンモスのモノかと思われる足跡が山ほど残っていた。

とりあえず、地面にめり込んだ棺を浮かせ、そのまま『浮遊移動』で飛んで川か湖を探す。付近には見つからず、海だと意味がないので更に上昇し、琵琶湖の原型を探す。

「えろう高いトコまで上がるんどすなあ」

「海水の塩水で体を流したいか？ どうせなら琵琶湖の方がマシだろう」

「せやなあ、海水は嫌どす。旦那はんに全部お任せしますえ」

そう言つて日巫女は壱朗の胸にしなだれかかり、力を抜いている。恐らくまだ体力が回復していないのだろう。懐中時計の時間から、まる一日は日巫女を攻め、自分もついでに満足させてもらった為に体力を奪っている。日巫女も今は立てないかもしれない程の筈だった。壱朗が日巫女にも飛べと言える筈もなかった。

それなりの高さに到達した時点で、湖であろうものを見つけた。壱朗の知っている琵琶湖とは形が違うが、『まあ、大丈夫だろう』と琵琶湖だと思われる湖へと跳んでいく。

「日巫女、もうすぐ着くぞ。起きろ」

「いやどす。旦那はんがこのまま湖で洗っておくれやす」

「おい。そこまでさせるのか？」

「旦那はんにぶちん……腰が抜けとるんどす。やりすぎどす。お腹の中も……」

それ以上を言わせる訳にはいかない。そう壱朗は判断し、すぐに了承する。気付いてはいても、頭が回らないあたりは壱朗らしいのだが。

「わかった！ もう。これ以上ない位に綺麗にしてやるから、何も言っな」

「大昔の湖って、入っても綺麗んやるか……」

「あーそうだな、日巫女お前は棺桶で待ってる」

「どないしますのん？」

日巫女は思いつかないのか、不思議そうに首をかしげていた。その仕草はミーシャに似ていて、ミーシャが真似したののだろうが可愛らしいモノで、壱朗は自分の鼓動が高鳴るのを感じていた。「ん。湖の中の水分だけ取り出す。取りあえず風呂を作るか」

壱朗はそう言つと、湖の付近の平らな土地を拳で殴り、穴を作つていく。二人ぐらひは余裕で入れる程の大きさになると、どこかへ飛んでいき、大きな岩を持って帰ってきた。その岩を砕き、穴全体に敷き詰めた後、上から蹴つて圧力を与え、固定している。吸血鬼の『怪力』がなければ、絶対にできない岩風呂造りだった。

「旦那はん。結構、野性的アウトドアなお人やつたんやなあ……」

「まあ、なつ。昔に跳んだは良いが、風呂と便所には苦労したからなつ」

岩を、手頃な大きさに割りながら言う辺り、壱朗も早く入りたいのだろう。

なんせ汗と体液でベトベトだったり、カピカピだったりするのだ。このまま戻れば、ティアの嫉妬ヤキモチのお仕置きが壱朗を襲うだろう。

などと話している内に水を入れるだけになる。壱朗は火炎球火炎符を湖に打ち込み、大量に水を蒸発させる。そして氷柱球氷結符で水蒸気を集め、即席風呂へと放り込む。さらにその氷柱球を火炎球で溶かし、同じ火炎球で焼いた岩を放り込む。すると水の温度が上がる。それなりの温度まで温めれば、風呂の完成だった。

「はあ、上手い事考えはりますなあ……旦那はんと一緒にやつたら、風呂には困りまへんなあ」

そう言いながら、壱朗に向けて両手を広げる日巫女。要は抱き抱えて入れる、という事だろう。そう理解し、入れてやる事にする。

分かってた事ではあるが、日巫女の肢体は美しかった。日本人離れた腰の位置、透き通るような白い肌。唇や所々に見られる、桃色な箇所までもが美しい。壱朗がつけた物がなければ完璧だったろう。

そんな日巫女には先に入って貰ったまま、壱朗は少し離れて、もう一個同じ風呂を作る。そして、湯は入れずに置いておく。

「さて、俺も入るか。服は……後で洗わないとな。洗うという程はできないがな」

「もう一つは何に使いますのん？」

「どうせ、こっちはかなり湯が汚れるからな。戻る前にもう一つで入ってから戻る事になるだろ？」

「帰らはる前に、匂い落とそやなんて。そないにティアはんはんに氣い使わはつたら、今一緒におけるウチの立場がおへんやおまへんか」

何故か初めて会った頃よりも、精神年齢が下がった気がする日巫女の態度に、ちゃんと考えてあつた言い訳の理由と行動を実行する。日巫女を後ろから抱き抱え、逃がさない様にして、今度は本気で抱き始める。

「そないに抱きしめはつたかつて、誤魔化されやしまへんえ」

「本気でそう思ってるのか？」

壱朗に顔を向けた日巫女は、そのとてつもなく意地悪そうな笑顔に不安を覚える。

「え？ 旦那………はん？」

「さっきまではお前の可愛い嬌声こえは聞こえても、悶える姿が見れなかつたら？ 今度はそれも含めて本気で可愛がるからな？ その後の為のもう一つの風呂だ。こっちはすぐに使えなくなる。さあ、お仕置きだ。覚悟は……してなくても止めないから……別にいいか」

壱朗は少しだけ不満だったのだ、確かに吸血鬼は闇でも見通せる。しかし、それは見えるだけであって、昼間と全く同じように見える訳ではない。声は堪能したが、視覚的には堪能できていないのだっ

た。

「う、ウチがお仕置きされるん？　なんでっ」

余計な事

「ティアの事考えたろ？　そっいうのは、ティアが居る時だけにしとけ」

壱朗は先程までの自分の行動　最中に他の事を考えたりしていた事や、ティアに怒られるから洗濯はしようと考えていた事は棚に上げ、それが当たり前だと言わんばかりに、日巫女にお仕置きをし始める。快楽の中に本気で叩きこむというお仕置きを。

「う、ウチが悪いのん？　ちょ、旦那はんっああっんっ」

「どっちが悪かろうが、もうどうでも良い。お前を堪能させる。それだけだ」

日巫女が腕だけで逃げれる訳もなく、壱朗にされるがままになっ
ていく。

「待ってえ、まだっウチ、腰がつ、ああ　　っ。ふっうん。
ちょ。さっきまでとっ。ちやいすぎっ。ああっああっー！
っ！」

「どうせ抜ける腰だ。今からそうでも関係ない。言ったる。本気だ
って」

日巫女はその後二日かけて、壱朗を甘く見ていた事を理解する。
八千年。言葉で言うのは簡単だが、とんでもない年月だ。その間で
蓄積された技術に、とてつもない魔力。どちらかだけだったにして
も、日巫女に耐えられるはずもなく。日巫女は壱朗の思うがままに、
快楽に溺れ、気を失い、そして快楽に目を覚まし、更に気を失う。

合間合間に吸わせられる壱朗の血が、日巫女の腹を満たし、徐々
に魔力を回復する。真祖同士での、魔力の上乗せや強化はできなく
ても、空腹を満たす事や魔力の回復はできる。体力と腰だけは、ど
うにもならなかったが。

「あかん、あつかんつつてえっ！　うち、壊れっ、壊れて、まうっ、てええつつあああっーーーーー」

とりあえず、壱朗の魔力が周辺の獣を威嚇していなければ、間違はなく獣に襲われるぐらい、日巫女の艶やかな嬌声は周辺に響きわたっていた。

のちに壱朗は、『あれを京都でやられていたら、間違いなく警察に捕まるな。猥褻物ナント力法だったか？』などと言っていたが。実際は体力も魔力も少なくなっていた為に、抵抗らしい抵抗もほとんど出来なかっただけで『普段なら、あそこまではしたない声上げたりしまへん』と日巫女は拗ねたように言っていたが、内心では『たまーになら、ああいうんも良いかも』と思っていたのは日巫女だけの秘密であった。

そんな秘密の記憶も五百年後には、壱朗に覗かれてばれるのだが。

第13話 酒盛り（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第13話 酒盛り

壱郎が日巫女と共に、西暦2100年4月19日に戻って来た時、最初に行った事は服屋に飛び込む事だった。

壱郎はまずは一人で、昔は大根も売っていた事もあるという大型一般大衆向け洋服専門店に入り、自分用の服を一式揃えた。その後、日巫女用におかしくない程度のジャージとサンダル、そして大きな鞆を買って、彼女を待たせている林へと戻った。

「旦那はん、遅おすえ。さびしゅうて、死んでしまうトコですえ」

「アホか。そんな兎みたいな可愛げがあるなら、俺は苦労してない」
「ありますえ？」

「どこに？」

「ほら、兎みたいに白い肌、兎と同じピンク色の唇に……」

そう言って肌を見せつけるように、汚れて傷んだ着物を脱ぎ捨て、壱郎の首に抱きついてくる。日巫女は壱郎が少し意識している事を表情から読み取ると、さらに胸を擦り付け行動をエスカレートさせる。

「ほら、旦那はんはに擦れてウチのピンク色の先もこないに……」
「わかった。日巫女は十分兎みたいに可愛いから！」……「まあ、旦那はん、そないにはつきり可愛いやなんて言われたら、ウチ……」

「時間ないんだ、勘弁してくれ」

「………仕方おへんなあ。この二週間、楽しませてもらったよって堪忍したげますえ。でも旦那はん。いくらなんでも、ジャージは酷いんやおへんか？」

「お前の洋服の趣味……はともかく、サイズが分からなかったんだよ。だから、とりあえずはそれを着てくれ。今から一緒に買いに行

こう」

日巫女は急に態度を変え、いそいそと黒いジャージを身につけ始める。

「嫌やわ、デートのお誘いやねやったら、先にゆうてくれはらんとほんならすぐに、着替えさせてもろたのに。旦那はん、いけずやわあ」

日巫女の態度に不安を覚える壱朗。

「話をする前から既にかかってただろうが……」

「そんな、からかうやなんて、全部本気どすえ」

まだ、半裸に近い状態なのにも関わらず、本気を証明しようと再度にじり寄る日巫女に、『しまった、また脱線する』と危険を感じ、先に日巫女を止める。

「あー分かった。だから着替えと片付けが先！

気配を感じる。一般人だろうが偶然だろうが、『自分の女』の肌を誰かに見られるのを良しとするほど、心は広くないんでな」

「旦那はん。独占欲は、えろおつよおおますなあ」

指で口元に触れながら言う、その仕草と表情はとても嬉しそうだった。

自分が独占したいからなのか『自分の女扱い』に上機嫌になるのは、過去での二週間で壱朗が見つけた、日巫女の可愛い一面でもあった。

着替えた日巫女の着物と、簪などの髪飾り一式を、先程買ったばかりの大きめのダッフルバッグに詰めて、肩にかける。

「さて、まずは風呂からだな。臭うか？」

「そないな事、あらしまへんえ。服だけで全然ちやいますえ。まあ、髪だけはどうにもアレどすけどなあ」

壱朗に鼻を向ける事なく言い切る日巫女。吸血鬼が、嗅覚も自在に強化可能だからこそその事だった。

いくら、壱朗特製簡易岩風呂で体を流しても、流石に髪は石鹸やシャンプーがなければどうしようもなかった。実は壱朗は石鹸等も作れない事もないのだが、原材料を調達する植物が、太古の植物では理解不能すぎた。

「だなあ。ちよつと歩くが、風呂だけ入れる旅館があつたんだ。そこに行こう」

「逢引き専用の旅館でもよろしおすのに……」

「そんなトコ行ったら、買い物どころじゃ無くなるだろうが。ほら、行くぞ」

そのまま出来るだけ山道を通り、旅館付近で表通りに出て、旅館へ向う。

特に何事もな……い筈もなく。日巫女が家族風呂にしたいと嘔泣きし、周囲を気にした壱朗が渋々認め、中に入れば日巫女が壱朗を誘惑し、壱朗がお仕置きに気をやらせて眠らせ、寝てる間に髪まで全部、洗ってやった。

その後。最近出来たのか、まだ真新しい大型ショッピングモールに向かい、日巫女の洋服と一式を買った。洋服の上下と靴を選ぶ分には問題無かったのだ。だが、流石に下着を選んだ経験は少なく、何となく肩身の狭い気持ちでいっぱいになりながら、日巫女の下着モデルショーに耐えていた。居心地の悪そうにしている壱朗に、見せつける事だけが目的の下着モデルショーは、試着室で開催されている。

日巫女は自分をよく知っていた。どの姿勢が妖艶さを増すのか、どんな仕草が男の欲情を煽るのか、理解し、そして今は壱朗の為だけに実行された。流石に襲いかかり試着室に入る、という事はなか

ったが……何とか耐えていただけだが。

そんな壱朗の反応を楽しむ為に、次々に見せられる下着は、白、黒、赤、青、黄、桃、裸、橙、紫、水色、水玉、レース、ストライプと、とどまる事を知らぬかの様に延々と続いた。

次々と出てくる色とデザインに、壱朗は『何でこんなにも種類があるんだ』と思う。そして苛立ち半分、いや、二割程度と興奮が八割で構成された、自分の感情を必死に抑えていた。何時の間にか何処かへ吹っ飛んだ、当初の居心地の悪さは、全てが終わり『お会計を』と言う、女性店長らしき人の声を聞いた瞬間、数倍増しで返って来たが。

結局、買った服は着替える一着分だけで、後は下着を山のように買い込んだ。壱朗の肩にかかったダツフルバッグは、折り畳んだ羽毛布団でも入っているかのように、膨れていた。

そんなダツフルバッグを背負いながら、下着モデルショーの即席スタッフにされてしまった、下着売り場の女性店員が一番不幸だったのかもしれないと、壱朗は気の毒に思っていた。

だが店員を生贄にし、自分は逃げた店長の後ろめたさからか、その日の売り上げ向上を理由に時給が上がった生贄店員は、半年に一回くらいなら来て欲しいなあと考えていた事を、壱朗は知る筈もなかったのである。

知っていたとしても、二度とその店には行かなかっただろうが。

壱朗が　主に精神面で　疲れ果て、ベンチに座っていると、日巫女が缶のお茶を持ってくる。

その顔は本当に楽しそうに、輝いており、それを見た壱朗の疲れが少しだけ和らいだ気がした。

「旦那はん、だらしなないどすなあ。男おのこやったら気張りやす」
「楽しかったろ？」

壱朗は犬齒が見えるくらいの笑い顔で、日巫女に問う。

「…………聞かはあるんどすか？」

そっぽを向く日巫女の顔は朱に染まっている。

「日巫女が言つたとおり、言わせるのが好きなんだよ」

「ええ趣味やとは言つてまへんえ？」

そんな軽口には答えず、話を続ける。

「二千年後も乗り越えたら、今と同じ顔にさせてみせる」

「そないな事、言いはらんとつて。生きたくなるやおへんか」

日巫女は顔を歪ませ、口を開けていない缶を壱朗に投げつける。

「自然に逆らつてる訳じゃないと思うぞ。人間にも吸血鬼にも、乗り越える手段は用意されてる。それを掴めるかどうか、掴む意思があるかどうかだ」

缶を受け止め、言葉を吐きながら横に置くと、日巫女の腕を掴み引き寄せる。

「旦那はん、ほんまにいけずなお人やわあ。ウチをこないな風にしはつてからに。責任、とつておくれやす」

「ああ、俺の存在が許される間は、な」

壱朗の胸にしがみついたまま、文句を言う日巫女の声は震えていた。

「旦那はんのにぶちん。…………こついう時は嘘でもええから、絶対守るて言いはるもんどすえ」

「嘘はつかない約束なんだ」

「ティアはんと、ウチはちやいます。上手い事騙されてあげますさかい、嘘ついて構やしまへんえ。上手い事、気付かん振りしたげますえ」

日巫女は自分以外を見ないでと言わんばかりに、壱朗の胸を叩きながら言う。

「そつか。なら、嘘吐きになりたくなったら、日巫女にいうか…………」

「ウチはええ女ですよって、旦那はんを立てるのは任しときなはれ」

そう言う日巫女には、彼女が会合前までは持っていたモノが無かった。

妖艶な笑みで武装し、色気と艶やかさの中に潜ませた気然とした強さ。

二千年もの間、眷属を背負い続けた者の苦悩と覚悟。

そして、その苦悩と覚悟故に、眷属を託す決断。
託すが為の死ぬ覚悟。

全て、壱郎が知らなかったモノ。
そして、壱郎が奪ったモノ。

壱郎が日巫女に与えなければいけない。

次の二千年後までの支えを。

眷属を背負う事に押しつぶされぬ、強さを。

壱郎が背負う『Black Twice Octagon』漆黒の重積 八角魔血晶にも劣ら

ない強さを。

想像する。

壱郎の右には、ティアが礼儀正しく立ち、

壱郎の左腕には、日巫女がしな垂れかかり、

壱郎の足にはミィシャがしがみついている。

これからの二千年の生き方を決めたとなん、腹が座る。

壱郎は日巫女を抱きしめ、『嘘』を吐く。

「日巫女は俺が居なくても、日巫女の眷属の、吸血鬼の頂点だ。俺が現れようがその中身が弱くなる事はない。俺は日巫女の強さを欲した。だから、いい女のままの日巫女が、俺の横で今まで通り、艶

かしく美しくあれ」

日巫女が疲れていた事も、死を望んでいた事も知っている、理解している。

だが、その機会を奪った。

だから、強く居られる様にしてやる。

「かなんなあ。ウチは、ええ女おんなやさかい、一旦口に出した言の葉は、引つ込められまへんのに……」

そう言つて、笑う壱朗の唇を強引に奪う。それ以上は何も言わせない様に。日巫女は流れる涙も気にせず、その想いが伝わる様に強く、強く唇を重ねるのだった。

それは幻聴だったのか。

『旦那はんの嘘に騙されたあげますよつて、ウチの事、離さんとおくれやす』

壱朗には日巫女の願いが聴こえた気がした。

……………そうして、日巫女は壱朗の左腕となった

「……………で？」

壱朗は、ティアの青筋を見ない様に目を逸らし、漬物を口にする。「せやから。今、話さしてもらった通り、旦那はんがウチを無理矢理、手籠にしまったんだすえ。まあ、ウチは旦那はんのモノにされてしもたから。お傍を離れられまへんえ」

夢見る様に艶っぽい視線を、自分の下腹部に向け、意味深に撫でさする日巫女。

「い、ち、ろ、う、さ、ま？」

ティアは、日巫女が傍に居る事になった事を、本気で怒っている訳ではない。その過程の一部が気に入らないだけだ。

「うん、まあ、概ね、そんな感じだったかな。多分」

間違っではないので、とりあえず頷いてしまふ壱朗。

「ほら、旦那はんもこう言うてはりますえ？」

「ま、まあ最後の『左腕』は、ちよつと脚色過多かもしれないが…

…」

「いえ、それは構いません……………右は譲りませ

んが…………」

「それはいいのか…………ティア」

壱朗にはあつさり許可するティアが分からない。

「パパ？ 私、座つてて良いんだよね？」

やつぱりよくわからないミーシャは、自分の場所だけは守る様子だ。

「構いまへんで。旦那はんがあかん言わはつても、気にせんでええさかい」

そう言つてミーシャに御猪口を渡す日巫女。

「いや、駄目だとは言わんが…………酒はどうかと思つぞ」

いや、年齢的には問題ないはずだった。

そう、見た目が駄目なだけで。その可愛さで人を殺せそうなミーシャが酔つ払い、頬を染めて『パパ大好き』などと言われた日には、間違ひなく壱朗は、自分の理性をガリガリと削る戦いに、赴く事になるのは必至だっただろう。

「私が問題にしているのは！ 何故、二週間もそんなトコにいたのか、という事です。あと、なんで二人でデートしてるんですか。此処でずっと待つてたのに！」

もちろん、言外に『どうせずっといぢやいぢやしてたんですよ？』と言っているのは間違ひなかった。

話をしても怒られるのだが、大昔まで跳び過ぎて、日巫女が回復

した時には今度は、帰る為の壱朗の魔力が足りなかったのである。
今の状態で言ってもどうせ意味はないので、ティアの嫉妬と壱朗の失敗を行為で誤魔化せる時に、話をしようと考えている壱朗だった。

そんな弱腰な壱朗の右腕へ、ティアは奪う様に抱きつき、何故か現在進行形で関節に悲鳴を上げさせている。対抗して左腕は、日巫女の何故か下着の感触を感じない、柔らかく心地よい双丘に挟まれて、壱朗を墮落させようと包み込んでいた。

「私は右でいいですよ。右の方が壱朗様は上手ですし。自家発電のばかりの頃のお手伝いも、右手の役目でしたし。昔に両利きを目指したが、左手では色々やりにくいって言っていましたので。それに……」

勝ち誇るのはいいが、嫌な昔を次々暴露するのはやめて欲しい。そう思う壱朗の心は、ティアには届かない様だった。

「なんやのんそれ、べつにどおでもええ事ばかりやし」

そう言いつつも、羨ましそうに右腕を見ながら、左腕を 抱擁 抱きしめる日巫女。

そんな日巫女に『勝った』とばかりに鼻を鳴らし、右腕を 関節を 抱き締めるティア。

そして二人に挟まれ情けない顔の壱朗と、その膝に座る顔の赤いミーシャ。

『何気に一番良い場所はミーシャの位置では？』と二人は思い始めていたが、自分の位置は譲らなかった。何故なら

「何故、妾は酒宴が終ったら、帰らねばなんのじゃ！妾もここに残る！」

と言って、どう見てもティア、日巫女、ミーシャのうち、誰かが退いた瞬間に、場所を奪う気満々の『クロウディア春の女王』。

「春はん、それは無理やと思うえ？ お迎えが向かってきてるさかいなあ」

日巫女の間では、後30分もしない内に到着しそうな気配だった。

「この様な形で、力を持ちし方と再会できるとは。おお、コレが狼男の一族が作った特別製でしてな、吸血鬼儂らでも酔えますのじゃ。この頭が春のアホ娘の様に」

壱朗の隣で飲み明かしたいと、酒を注ぎ待っている『酋長』は、何気に『クロウディア春の女王』をアホ扱いしている。

「いや、『酋長』流石にアホは言いすぎなんじゃ……」

壱朗に勧められている酒は、普通の酒に『ソーマ神酒』と呼ばれる水を混ぜた物だ。これを混ぜると吸血鬼でも酔うし、二日酔いも体験する事になる。

「大体ですな、最近は芸術が分からない者が多いのです。だから簡単に、燃やすなどと言う愚行に走る者がいるのです」

とりあえず酔っ払い、桜の樹に愚痴を飛ばす、ラマルティヌ。
「ラマルティヌ卿、それは桜です。お酒を飲んでも正気は保つて下さい。壱朗様の前ですよ？ なんならもう二、三枚燃やしましよるか？」

どうやらティアは、始めて酒に酔う様で、かなり危険だった。

「も、も、燃やしちゃ駄目ですよー！ ティアさん、正気に戻って下さいー！」

そんな七人の雑用係に、強制的に参加させられている、ホール茶屋の従業員スタッフの壱与。

彼女は『予知』に関する血技を使い日巫女を探す為、茶屋に戻って準備しようとした所で日巫女を見つけたのだが、他の日巫女の眷族に教える前に日巫女に捕まった。

ばらしたら三百年は苛めると脅されたあげく、どうせなんだから、

と花見会場と化した茶屋で給仕役兼料理人ウェイトレス おつまみ係を務めていた。茶屋の備品の皿を、十分毎にゴミへと変化させながら。

ラマルティーンの話しかけている桜の木の上で、可笑しそうに笑いながら八人の観察が続けている、金髪碧眼の男。ドレイク。

彼は中立でも味方でも敵でもない、と意味不明な事を言い、『ボクの立場が決まったら正式に言うよ』と壱朗に聞こえる様に、他の真祖に声をかけて桜の樹の枝に座っている。

時々、壱与いよの作ったおつまみの皿と、酒を壱与いよに気付かれない様に盗んでいる。

おかげで壱与いよは、作っても運んでも足りないお酒とおつまみに首をかしげながら、茶屋の被害を増やしつつ頑張っている。

壱与いよ以外は全員が気付いてはいるが、あえて触れようとしない。それ故に彼は気配を隠す事もなく、壱朗を観察し、酒を楽しんでいた。

「旦那はん、これからどうしはるんえ？」

「そうじゃな、壱朗殿。聞かせて欲しい」

「とりあえず、現状把握が最初かな………ティア」

「はい。私が調べたところ、『血の十字架』による血を捧げても良いという人間の方との意思疎通は、上手くいっていません。それはブラッディクロス

『血の十字架』を着けた方が、吸われた後に死んでいる事件の発生件数に、問題があると思います。ですのでこういった事件の解決と、政府機関との情報共有を行います。まあ今のところ、こちらが一方的に送りつけるだけです」

「『血の十字架』ですか？あれは？効果が薄い？みたいですね？ないよりは？いいみたいです？」

『ブラッディクロス』
『血の十字架』は吸血鬼に血をあげてもいいと考える人間が、体

のどこかに貼る刺青シールである。一応それを貼っている人は、夜間は血を吸われに街を徘徊している、とみなされている。見えない所に貼っていても、吸血鬼には分かるようになっていいる。

これは、吸血鬼になりたい人しかやらない。しかし、若い人間は早期美容整形を受けている人間がほとんどの為、吸血鬼化にかなり抵抗がある。

誰だって今の自分の顔が 本来あるべき姿だったとしても醜くなるかもしれない可能性がある以上、嫌がるのは当然といえた。逆に年老いた人の中には成りたがる人が結構いるが、吸血鬼が吸いたがらない。理由は簡単だ。不味いからである。

結果、無理矢理襲う吸血鬼が減らないのである。それも痕跡を残さなければ、少しはマシなのだが。残す程度のやり方しか知らない者は、吸い方も荒くなり、殺してしまう事が多く、吸血殺人となる。そして、それを知り提供者が減り、また犯罪が増えるという、悪循環の繰り返しでもあった。

「とりあえず犯罪件数を減らしませんとどうにもなりませんので」

最初の懸念事項を述べる壹与。

「パパ、あ〜ん。……ん」

やはり訳がわからないので、壹朗の口に漬物を運ぶミーシャ。壹朗の顎を頭に載せられ、グリグリされる。何故かそれでも嬉しそうだ。

「あむ……………って事だな。ま、まずは犯罪者吸血鬼の捕縛と引き渡しだな」

同意し、方針を決めている壹朗。両腕は相変わらず動かない。

「しかし、それは反発を生まんかの？ 妾が眷属にも居そうじゃが……………」

自分の眷属をほったらかしにしている焦る、クロウディア。

「生むじやろなあ。儂はそれでもええと思うがな。秩序はどこかに必要じゃ」

眷属を統制しており、自分勝手な眷属は抱えていない『酋長』。
「ウチのそこは眷族は増やさんようにしてますさかいなあ……最後の子でも四百近い歳やよつて、ちゃんと守ってると思いますけど……」

自分の眷属の管理は、全て二世と壹いっ与よと任せの日巫女。腕は離さない。

「私はちゃんと、声をかけて誘う事を眷族に教えていますよ」
自信満々のラマルティース。

「……ラマルティース卿の所の三世さんは、えらく態度が悪かったですよ？」

生理的に嫌いらしく、ラマルティースには辛辣なティア。こちらも離さない。

「あ、あれはちょっと、気が立っていただけの筈だ！ 全員が何時もそんな訳じゃない………はずだ。たぶん」

教えてはいるらしいが、徹底できているか不安を隠せなくなるあたり、かなり怪しいだろう。

壱朗はこの反応を見て思う。吸血鬼はその存在を認められはしたが、本当の意味で人間との共存共栄は、かなり先になりそうだと………

第13話 酒盛り（後書き）

第14話 撒き餌（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第14話 撒き餌

ティアは壱朗の胸の上で、夢心地を楽しんでいる。

背中にかけた白桃色の長襦袢を、掛け布団変わりにして。

時折、壱朗が真剣な眼差しを、虚空に向けるので聞いてみた。

「壱朗様は、あれでいいんですか？」

「まあ、仕方ないよな。誰かが囷になる必要もあるしな」

「大丈夫だと思っではいても、私は不安です……………あつ、いあつ」
繋がったままの充足感を噛み締めながら、不安を口にするティア。
「ティア。毎回、吸血時に破瓜前に戻らなくてもいいぞ？」

壱朗は血を吸いたくなくても、人間の血は吸わない。多い時で、月に一度程しか欲しいとも思わない。そして吸う時は、ティアの血を吸う。ティアの姿は今までもずっと十八歳に固定されている。壱朗が吸血を望む日だけ、処女だった頃の体に戻る。コレならば、ティアはいつでも処女の血を捧げられた。吸血鬼の、だが。

「嫌です。壱朗様には、私の一番美味しい時の血を、飲んで欲しいんです」

「それだと、抱かれる時に痛いだろうに……………んっ」

氣遣う壱朗の言葉を唇で遮り、『もつと』と、食欲にねだる。

「っはあ。いいんです。壱朗様からもらうモノだけは、痛みも甘美なんです。壱朗様から頂くモノで、私を満たしたいんです」

「おい……………」

「言葉も、痛みも、血も、何もかも、もつと欲しい」

壱朗は薄々気付いていたが、確信する。

ティアの中に渦巻いているのは、日巫女への嫉妬だと。

「血を吸って下さい。そして、吸わせて下さい。今、繋がったこのまま、私の全部が壱朗様で満たされる様にして下さい」

壱朗は悔やみながら、ティアの頭を撫でてやる。ティアは絶対に勝手には血を吸わなかった。

か
10歳児の俺の血を、日巫女にも吸わせたのが引き金になった

三千年という時間は、長すぎたのかもしれない。

ティアは壱朗なしでは、もう、生きられ無かった。

他の真祖に壱朗の血を少しだけ送った時も、悔しさを感じていた。
『何故、私の壱朗様の血を分けなければいけないのか』と。

吸血鬼には、人間の血が必要。それは正解であり、嘘でもある。

別に吸血鬼は、血を飲まなければ死ぬという訳ではない。

吸血鬼も生物だ。そうした視点で見れば理解できるかもしれない。
吸血鬼と人間は同じ様に食事を行い、栄養素を取り込む事ができる。

吸血鬼が一度の食事で得られるエネルギー量は、人間の何倍もあるが。

吸血鬼は人間の尺度で計算されDNA改良した食品より、自然食品を好む。

吸血鬼にとって食品よりも、高エネルギーを得られるのが『血』である。

言うなれば、人間で言う高級食材だ。味わいも良く、エネルギー量も良い。

豊かな生活を楽しむには欲しい。そういった意味では同じだ。それと同時に『血』は嗜好品だ。

煙草、珈琲、紅茶、菓子。

人間の嗜好品とは違うが、摂取せずとも問題ないのは同じだ。

年代物の酒、蝶餃の卵キャビア、鷲鳥の肝脂肪フォアグラ、西洋松露トリュフ辺りが有名だが……

高級食材で嗜好品。そういったモノの本質を、知っているだろうか？

フォアグラなど、ガチヨウに無理矢理餌を食わせる事で、生産される。

人間だろうと吸血鬼だろうと、変わらない。

他の生物の都合ではなく、自分達の都合で解釈し、選り好みしているのだから。

吸血鬼も、別に人間の『血』でなくても構わない。

動物の『血』でも問題はない。もちろん、吸血鬼の『血』でも。

ただ、人間の血液が最も美味しく、人間が最もエネルギー量が多いというだけだ。

年齢は全盛期に近ければ近い程美味しくなる。

個人差はあるが、二十歳前後が美味しくなる時期となる。

血の味を比べると、

処女の女性の血、

精通前の男児の血、

処女の吸血鬼女性の血、

精通前の吸血鬼男児の血、

非処女の女性の血、

精通後の男性の血

非処女の吸血鬼女性の血、
精通後の吸血鬼男性の血、
動物の血

という順になる。

一番美味しいのは、『処女の二十歳前後の人間の女性の血』だ。

しかし、ある弱小吸血鬼は気付いた。

もしかすると、処女の年齢の姿で何千年も生きた吸血鬼の血は、
処女の人間の血の美味さを超えるのではないかと。

吸血鬼の場合は、真祖に近ければ近い程、美味となる。

その上、全盛期とは血の熟成により上がる為、歳を重ねる程、美味くなる。

そう考えたのだ。

この解釈は、結果から言うとき正しい。

残念ながら、この事実気付いた吸血鬼は力が無かった為、真実
には辿り着けなかったが。

この事実、自殺陣病を超えた吸血鬼にしか、適用されなかった
のだ。

壱郎が約六千歳の頃、ティアは千歳の誕生日を迎え、壱郎に我が儘を聞いてもらえる事になった。そして、壱郎は激しく後悔しながらも10歳くらいの姿になり、精通前の壱郎の血をティアに与える。その日、ティアは狂った様に吸い続け、壱郎は死を覚悟しかける事になる。

壱郎が、本気でティアを気絶させなければ、危なかった。

壱郎は自分でも飲んでみたが、別に何も感じない。

『好意』という要素があるからか、少年に対する特殊性癖があつたから、そこまでになったのではないかと壱郎は判断した。

『確かに好意はあります。でも、特殊性癖シヨクデはありません。それに、そんなレベルの話ではありません。その血の為に人類を滅ぼせと

言われたら、私は滅ぼします』と、自分は至って正気だと言うティアは、そう語った。

壱朗はティアに正気という言葉の意味を、辞書で調べ直させたい気分だった。

だが、後にティアが自殺陣病を乗り越えた時に、思い知らされる。

今度は壱朗がティアを殺しかけた。もちろん、吸血による失血死で。

ティアの『壱朗様？ 全部差し上げますから、死ぬ前に初めても貰って下さい』という言葉で我に返る。そして、ティアが吸ったの時の事も含め、詫びた。

自殺陣病を乗り越えた壱朗だからこそ、我に返ったのかもしれない。

ティアは心の中で、愛されているからだと思っていたが。

そして、壱朗が12歳の姿、つまり精通後の姿だった場合には、ティアが吸血しても何も起こらなかった。少し、美味しいという程度だったらしい。流石にティアの初めてを、実験などという理由で奪いたく無かった壱朗は、そこで諦め、訓練に切り替えた。

壱朗は10歳児の姿になったまま、ティアと共に吸血の欲望を我慢する訓練、吸血に慣れる訓練を二人で行った。狂おしい程の美味な血を一口だけ吸い、それを目の前にじっと我慢する。吸われる方は吸う方のほぼ全魔力を込めた符を持ち、襲いかかれば符を使う。という訓練を続ける事になる。

壱朗は自分を弱らせて訓練しなければ、ティアでは暴走を止められないので苦労した。しかし逆に、ティアは自殺陣病を自力で乗り越えた訳ではなかったので、慣れるまで百年以上費やした。ティアは特訓中の事を『死ぬ時はあんなのがいいです。凄く気持ち良かったです』と語ったが、壱朗は何故かティアに吸血されても、性的快感

は感じなかった。

これは二人が、処女の人間を吸血をした経験が少ない事から、起った暴走だと理解した。また、吸血による快感は上位の者から、下位の者へしか起こらない事も解った。真祖同士だとどうなるのかは、後^{のち}に知る事になる。

会合の一週間後、壹^{いよ}与^{アポトシス}の自殺陣病が起こり、日巫女、ティア、耆朗は確信する事になった。

壹^{いよ}与^{アポトシス}の血は自殺陣病を超えた時点で、味が多少ではあるが変わった。

耆朗、ティアの変化のように、劇的なモノではないが。他には二千歳を超えている者はいない。

他に確認する方法はなく、日巫女の希望もあり、日巫女には破爪前になつてもらふ為に棺に眠らせ、過去へ飛ばし、肉体年齢の調整を行った。

^{百歳未満の}生りたて真祖の血も試した。ミーシャには又^{猫の特大人形}イグルミを買い与える事と、耆朗の血を飲ませる事になったが。

そして、事実を確認する。耆朗はこの情報を外に出すべきかを悩んだ。

『^{アポトシス}自殺陣病を乗り越えた吸血鬼^{処女や精通前}の性的変化前の血は何にも勝る』という事実を。

そして、耆朗は自身を囷にする事を決めた。

数名の真祖の元に10歳の姿で出向き、血を舐めさせたのだ。効果靨面だった。

六千歳の耆朗ですら、^{アポトシス}自殺陣病を一乗り越えた^{ティア}処女の血に我を

失いかけたのだ。

アボトーシス 本能を抑えられ

自殺陣病も乗り越えていない者に、耐えられる筈が無い。

護衛、というよりも楽しむ為について来た日巫女は、完全に見下して教えてやっていた。『旦那はんの足元に跪いて、『血の熟成』させたいから、過去に跳ばさして欲しいて言うてみ？ 涙流して懇願しはったら、聞いてくれはるかもしれまへんえ？ その願い叶えてもらわはって、六千年程熟成でけたら、旦那はんみたいな血の味になりますえ？』と。

ウィルソン卿、ラマルティーヌ卿を含む、数名に体験させた様子を録画し、他の真祖へと送りつけた。時間凍結した血を添えて。もちろん、10歳児の姿の壱朗の血だ。

それだけで、眠ったままの真祖の二人と、未だ会えていない二人以外は中立を保つ事を約束しに来た。あくまでも中立だが。

ウィルソン卿など、舐めさせた瞬間に壱朗に飛びかかり、もっと吸おうとして『酋長』の重力により潰された。復活には三日はかかっただろう。ラマルティーヌ卿はティアが目の前にいた為、コレクシオンを守ろうと必死に耐えていた。

そして、昨日の晩は日巫女。今日はティアと、ベッドの中で問いただされた。

『何故、自分達を守る為に、壱朗自身を危険に晒すのか』と。

今の壱朗は、20歳の姿でティアと共にいる。

「守る、そう決めちまったからな」

ティアの頭を撫でながら、そう呟く。

「やっぱり、壱朗様を送り出さなければよかった……」

ティアは不満そうに言う。自分の事だけじゃないのが不満なのだ。

「それじゃ、俺とは会えないぞ？」

「むう！　じゃあ、もつと何度も千年を繰り返して、山ほど満足してから……」

壱郎が撫でる手に力を入れ、髪の毛をかき混ぜる。

「あつあつ。ちゃんと綺麗に見える様に整えたのに……」

更に不満そうに、頬を膨らますティア。

「どっちにしろ、もう無理だったさ。ティアに黙ったまま姉の事を秘密にしてにいるのも限界だったしな。だからそんな事言うな。四人で暮らすのも悪くないぞ。きつと」

「ミーシャちゃんに、性を意識させないで下さいね」

「させない為に日巫女と順番にしたんだろ？」

ティアはフンと、体ごと他所に向けようとするが、離れられない事に気付き、顔だけそっぽを向く。

夜は、もう片方がミーシャの面倒をみる。間違っても最中にミーシャが入ってこないように。どちらが壱郎と寝室を共にしようが、必ずそうするとティアと日巫女の間で、決めてあったのだ。ミーシャに性を意識させてしまい、自分達の回数が減ってしまわないように。

「こら。逃げるな」

「きゃつ。あつあつ。あああつ。んつもうつ。いいじゃないですかつ。」

ちよつとぐらいつあああつんつ」

壱郎に先を弄られ、腰を揺すられ、すぐにもとの体制に戻させられる。

「駄目とは言つてない。ちゃんと言えつて言ってるんだ」

「……………壱郎様の心の声は『言わないままできてくれた方がお仕置きできるし、苛めてティアを愉しめるなあ……………』って言ってますが……………？」

壱郎は『触れていると、何でも知ろうと思えば伝わってしまうのも、問題があるんだな』と頭の中で考えてみる。

「そうですね。何か考えますか？ 妨害用の札とか」

「声に出してない言葉と会話するな。仕方ないけどな」

そして、苛める為わざとはつきりわかる様に考えながら、口を開く。

「ティアに知られて嫌な事はない。困る事はあってもな」

本気で知られてもいいと思っっている事がわかってしまい、嬉しくなつて真っ赤になるティア。

「ほら、つい嬉しくなつて真っ赤になるティアも、可愛いからな」

「~~~~っ！」

ティアが背中にかけていた長襦袢を振り乱し、胸板を何度も殴り始める。壱朗は殴る手を受け止め、唇を重ね、絡め、流し込み、飲ませる。

壱朗は一緒に過ごしてきた三千年の間、馴れさせない様、気を付けていた。

おかげで今では、恥ずかしいと赤面するのが、直したくても直らない。

壱朗は、可愛いコレを絶対に無くさないように、と気をつけている。

ティアも恥ずかしいと思いつながらも、本気で直すそうと思つておらず、求められている反応だと薄々気付いていた。

しかし、二人は知らないが、本当は吸血鬼のDNAのせいだった。ヴァンパイアウィルス

自分の主に求められる存在に、適応されやすいのだ。

主に強くあれと望まれ強くなる者や、嫌われて弱くなる者までいるのだが、それには未だ誰も気付いていない。

そんな力がもう何年も前に働いて、悲劇は予定通り約四ヶ月前に起きた。

壹与は壹朗が、連れて来たという四世の吸血鬼を見ていた。そして、自分が置かれている状況が、良く分からなかった。

「私は何故生きてるんだと思います？」

目の前の四世の男は、全裸の上に『縛符』というティアの作った符が、全身に巻きついていて。ピラミッドに安置されていたミイラのように。

「貴方も死んでいる筈だったんです何で生きてるんです？」

四世の男は何も言えない。当たり前だ、口も符で塞がれており、視覚と聴覚以外は、何も役に立たなかったのだから。

「このままじゃ、せっかく預言通り、日巫女様が助かったのに……バれて、責任取らされたらどうすんだ！ ゴルア！ このグズがあ！ ちゃんと預言通り死んどけやあ！」

急に豹変した態度に、四世の男は訳がわからなかったが、何もできない。

「ちゃんと、預言通りにしてやつからよお。そこで待つてろよお？」

そう言つて、横に置いてある鞆から、銀色の杭と金槌を取り出した。

「コレでデメエの心臓をよお、しっかり破壊してやるよお。嬉しいだろお？」

そんな筈はないが、四世の男は逃げる事もできず、ただ心の中で死にたくないと呼んでいた。

壹与は銀の杭を持つ、自分の手が爛れるのも気にせず、四世の男の心臓付近に当てた。

そして、金槌を振りかぶったその時

「楽しそうだなあ、壹与ちゃんよ。おっと、それとも曾爺さんの仇つて言つた方がいいかい？」

全裸のティアが前にしがみついたままの、同じく全裸の壹朗が、

壹与^{いよ}の金槌を真後ろから止めていた。

「彼方様〜流石にその格好で〜来られますのはちょっとどうかと
〜」

所々間延びしたりしていなかったりと、内心では焦っているのか
もしれない。

「何でさっきまでみたいに…………… テメエの本性晒さねんだ、あ
あ？ オイ、三世の嬢ちゃんよ。 テメエ、俺の事、舐めてんのか？

あ？」

「……………っ」

「ハッキリせえや！ このダボがあ！ …… って感じかい？ 壹与^{いよ}
ちゃん？」

壹朗はティアを下ろし、ティアの身体中を『縛符』で覆う。もち
ろん、此処に来た時点で四世の男の目は『縛符』で覆われ、ティア
の肌は欠片も見せていない。

「壹朗様…………… 動けませんか……………」

『当たり前だ。動けたらその方がおかしい』 壹朗は目でそう言っ
ている。

「彼方様〜服の代わりとは言え〜そっちの方が〜えっちいですよお
〜」

間延びした喋り方を変えるつもりはないなのか、首だけを後ろに
向けて喋っている。

壹与^{いよ}の言う通り、ティアの身体のラインがきつちりと出て、かな
り扇情的になっている。というか、ほとんど隠れていない。

胸は指三本分程の符が、横一列になり隠しているだけだった。下
も大差はない。あとは身体を一周する様に、符の帯が巻きついてい
るだけだ。

「ちっ、途中でお楽しみを止められたんだ。これぐらいいいじゃね
えか」

「耄朗様、真面目にお願いします……あとで頑張りますから」

「お、マジか。じゃあ、全部ティアにして貰うか。よっし。そうと決まれば……『縛符』『護符』！」

今度はティアに巻きついてた符が剥がれ、横一列のまま、耄朗とティアを囲む。ティアは護符出で来たミニのワンピース、耄朗は護符のスラックスに上半身は裸のままだ。

「始めからこれをお願いします。全く、時と場合くらい考えて下さい。でないと私の苦勞が……『ティアさん』……なんですか？」

耄朗のお腹を拳でグリグリしながら、ティアはめんどくさそうに壹与を見る。

「ティアさんも大概かと思えます」

壹与は、耄朗の手は離されているのだが、振り上げた姿勢のまま動かない。

「その手。振り下ろしたければ、どうぞお好きに。何度でもやっていいですよ」

ティアは耄朗が止めた事を、あっさり許可してしまう。

「いいんですか？」

「ティアは遊びが足りないよな……ベッド以外では」
腹を殴られながら全く無視する耄朗に、壹与は金槌を振り下ろす。

「あゝあ、やっちゃった。これでもう駄目だな」

耄朗のいい加減な言葉とは裏腹に、四世の男は死んでもいなければ、傷一つなかった。壹与は知らなかったが、『縛符』と『護符』は一枚の札の表裏で出来ている。縛符で拘束されると外側からの攻撃から守られる。護符で守られると外側からの攻撃が束縛される。つまり、四世の男を殺したければ、耄朗の符を破る力が必要である。

「何ですか？ 私の手が爛れるほどの聖水で作られた銀の

杭ゝなのにな。しかも守るんですね。この四世を。」

「当然です。壱朗様が考え、私が作った符が、聖水や銀の杭如きで破れると？ 冗談はその身体と話し方、それと本性と、貴女の頭の中身だけになさい」

ティアはあつさりと言いきる。

「ティア、それだと冗談じゃない処は、何もないんじゃない？」

壱朗が念の為聞いてみる。

「何を言っているのですか。壱与さんの身体中に流れる日巫女主様の血と、彼女が着ている服があるじゃないですか。その二つは冗談ではなく、真実です」

さも当然。と言う様なティアの態度に、壱与は問う。

「……いつから？ 何時から？ 気付いてたんです？」

言いながら時間を稼ぐ、何故か動かない身体を動かす為に。

「どの事を言っているのかは分からないが。その話し方とそこに転がっている男の事なら、そいつを捕まえた時点から。その身体が子供に見えて、実は30歳の姿でもその身体だというのは、4つ目の『魔血晶』ができた後。壱与チャンが眠らされた後だな」

壱朗は楽しそうに解説するが、ティアは面倒くさそうにしている。

「だから言ったではないですか。自殺アポトーシス陣病を乗り越えた時点で話をしましょう、と。どうせ同じなのに、壱朗様が様子を見たいなんて言い出すから……」

「へえへえ。俺が悪いのよ、と。さつて、何でこんな事したんだ？

……あ、そうだった。言うの忘れてた。今、身体動かないだろう？ 自殺も勿論できない。しかも、理由に納得いかない場合、壱与チャンも、日巫女も眷属も全抹殺だからね。ちなみに、日巫女の希望だからキャンセルはないよ。

……よく考えて話すんだな。三世のガキ」

「……っ！」

壱与は完全に、全ての道を閉ざされた事を理解する。逃げる事も騙す事も。今の自分に許されるのは話し、その判決を待つ事だけだ、

と。

最後の一言で、壹与^{いよ}とすら呼ばない壱朗に、ティアは口を挟むのをやめる。

『此処からは壱朗様が八千年待った、曾お爺様の仇討ちなのだから』と。

日巫女は、寢室で横に寝ているミーシャの頭を撫でながら、傍に置いた『銅鏡』で事の成り行きを見守る。初めて見る壱朗の怒りを知る為に。

そして、二度と会えないかもしれない、自分の眷属の顔を記憶に残す為に。

第14話 撒き餌（後書き）

感想や評価を頂けますと作者が大変喜びます。
何卒よろしく願います。

実はこちらの執筆は『義賊と貴族がメイドと主』
という作品の合間のお遊びとして書き始めました。
お怒りはあるかもしれませんが、あちらにも一読の価値が……
ないかもしれません。
それでもよろしければあちらもご一読下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1259y/>

吸血鬼にも愛は必要？(仮)

2011年11月20日03時12分発行